

「ちや百姓はどうだ？」とマルケーロフが訊いた。

「百姓？ 今では百姓は恐ろしく吝嗇な金貸のやうな奴が多い。そして年々斯う云ふのが殖えて行くだらう。併し奴等唯自分達の利益しか考へてはゐない。その他の者は臆病で、無智文盲のものばかりだ。」

「ちや我々は何者を目當てにすればいゝんだ？」

ソローミンは微笑んだ。

「捜せよ、然らば看出されんだ。」

彼は殆んど始終微笑んでゐた。その微笑は彼と云ふ人間と同様に格別罪深いものではなかつたが、何となく意味ありげであつた。ネツダーノフに對しては彼は特別に打ち融けた態度をとつてゐた。この若い學生は一種の興味を、殆んど優情とも云ひいゝやうな感情を彼に起させたのであつた。

この夜の議論の間ネツダーノフは不意に赫つと赤くなつたり、怒鳴り出したりしてゐた。ソローミンは靜かに起ち上つて、大股に部屋を崩ぎつて行つて、ネツダーノフの頭の後側に開け放しになつてゐた窓を閉めた……。

「風邪をひくといけません。」と彼はこの議論家の狼狽した眼付に答へるやうに卒直に云つた。

ネツダーノフは彼がどんな社會主義の思想を彼の監督してゐる工場に導き入れやうとしてゐるか、労働者に對してどんな風な利益の配當をするやうに企てゝゐるかと彼に訊きはじめた。

「おゝ、貴方！」とソローミンは答へた。「私達は一つの學校と一つの小さい病院とを建てたのです。そしてそれに對して我々の主人はきつと熊のやうに腹を立ててゐるでせう！」

たつた一度ソローミンは夢中になつて、卓の上に乗つてゐる色々な物やインキ壺の傍に置いてあつた四十封度の重さの分銅までがたたく揺れた程その力強い握拳で卓を叩いた。彼は労働者のアルテル（露西亞に古く行はれてゐる産業組合）に被らされてゐる法規の不正と壓迫とについて話をきいた事があつたからであつた……。

ネツダーノフとマルケーロフとが「如何に行動すべきか」「如何に彼等の計劃を實行すべきか」について論じ始めた時、ソローミンはやつぱり好奇心をもつて、敬意を示しさへしながら傾聴してゐた。が、自分は唯一語をも云はなかつた。この議論は四時までつゞいた。思ふ事は残らず臆舌り盡したマルケーロフは他の事と關聯して、例の元氣旺盛な旅客キスリヤコフの事や、ます／＼興味を加へて来る彼の手紙の事を其れとなく仄めかした。彼はその幾通かを見せるとネツダーノフに約束して、その手紙は非常に長いし、字も讀み悪いし、その中には非常に博大な智識が盛られてゐるし、詩も

あるし、而も詰らない詩ではなく、立派な社会主義の傾向をもつたものだから、それも家で見るやうに届けてやらうとさへ云つた！ マルケーロフはキスリヤコーフの事から兵隊の事や、將校の事や、獨逸人の事に話を進めて、お終ひには砲兵に關する自分の論文の事まで持ち出した。ネツダーノフはハイネとビヨルツとの間の相反した傾向について、ブルドンについて藝術上の現實主義について論じた。その間ソローミンは傾聴してゐた。傾聴して、ちつと考へ耽つて、煙草を吹かして、たゞ一言巧妙な批評をも挿まらずに、相變らず微笑みを浮べながら、議論の根底に横はつてゐるものを何人よりもよく了解してゐるやうな顔付をしてゐた。

四時が鳴つた……ネツダーノフとマルケーロフとは疲勞し切つて居眠りをしないばかりであつた。が、ソローミンは少しも疲れた容子はなかつた。三人は別れた。が、その前に宣傳の仕事のために日商人ゴリユーシキンを町に訪ねやうと云ふ約束をした……ゴリユーシキンは非常な熱心家で、改宗する事をも約束してゐたのであつた！ ソローミンはゴリユーシキンを訪ねる價值があるか如何と云ふ疑問を出した。が、後から直ぐその價值があると云ふ事に一致した。

十七

使ひの者がシプヤーギン夫人の手紙をもつてマルケーロフを訪ねて來た時には、マルケーロフの家の人々はまだ眠つてゐた。彼女は色々な細かい家庭の出來事をその手紙に書いて、彼に貸した本を返して呉れるやうにと云つた……そして偶然思ひついたやうな風に「面白い事件」のいくさり……以前の戀人のマリオンナが家庭教師のネツダーノフと戀に落入つてゐると云ふ事……がつけ加してあつた。ワレンチーナ・ミハロウナは、唯笑戯にこんな事を云ふのではない……自分が現在自分の眼で見、自分の耳で聞いたのだと書いてゐた。マルケーロフの顔は夜のやうに暗くなつた……が、彼は一言も云はなかつた。彼は使ひの者に書物を渡すやうにと云ひつけた。やがてネツダーノフが階段を降りて來るのを見ると、彼は何時ものやうに「お早う」を云つて、約束してあつたキスリヤコーフの手紙の束を渡しさへしたとは云へ、彼はネツダーノフと一緒に留つてゐないで、「色々な仕事」の見廻りに出て行つた。

ネツダーノフは自分の部屋へ引返して例の手紙を讀んだ。この若い宣傳者は自分自身に就て、彼の強烈な行動について熱心に語つてゐた。彼自身の述べた所に依れば、彼はこの前の月に十一ヶ所の地方を旅行し、九つの町と二十九の村と五十二の小村と一つの農場と八つの工場を見て廻り、乾草の上で十六泊した。或る時は既に或る時は牛小舎でさへ夜を明した。(彼は括弧の中で蚤には食はれなかつ

たと説明してゐた。彼は泥小舎にも労働者の掘立小舎にも行つて見た。彼は至る處で話をしたり演説をしたり小冊子を配つたりしながら、その序に報告を集めた。或る事實は彼は直ぐその場で覺書に取り、又或る事實は新しい記憶術に依つて覚え込んだ。彼は十四通の長い手紙と二十七通の短い手紙と十八通の覺書とを書いた。その中の四通は鉛筆をもつて、一通は血でもつて、一通は煤と水とで書かれたものであつた。彼が凡てを斯う云ふ風に處理したのは、クキンチン・ジョンソンやカーレリアスやウエルリツキイや其他の文士や統計家の例に倣つて、現代の組織的な傾向を研究してゐたからであつた。次に彼は再び自分自身のこと、彼の幸運な事について物語り、如何な風に如何な説をつけ加へて、自分がフリーエーの「熱情の牽引力」の學説を完成したかを説明してゐた。彼は何人よりも先に「底岩」を看出した先驅者であること、「足跡を残さずして」この世を去る人間ではないと云ふこと、また二十二三の少年でありながら既に人生と科學の凡ゆる問題の解決に達したのを我れながら驚嘆してゐると云ふこと、自分は露西亞を顛覆させるだらうと云ふこと、「露西亞を震撼させなければならぬ」と云ふことを斷言してゐた。Dixii と彼は行のお終ひにつけ加してゐた。このDixii はよく彼の文章に現はれる言葉で、何時も二つの感動記號が附いてゐた。或る手紙の中に、一人の少女に呼びかけた形式になつてゐる社會主義的な詩が書いてあつてかう云ふ句で始まつてゐた。

「我れを愛せずして、この思想を愛せよ」

ネヅダーノフはキスリヤークフ氏の自惚に對してよりも、彼に對するマルケローフのお人善しな心辭に對して呆れずにはゐられなかつた……が、聽てこんな考へが浮んで來た。「こんな下らない趣味は呪ふべきだ！ だがキスリヤークフ氏には役に立つのかも知れない。」

三人の友達は食堂へ朝のお茶に集まつたが、誰れも話をやり出さうとはしなかつたので、前夜の議論の問題は波等の間に繰返へされなかつた。ソローミンは例の通り靜かに口を噤んでゐただけであつたが、ネヅダーノフとマルケローフとは心中不安に騒られてゐたのであつた。

お茶をお終ひにすると、彼等は町の方へ出立した。自分の戸棚に腰掛けてゐるマルケローフの例の老僕はいつものやうに悲しげな眼付で自分の主人を見送つた。

ネヅダーノフが知己にならうとしてゐる商人のゴリューシキンは、フョードシア宗派の舊い信者であつた金持ちの藥種卸商の息子であつた。彼は露西亞の所謂 *Journal* 語り露西亞氣質の放蕩者で、商賣には不適當な人間だつたので、自分の努力では少しも父親の財産を殖やさなかつた。彼はどつちかと云へば身體のがつしりとした、痘痕のある醜い顔付をした、豚のやうな小さな眼付の四十男であつた。彼は自分の云つた言葉にまごついたり、兩手を振り舞はしたり、足を揺すつたりしながら、苦

笑ひするやうな顔付をして、あたふた調子で物を云ふのであつた……そしてさう云ふ全體の印象が何となく非常に虚榮心の強い氣取屋の馬鹿息子であるやうに思はれた。彼は獨逸製の服を着、不潔な不仕舞な中で暮らしてはゐるが、客は丁寧に款待し、金持ちの知己は澤山あり、始終劇場に出入りして、下等な歌劇女優を「後援」して居り、そんな女優達と自分免許の珍妙な佛蘭西語で話をすると云つた場合で、かう云ふ風な點から自分を教養のある人間だと考へてゐた。彼の一ばん高い憧れは人氣を求めてゐる事であつた。ゴリューシキンと云ふ名前を世の中に轟かしたいと云ふ事であつた！ 曾てウァーロフやボチヨームキンが名を揚げたやうに、今カピトン・ゴリューシキンが何で名を揚げられない事であらう！ 生來の陋劣さをも抑制して、彼が其れとなく自慢さうに云つてゐる言葉に従へば、彼を Opposition (野黨……彼は最初この外國語を唯 Position と發音してゐたが、後になつてよく覺え込んだのである。) に投ぜしめたのは、そして又虚無黨員と交際するに至らしめたのは、この野心のためであつた。彼はこの上もない極端な意見を明らさまに饒舌り、自分の古い信仰を嘲笑ひ、精進祭週間に肉食をし、骨牌を弄び、三鞭酒を水のやうに飲んだ。そして彼は少しも氣に懸けなかつた。「私は必要な場合にはいつでも其筋の連中を買収する、どんな穴をも縫ひつけて了ふ、誰れの口をも、誰の耳をも塞いで了ふからだ。」と彼は何時も云ふのであつた。彼は録夫で子供もなかつた。彼の妹の子供達が

奴隷のやうにおづ／＼としながら彼に縋りついてゐた……が、彼は何時も彼等が無智文盲な田舎者とか野蠻人とか云つてゐて、少しも見てもやらなかつた。彼は餘り手入れの届いてゐない大きな石造の家に住んでゐた。或る部屋の家具はみんな外國製のものばかりで、又他の部屋にはベンキ塗の椅子とアメリカ皮の長椅子の外は何にも置いてなかつた。幾枚かの畫がどの部屋にもかゝつてゐたが、どれもみんな……紅い色の風景や、ピンク色の海の景色や、モラーの「接吻」や、紅い膝と肘とをもつた肥つた裸體の女や……拙劣な畫ばかりであつた。ゴリューシキンは家族がないに拘らず、彼の屋根の下には大勢の下僕や、色々な種類の従者を抱えてゐた。彼等を置いてゐるのは彼の豪氣のためではなくやつぱり自分が勢力を持ちたい慾望のためで、自分の命令の下に或る種類の民衆を据えて置いてその前で威厳を示したいからであつた。彼が思ひ上つた氣持ちでゐる時には「私の家來」と彼等と呼ぶのが常であつた。彼は一冊として書物を読んだことはなかつたが、學問的な言葉の云ひ表はし方に對して素晴らしい記憶力を持つてゐた。

若い連中が入つて行つた時ゴリューシキンは書齋に居た。長い外套を着て、口に葉巻を啣へながら、新聞を読んでゐるやうな風を装つてゐた。彼等を見ると、彼は直ぐに跳び起きて、顔色を赭くして、直ぐ何か飲食物を持つて來るやうに云ひつけたり、問ひをかけたり、笑ひ聲を揚げたり……それを見

んな同時にやりながら騒ぎ出した。マルケーロフとソロミンとは既に彼と知己であつた。ネツダーノフは彼と初対面であつた。彼が大學生だつたと訊くと、ゴリューシキンは又もや笑ひ聲を立て、再び彼の手を握つた。そして云つた。「そりや素敵です！ 素敵です！ 私達の勢力がだん／＼増して来た……學問は光で、無智は暗です。私は自分には少しも學問はないが、私は觀察力を持つてゐます……私が世間に出たのはその爲めです！」

ゴリューシキンは神経質な小心者であるやうにネツダーノフには思はれた……そして實際さうなのであつた。「氣をつけろ、兄弟カピトン！ 泥濘へのめり込まないやうに用心しろ！」彼が誰れか新しい人間に會つた時には先づ斯う思ふのが常であつたが、彼は直ぐに自分に歸つて、前と同じあたふたとした、足舌らずな、ごちやぜな調子で、ワシリイ・ニコラエヴキツチの事や、彼の性質の事や、宣傳の必要な事や、(彼は宣傳と云ふ言葉をよく覺え込んでゐたが、一語々々ゆつくりと發音した。)それから又彼ゴリューシキンが非常に手頼りになる氣の利いた一人の新らしい補充兵を見附け出したと云ふ事や、今やもう時期は迫つてゐると云ふ事や、手術刀の準備……(斯う云ひながら彼はマルケーロフをぢろりと見たが、マルケーロフは顔の筋一つ動かさなかつた。)はもう出來てゐると云ふ事やを話し出しながら、聽てネツダーノフに向つて、丁度あの偉い通信家のキスリヤーコフの手紙に

あつたと同じやうな巧妙さで自己讚美をやり始めた。彼はもうずつと前から無學文盲な階級の人々から離れてゐると云ふ事や、無産階級の人々の正しい事(この言葉をも彼はよく覺え込んで置いたのである。)をよく知つてゐると云ふ事や、彼は……自分の資産を殖やすために……商賣を止めて銀行業をやつてゐるが、それは前に云つた資金を共同運動に役立たせるため、詰り民衆の福祉のために何時でも役立たせるために用意して置かなければならないからで、彼はゴリューシキン自身は實際金と云ふものに對しては非常に輕蔑してゐるのだと云ふ事やを話した。

この時家僕が飲食物をもつて入つて来た。ゴリューシキンは尊大ぶつた咳拂ひをして、何か一杯召し上らぬかと勤めながら、自分が先づペツパー、ブランデーを一杯ついでぐつと呑み乾した。

客は響應を**受**た。ゴリューシキンは埒濱の鯛を二つ三つ口に押し込んで、調子の好い手附きで杯を空けながら云つた。

「さあ諸君、上等なマソンを一杯どうぞ。」

再び自分の方からネツダーノフに向つて、何處から来たのか、何時から何處に滞在してゐるのかと訊いた。ネツダーノフがシプアーギン家に居ることを聞くと、「私はあの紳士は知つてゐる。それは宜くない！」と彼は叫んだ。それから又S——縣の地主は誰れも公共的精神を持つてゐない許りか、自

分達自身の利益と云ふことさへ了解してゐないと罵りはじめた……彼の語調は強かつたが、不思議にも彼の眼は絶えずきよとく四邊を見廻はして、不安さうな色がありくくと浮んでゐた。ネヅダーノフには彼がどんな人物なのか、彼等にとつて何の役に立つのかさっぱり分らなかつた。ソローミンは例の通り黙り込んでゐた。マルケーロフは到頭ネヅダーノフが彼に向つて、何處か氣分でも悪いのかと訊いた程沈んだ顔付をしてゐた。それに對してマルケーロフは普通人々がよくさう云ふ答へ方をするやうに、君の關係したことはないが、如何にも氣色の悪い事があるのだと云ふことを分らせるやうな調子で、何にも氣分は悪くないと答へた。ゴリューシキンは再び誰れ彼れとなしに罵倒してゐたが、やがて今度は時代の人々を稱讃しはじめた。

「斯う云ふ天分のある人達が。」と彼は決めつけた。「今日我々の間には現れて居るんです！ 斯う天分のある！ あゝ……。」

ソローミンは彼の言葉を不意に遮つて、彼の云ふその尊い青年とは誰であるか、何處から彼はその男を連れて來たのか、と訊いた。ゴリューシキンは笑ひ出して、二度繰返へした。「あゝ、今に分りますよ、今に分りますよ。」そして今度は彼の方から、ソローミンの工場の事や、その所有主の「貧欲漢」の事を訊いた。ソローミンは唯「左様」とか「いや」とか答へただけであつた。やがてゴリューシキンはみ

んなの杯に三鞭酒を注いで、ネヅダーノフの耳に口を寄せながら「共和主義のために！」と囁いた。そして一息に杯を呑み乾した。ネヅダーノフは少しづつ呑んだ。ソローミンは自分は朝は酒を呑まないと云つた。マルケーロフは腹立たしげな、思ひ切つたやうな容子で、杯の最後の雫まで呑み乾した。彼はもう我慢がし切れないやうな顔付であつた。「論じなければならぬ本統の問題を餘所にして、此處で我々は何故時間を空費してゐるのか？」と彼は云はぬばかりであつた……。彼は卓を一つ叩いて、嚴然とした調子で叫んだ。「諸君！」そして今にも饒舌り出さうとした……

が、この瞬間、狐のやうな顔付をして肺病患者のやうな色をした、頭髪を奇麗に撫でつけた、南京木棉の商人服の男が、羽のやうに兩手をひろげて部屋へ入つて來た。その男は一同に向つて丁寧に頭を下げてから、小聲でゴリューシキンに何事かを告げた。

「今直ぐに行く。」と後者は急いで答へて、「諸君。」とつけ加へて云つた。「私はお許しを乞はなければ出來ない事が出來ました……番頭のワイシヤがほんの、ちよいとしたこと（ゴリューシキンは殊更ら冗談のやうな調子で斯う云つた。）で呼びに來ましたので、如何しても暫くの間あちらへ參らなければなりません。ですが、今日三時に私共で食事をさしあげたいと思ひますが、諸君いかゞでせう、居らして下さいますか。その時間からもうすつと暇なんてすが！」

ソローミンとネッダーノフとはどう答へて好いか分らなかつた。が、マルケーロフは前付にも聲にも前と同じ嚴然とした調子を見せてすぐ答へた。「勿論上ります。上らないのは餘り妙なこととになりますからね。」

「非常に有難いです。」とゴリューシキンはあたふたと云つて、マルケーロフは黙頭をしながらつけ加へた。「千留は何時でも黨の仕事のために捧げますよ……それはもう必らず！」

そして斯う云ひながら、彼の誠意の表示として、母指と小指とを突出しながら、右の手を二度振つた。

彼は入口まで客を送り出して、扉口に立寄りながら叫んだ。「では三時にお待ちします！」

「きつと上ります！」とマルケーロフだけが答へた。

「さて兩君。」と三人が往來に出た時ソローミンは云つた。「私は馬車を雇つて工場へ歸りますよ。私達は、食時までの間を如何すれば好いんです？ 無駄に遊んでゐるんですか？ それに實際あの商人は……私にはどうも……お伽話にある、毛を取るにも、乳を搾るにも、役に立たない山羊のやうに思われますね。」

「お、毛は可なり取れるでせう。」とマルケーロフは苦しげに云つた。「今も幾らか金を提供する約束

をしましたよ。それとも貴方にはあの男がお氣に入らないのですか？ 我々はさう氣むづかしくして

はゐられない。氣色が悪くて堪らないと云ふ程の扱ひをうけてやしませんよ。」

「氣色が悪いと云ふんぢやありません！」とソローミンは穏やかに云つた。「たゞ私が行く必要があるかと訊くだけです。だが。」と彼はネッダーノフをちらりと見て、微笑みを浮べながらつけ加した。「鬼に角歸らずにゐませう。良い友達と一緒に死さへ楽しい……と云ふ諺がありますから。」

マルケーロフは頭を揚げた。

「その間に公園へ行つて見ませう。好い天氣だ。民衆を眺めやうぢやないか。」

「宜いですね、行きませう。」

マルケーロフとソローミンとは先立つて、ネッダーノフは二人の後について歩き出した。

十八

ネッダーノフは奇怪な氣分になつてゐた。この二日間に、彼はそれ程多くの新らしい感動と、新しい顔とに接したのである……生れて初めて彼は一人の娘に接近して、疑ひもなく彼女と戀に落ちて了つたのである。そして又彼は疑ひもなく彼の全精神を捧げてゐた仕事の最初の一步を踏み入れたので

ある……では、彼は幸福を感じてゐたのであらうか？ さうではなかつた。彼は躊躇してゐたのか、怖れてゐたのか、當惑してゐたのか？ おゝ、決して左様ではなかつた。では少くとも彼は、戦闘が近づいた時に人を戦線の前列に突き進ませるあの興奮を、あの全生命の緊張を感じてゐるのであらうか？ 否、さうでもなかつた。一言にして云へば、彼は彼の黨の仕事に信じてゐたのであらうか？

「おゝ、呪ふべき藝術的氣質よ！ 懷疑よ！」と彼の唇は微かに噛いた。何故叫んだり怒鳴つたりする代りに、物を云ふのさへ斯様な神氣沮喪を、こんな倦怠を感じてゐるのか？ 彼が狂氣のやうに打ち消さうと努めてゐるこの内心の囁きは何物であらうか？ だがマリアンナは、あの貴い誠實な友達、あの純粹な熱烈な魂、あの奇妙な娘は、彼を愛してゐるではないか？ 彼女に出會つて、彼女の友情を、彼女の愛を得たことは限りなき幸福ではないか？ その上今彼の眼の前を歩いてゐるこの二人、それ程まだよくは分らないが、何となく心を惹きつけられるこの二人、マルケーロフとソローミンとは露西亞人の中の立派な人物であり、露西亞人の生活の立派な模範であり、彼等と知己になつた事はやはり幸福ではないか？ 然もこの不安定な、漠然とした、心に喰ひ入るやうな感じは如何したことであらう？ 如何して何故こんなに神氣沮喪してゐるのだらう？ 「お前が鬱々と物思ひに沈んでゐる厭世家だとすれば、」と彼の唇が再び咬いた。「お前はさぞ惨めな革命家にはなるだらう！ お前は詩を畫

いたり、お前のその詰らない思想や感情に苛立つたり悲んだり、内心の様な想像や凡ゆる些事に埋もれてゐなければならぬだらう！ だが、お前はお前のこの病的な神経の氣紛れや焦燥を、男らしい憤激とか信念を持つた人間の正しい忿怒とか云ふ風に思ひ違へをしてはならない！ おゝハムレット、ハムレットよ、如何すれば君の亡靈から逃れることが出来るのか？ 凡ゆる事に君の模倣をし、自分自身を呪ふ卑しむ可き享樂をさへ君に模倣してゐるのを、如何すれば止めることが出来るのか？」

「アレキセイ！ 親友！ 露西亞のハムレット。」と不意に聴き覺へのあるきい／＼云ふ聲が、さながらこの空想の反響でもあるかのやうに耳に入つた。「此處で君に會はうとは思はなかつた。」

ネヅダノフが眼を揚げることに、自分の前にパークリンが立つてゐたので吃驚した……パークリンはまるで片田舎の牧人のやうな服装をしてゐた。肉色の夏服を着、頸襟に飾もしないで、青色リボンのついた麥藁帽子を阿彌陀にかぶつて、ニス塗りの靴をはいてゐた！

彼は跛行を曳きながら直ぐとネヅダノフに近づいて、彼の手をとつた。

「何より先づ。」と彼は始めた。「公園の中だが、昔の例に依つて君を抱いて……接吻したけりやならぬい……一度、二度、三度！ さて所で君、明日は是非君を訪ねやうと思つてゐたんだが、今日此處で君に會つてよかつた。僕より君の住所は知つてゐたし、それに實はあの仕事のためにこの町は來たん

だからね……何故僕が来たかつて事は後で話さう……そこで、今後は君の連れの方に紹介して呉れ給へ、あの人達が誰れだか一寸云つて呉れ給へ、それから僕の事もあの人達に云つて呉れ給へ。色々面白い話はそれからしよう！」

ネヅダーノフはこの友達の求めに應じて、マルケーロフとソロミンとを彼に紹介して、二人の職業や住所を告げ、自分の住所へ自分の行動などの事も話した。

「それは素敵だ！」とパークリンは叫んだ。

「では一つ私はこんな騒々しい群衆……と云つた所で此處にはそれ程大勢もゐないが……こんな群衆とはずつと離れた、何時も私が物を考へたり自然の美を樂んだりする時に坐する人氣のないベンチへ諸君を御案内しませう。知事の家や、白と黒の縞に塗つた二つの番所や、三人の警官や、一匹二匹どころでない番犬なんぞが見える、素晴らしい眺望のいゝ所ですよ。ですが、私がこれ程熱心に諸君を喜ばせやうとしてゐる効能書に餘り驚いてはいけません。私はその……友達に云ひ草に依ると、露西亞人の頓智家の代表者なんですからね……私が跋行なのも全くそのためですよ。」

パークリンは「人氣のない」そのベンチへ友達を案内して、先づ二人の乞食女を追ひ拂つてから其處へ彼等を掛けさせた。この青年達はどつちかと云へば概して退屈な、殊に初めての會合では何時も

調子よく行かない「思想の交換」をやりはじめた。

「一寸待ち給へ！」とパークリンはネヅダーノフに向つて不意に叫んだ。「先づ僕が如何して此處へ来たか、それを君に説明しなけりやならん。君も知つてるやうに、僕は夏になると何時も妹を何處かへ連れて行くことにしてゐるだらう。所で僕は君がこの町の近所に来て住んでゐると聞いた時、この町には僕達の母方の親戚になる或る奇妙な夫婦の者が住んでゐることを思ひ出したんだ。僕の父親は小賣商人だつたが、ネヅダーノフは此事を知つてゐたが、パークリンは、他の二人のためにそれを話した。母親は貴族の出だつた。そしてその夫婦の者は僕等に會ひに来て呉れるやうにと毎年々々云つて寄越してゐたんだ！で、彼處へ行かう……と僕はそれを思ひ出して……あの夫婦は非常に親切者だから、母のためには何でもして呉れるだらう……斯くない、事は無い、と僕は斯う考へたんだ。そこで此通り出掛けて来た譯さ。ところが僕が思つた通り、此處は僕等にとつては實に言葉に盡せない程愉快なんだ！だがその夫婦が如何な人間か分るかね？どんな人間か？實際君も知己になる必要があるよ！一體君は此處で何をしてゐるんだ？何處で食事をするつもりなんだ？何んだつてわざ／＼斯様な處へやつて来たんだ？」

「僕等は此土地の商人の……ゴリユーンキンと云ふ男の處へ食事に招ばれてゐるんだ。」とネヅダーノ

フは答へた。

「何時に？」

「三時。」

「そして君がその男に會ふのは……詰り、その……。」とパークリンは微笑みを浮べてゐるソロミンと、前よりも一層陰鬱な顔付をしてゐるマルケローフとを意味ありげに眺めやつた……。

「いや、アリョーシヤ、この兩君に云つて呉れ……共済組合の暗號か何かでもつて……僕を警戒する必要はない……諸君の仲間の一人だ……つて事を話して呉れ……。」

「ゴリユーンキンも我々同志の一人なんだ。」とネヅダーノフは説明した。

「さうか、それなら素敵だ。だが三時までには大分時間がある。これから僕のその親戚の處へ行かうぢやないか！」

「何だつて？ 君は飛んでもない事を云ひ出すね！ どうして其様な事が……。」

「いや其様な心配する事はないさ！ 僕に何もかも委し給へ。全く一つのオアッスだよ！ 政治のセの字もなければ文學の匂ひもしない、近代的な事は何一つ影もさしてゐない家なんだ。君などが何處にも見た事のないやうな奇妙なすんぐりした小舎みたいな處なんだ。家も古代なら、人間も古代なん

だ。空氣その物迄古代なんだ……カテリーナ二世、髮白粉、維骨、十八世紀的の言葉、何を見てもすつかり古代式だ！ 同じやうな年頃ですつかり老ひ更けてゐる、皺一つ寄つてゐない、丸々と肥つた、身綺麗な丁度小さい鸚鵡の雌雄のやうな夫妻を想像して見給へ！ そして伶俐な人に對しても馬鹿者に對しても分け距てのない親切な夫婦を想像して見給へ！ 分け距てのない親切と云ふものは鬼もすれば道徳的感情が缺けてゐる所から來るのだと云ふ者があるが、僕はそんな譯の分らない説には賛成出來ないね。僕はたゞ我々のあの小さい老夫婦が優しい心其物だと云ふことを知つてただけ！ 子供は一人もないんだ。幸福な罪のない人達だ！ 町ではあの夫婦の事を『幸福な罪のない人達』と斯う云つてゐるんだ。彼等は二人とも今時逆も見られないやうな織地の良い縞の寛衣のやうなものを着てゐる。夫婦は兩方ともまるで同じやうな容子をしてゐる。たゞ一つ違つてゐるのは細君の方は頭にモプ・キャップ(十八世紀頃流行した婦人室内帽)を被つてゐるが、夫の方のスカル・キャップ(同様な頭巾)を被つてゐる。それにも妻君のと同じやうに縁飾がしてあるが、たゞ房がついてゐない。老人は髯を生やしてゐないから、若しこの帽子の違ひがなかつたら、どつちが何方だか見分けがつかない位だ。夫はフォームシカ、妻君はフキームシカと云ふんだ。確かに金を出して見に行つてもいゝ代物だよ、彼等はお互に想像にも及ばない程愛し合つてゐる。だが、誰れか訪ねてゝも行かうものなら、

「よくいらしつて下さすつた、實に嬉しい。」でもつて、出来るだけの愛想をして歡待するんだ！が たつた一つ禁物がある、それは煙草を吹かしてはならないんだ。それは、彼等が舊信者だからぢやない、煙草の匂ひが厭で堪らないからだ……彼等の時代には、誰れも煙草を飲む者はなかつたんだからね、金糸雀も矢張りあの家では禁物だ、あの鳥もその時代には滅多に居なかつたんだから……そして其れは非常に有難いことぢやないか！ どうだ、君は行くだらうね？」

「さあ、僕には分らない……。」とネツダーノフは始めた。

「まあ待ち給へ、僕はまだ話が残つてゐる。あの夫婦は聲もすつかり同じなんだ。眼をつぶつて聴いたらどつちの聲だか分らないね。唯フォームシユカの方がほんの少し、言葉付がはつきりしてるだけだ。ねえ、諸君。諸君は今偉大な事件を……恐らく凄じい戦闘を……開始しやうとしてゐるんでせう……それならその嵐の海に飛び込む前に、一寸水を浴びて見ては如何です……。」

「水溜りで？」とマルケーロフが口を入れた。

「水溜りだつて、それが何です？ 成程水溜りには違ひないが、新鮮ですよ、純潔ですよ。丁度草原の中にある池のやうなものです、その水は流れてはゐないが、底から泉が湧き上つてゐるから決して腐ることはない。我々の老夫婦は胸の中にさう云ふ泉を持つてゐて、何處までも純潔なんです。で、

諸君が一世紀若くは一世紀半の昔の時代に住んでゐる人達を見たいと思はれるなら、これから直ぐ僕に隨いて來給へと云ふんです。で無いと今に直ぐ、或る一日の或る時間が來ればその時間は二人にきつと一緒に來るに違ひないが……我々の鸚鵡は棲木から落ちて了ひますよ、すればそれと同時に古代的なものは何もかも失はれて、小さい殻のやうな小舎も取碎されてしまひますよ。そしてその在跡には私の祖母がよく云つてるやうに、人間の手細工が加へられてゐた場所には何時も一めに茂るものだと云ふ……葎麻や牛蒡草や薊や苦蓬や酸模などが茫々と生え茂つてしまひますよ。往來のあつた所もなくなるだらうし、他の人間が住むやうになつて、もう二度とあんな物は見られなくなるでせうよー」

「さう。」とネツダーノフは叫んだ。「では直ぐ行きませう！」

「僕もお伴します、大いに喜んで。」とソローミンは云つた。「さう云ふ所は僕の領分ではないが、併し興味がある。そして我々の訪問のために誰れも氣分を害ふものはないと云ふ事をパークリン君が保證するから、そりや……。」

「そんな心配をする事はありません！」と今度はパークリンが叫んだ。「あの夫婦はたゞ夢中になつて嬉しがるだけですよ……たゞ其れだけです。だから何も作法なんぞ構ひません！ 愉快な罪のない人

間ですからね。一々我々のために歌をうたつて貰ひませう。では貴方、マルケーロフさんも御賛放で
すね？」

マルケーロフは腹立しげに肩をしゃくり上げた。

「僕は此處へ一人残つてゐるつもりはありません！　どうか路案内して呉れ給へ。」

青年達はベンチを起ち上つた。

「あの紳士は恐ろしく氣難しい男だね。」とパークリンはネヅグノフに向つて、マルケーロフを目で
指しながら云つた。「蝗を……蜜をつけずに蝗を食つてゐる、バプテストのヨハネの聖像をつくりだが
あの男の方は。」と彼はソローミンの方を向いて頭を振つて見せながらつけ加した。「愉快な男だね！
何てにこ／＼した顔だ！　あんな風な愉快さうな顔を僕はまだ見たことがない、あゝ云ふ男は……自
分で左様しやうとは思はずに……人の上に置かれる人間だ。」

「あゝ云ふ人間は何處にもゐるだらうか？」

「減多にゐない、が、少しはゐるね。」とパークリンは答へた。

十九

フォームシユカとフキームシユカ、即ちフォーマ・ラウレンチエヅキツチとエフイーミヤ・パウロウ
ナ・スポーチエフは二人共牛粹の露西亞貴族の出であつた。そしてS——の町では殆んど一ばん古い住
民と考へられてゐた。彼等は極く若い時分に結婚して、もう古くから町の郊外にあつた彼等の祖先代
々の木造の家に住んで、一度も其處を離れたことはなく、生活様式も習慣も全然變へなかつた。彼等
とつて時代はちつと静止してゐるやうに思はれた。新しい事は何一つとして彼等のオアシスの中へ
は入らなかつた。彼等の財産は大して豊富ではなかつたが、農奴解放以前と同様に、今でも年に幾度
か家畜や食料品を百姓達に與へてゐた。一定の日には村の古老が地代と領地の森（實際はもうそんな
領地は失くなつてゐたのであるが）で射つて來たやうに思はせる一つがひの山鶴とを持つて訪ねて來
るのであつた。夫婦は客間で彼にお茶の饗應をして、羊皮の縁無帽と綠色の柔皮の手套を與へて、彼
を祝福するのが例であつた。スポーチエフの家には昔の農奴時代のやうに今でも大勢の家僕が置いて
あつた。立襟と鐵の小さい釦のついた、厚ぼつたい織物の短上衣を着た老僕のカルピオビツチは鼻歌
でもうたふやうな聲で「お食事の支度が出來ました」と吾げたり、全然古い習慣に倣つた姿勢で女主
人の椅子の後方にぼんやり佇んでゐたりするのであつた。彼の役目は食糶棚の監督で、色々な藥味や
生薑類やレモンを吟味することであつた。「農奴がみんな自由を得たと云ふ事をお前は知らないのか。」

と訊かれると、彼は何時も「土耳其人の間には自由つてもものがあつたつて事つたが、神様のお蔭でそんな馬鹿げた話には此方はちつとも關係なしだ」と答へるのであつた。プーフカと云ふ矮人の娘が主人達の、慰めのために養はれてゐた。ワシリエウナと云ふ年寄りの婆や。頭に大きな黒い頭巾を被つて何時も食事のところへ入つて来て——ナポレオンの事や、千八百十二年戦争の事や、反基督教徒の事や、白皮病の事や、その他色々な世間話を敲枯れた聲で話すのであつた。さも無ければ又、片手で頭を支へて、悲しげな容子しながら自分の見た夢の事や夢占の事や骨牌で占つた彼女の運命について話すのであつた。スポーツエフの家其物も町の他の家とは全然違つてゐた。それは何處も此處も櫨の木造りで、眞四角な窓がついてゐた。冬の川意の二重窓が一年中その儘取はづさずにあつた。家の中には控室や、廊下や、物置や、戸棚や、欄干のついた中二階や圓柱で支へられてゐる隠部屋や、裏坐敷や、地下室の凡ゆる種類の部屋があつた家の前には小さな柵があり、後方には庭園があつた。庭園には穀倉や、窠や、氷倉や色々な納屋があつた……詰り彼等にとつては完全な集であつた。斯う云ふ小舎には大して貯蔵品が入つてゐる譯ではなく、或る建物に碎れかゝつてゐたが、昔の通りに保存されて、すつかりその儘になつてゐた。スポーツエフはたゞ二頭の馬を持つてゐた。年寄つた灰色や、毛のもぢや／＼な馬で、一頭の方は老ひ毫れて白髪の斑らが出来てゐた。彼等は「動かない奴」と云

ふ名前をつけられてゐた。一箇月の中にやうやく一度位、その馬は町全體の評判になつてゐる奇妙な馬車につけられるのであつた、その馬車は正面を 角に切つた地球儀のやうな形をしてゐて、内側には疣のやうな大きな點々の一ぱいついてゐる外國産の黄色い織物が張つてあつた。その織物の最後の隅が恐らくエリザベス女皇時代にウーレヒトカリオンで織られたものであらう！ スポーツエフ家の馭者もやつぱり非常な年寄りで鯨油を塗つた皮の匂と松脂の匂をぶん／＼立てゝゐた。彼の髯は眼の直き下から生えてゐた、眉毛が瀧のやうに髯のあたりまで垂れ下つてゐた。彼は何をすることも非常に注意深い動作をする男で、鞆煙草を一つまみ吸ふのに五分、帯へ鞭をさすのに二分、「動かない奴」を馬車につけるだけに二時間以上かゝると云つて具合であつた。ペルフィシユカと云ふ名前であつた。スポーツエフ夫婦が馬車を走らしてゐる時には、少しでも坂路を登らなければならぬやうな事があると、彼は何時も慄えて了つた、(勿論下り坂へかゝつた時にも同じやうに慄えるのであつた。)馬車の革紐に縋りついて、二人共聲高に繰返すのであつた。「神様どうぞ馬に……馬にサムエルの力を與へ給へ、私共を羽のやうに、羽のやうに軽くなし給へ……」

スポーツエフは町の人々から偏奇人として、寧ろ狂人として眺められてゐた。そして事實彼等自身でも現代の生活に觸れてゐないことは自覺してゐた……が、彼等はそんな事を大して氣に懸けてゐるな

かつた。彼等は自分達が生れ、育ち、そして結婚した時代の生活を守つてゐた。たゞ一つその時代の特殊な習慣で彼等がその習慣に従はなかつたのは、彼等は曾て一度も人を處罰したこともなければ、人を鞭打つたこともない事であつた。彼等の家僕の中に若し泥棒とか酔どれとか云ふやうな仕末に終へない者が出来た時には、丁度悪い天氣にでも出會つたやうに、暫くの間はちつと我慢してゐるのであつた。そして最後に暇を出すと、他の主人の處へやるとかするのであつた。が、斯う云ふ不吉な事件は極く稀にした起らなかつたので、若しそんな事があると、それは彼等の生涯の一轉機となる程であつた。そして例へば、「そりやもう昔の事つてすが、私共の家にアルドーシユカと云ふ奴漢がゐたことがあります。」とか「私共の狐の尾のついた祖父の毛皮帽を盗まれた時分には。」とかこんな風に話すのであつた。スポーツエマは今でもそんな帽子を持つてゐた。尙もう一つ、舊い時代に著しかつた特色で、彼等に見られない事があつた。それはフキムシユカもフォームシユカも宗教的感情に富んでゐないことであつた。フォームシユカはヴォルテルの説を口にする程であつた。フキムシユカの方は教會の人々に對して死ぬ程恐怖を抱いてゐた。彼女の考へに依れば、彼等は縁喜の悪い眼を持つてゐると云ふのである。「坊さんがいらした時。」と彼女は云ふのであつた。「そこらを見て見ると、クリームが腐つてゐたんです！」で、彼等は滅多に教會へ行つたことがなく、唯カソリックの精進を守

つて、詰り卵や牛酪や牛乳で生活してゐた。これが町中に知れ渡ると、勿論あまり好い評判は立てられなかつた。が、彼等の善良さはそんな様々な蔭口を退ける事が出来た。變人のスポーツエマとか、氣狂ひとか馬鹿とか笑はれてゐながら、同時に彼等は尊敬されてゐた。然り、彼等は尊敬されてゐた……が、誰れも彼等を訪ねる者はなかつた。とは云へ、それは彼等にとつて大して苦痛ではなかつた。彼等は二人一緒でゐさへすれば少しも退屈を感じるやうな事はなかつた。それ故彼等は曾て分れてゐたこともなければ、他の友達を必要をもしなかつた。フォームシユカもフキムシユカもまだ曾て病氣をしたことがなかつた。そして若しどつちか少しでも身體の悪いやうな事があると、二人とも菩提樹の花を煎じて飲んだり、温めた油で胃を擦すつたり、足の裏に熱い牛脂を塗つたりした。すると直ぐ身體の加減が快くなるのであつた。彼等は其日／＼を同じやうに送つた。朝は遅く起きて、乳鉢のやうな形の小さい杯でチョコレートを飲んだ。「お茶と云ふものは」と彼等は決めつけるのが常であつた。「私達の時代から流行し出したんです。」彼等は二人で向ひ合つて腰掛け、何方かゞ話した。彼等はいつでも何か話の種を捜し出した。「さも無ければ「面白雑誌」や「世界の鏡」や「アオニード」の中から何か讀んだり、赤いモロッコ皮の表紙のついた金縁の小さいアルバムを眺めてゐたりした。このアルバムは銘に書きつけてあるやうに以前バルブ・ド・カブリーヌ夫人と云つた人の持つてゐた

ものであつた。このアルバムが如何して何時彼等の手に入つたのか、自分達でも知らなかつた。その中にはお定りのやうに色々な佛蘭西の詩や、露西亞の詩や散文の抜萃が書かれてあつた。例へば次のやうなシセロの感想はその一つである。「どんな意向でシセロは收税吏の役所に入つたのであらうか。彼は次のやうに説明してゐる彼が如何なる地位にあつても今まで尊敬されて來たのは彼の感情が潔白だつたからで、彼はそれを示すために神に祈り、その貴い完成を得るために最も神聖な束縛をもつて自分を抑制したのである。そして彼シセロは法律に依つて禁ぜられた快樂に耽らないことを苦痛としなかつたのみならず、萬人に缺くべからざるものとなつてゐた、最も軽い慰めをも抑制したのである。」この文句の下には斯う添へ書がしてあつた。「飢えと寒氣とのシベリアにて認む。」それからもう一つの好い見本は「チルシス」と題した詩であつた、それには次のやうな句があつた。

静かなる平和が凡てを掩ふてゐる、

露の雫は日の光にきらめき、

自然は新鮮なる冷氣に充ちあふれ、

けふの新らしい生命を與へてゐる！

たゞ一人チルシスは心静々として

いとも淋びしく、悲しく、憂愁と苦痛にとざされてゐる。
他の愛するアネタと別れたのだ、

そして何ものも彼の心を喜ばすことは出來ないのだ。

それから又千七百九十年に訪ねて來た或る船長の即興詩には「五月六日」と日附が起してあつた。

私は決して忘れないだらう

汝、愛らしき小村を

永久に私は思ひ出すだらう

どんなに楽しく時を過したかを！

お前の貴い主人の客間で、

どんなに優しい歡待を私は受けたらう！

年老ひたる、又年若き幾人かの婦人や

他の愉快な人々とともに、

言葉につくし難い貴い團樂の中に過した、

忘れることの出來ない幸福な五日間よ！

アルバム最後の頁には、詩の代りに胃の痛みや瘰癧や寄生蟲に對する藥劑の處方書が書いてあつた。スポーチエフはきつちり十二時に食事をした。それは何時も古風な料理ばかりであつた。凝乳の揚物や、胡瓜の辛いスープや、鹽漬のキャベツや、香の物や、燕麥の粥や、魚のバイや、糖蜜や、ジエリイ・ブツディングや、サフランと一緒に蒸した鶏や、蜜をかけたカスタードなどであつた。食後彼等は一時間ばかり晝寢をして、起きると再び向ひ合つて坐つて、蔓杏桃水を飲んだり、時としては『目叩き四十』と呼ばれてゐる沸騰水を、飲むと云ふよりは殆んどみんな壘から吹き出さしてしまつた。それが老人たちには非常な慰めであつたが、カリオピッチには大迷惑であつた。彼は『そこら中を』拭かなければならなかつた。そして彼は給仕や料理番に向つて長い間ぶつくさ云ふのであつた。彼は彼等をこの飲料を發明した責任者だと思つてゐたのであつた……「どんな甘い味があるか知らねえが、たゞ道具を汚すばかりだ！」聽てまたスポーチエフは何か讀みはじめたり、さも無ければ、矮人のブーフカの道化を面白がつてゐたり、昔流行した歌の合唱をやつてゐたりした。彼等の聲は全然同じやうに、痲高で、弱々しくつて、少し顫ひを帯びて、囁かれてゐた……別けても晝寢の後はさうであつた……が、美しい聲でないでもなかつた。さも無い時には又骨牌をやるのであつて、それは何時もきまつてクリベエチとかピケットとか二度休みのあるギストンとか云つたやうな古いやり方のものばかりであつた。すると間もなくサモワルが持ち出されて、彼等は晩のお茶を飲むのであつた……彼等はお茶を飲むことは一つの缺點であつて、この『支那の樂章』のために人々は弱くなつて行くのだと考へてゐたが、それでも時勢に従つて飲むのであつた。とは云へ、概して彼等は近代を非難したり古い時代を稱賛したりすることは控え目にしてゐた。彼等は生れた時代以外のどんな生活様式をも決して採用しなかつたが、他の人達の送らなければならぬ生活様式に對しては、それが如何なであらうとも、自分達の生活様式より優つてゐるものであらうとも、彼等はそれがために自分達の生活様式を變へるやうにと強いられない限りは、人々の生活を寛容するものであつた。七時が鳴ると、カリオピッチが夕食の支度をした。是非し無ければならないオクロシユカ（少し麥酒を含んでゐる飲料の壘）が出た。九時になると棒槌の厚い羽蒲團の上に丸々と肥つたフォームシユカとフキームシユカの小さい身體が、早くも平和な抱擁の中に横はるのであつた。そして安らかな眠りが彼等の臉に掩ひかゝつて来るまでさう長くはかゝらなかつた。凡ゆるものが古い家の中に靜まり返つて、麝香の香の中にランプがあか／＼と輝いて、蟋蟀が鳴きしきつて、そして心優しい、奇妙な、無邪氣な老夫婦は深い眠に入るのであつた。

この變人のところへ、即ちパークリンの言葉で云へば、彼の妹が世話をうけてゐる「鸚鵡」のこ

ろへ彼は今友達を連れて行つたのであつた。

彼の妹は懶巧な娘であつた。容色も悪くはなかつた。彼女の眼は優れて美しかつた。が、彼女の不幸な畸形な身體付が彼女の心を厭倒して、自信や喜悅やを凡て彼女から奪ひ去つて、疑ひ深い、片意地な人間にさへもしてゐた。彼女の名前も不幸にして奇妙な名前であつた。スナンヂュリアと呼ばれてゐた。パークリンはソファイヤと云ふ名前に變へさせやうとしたが、スナンヂュリアと云ふ名は駝背には丁度適はしい名だと云ふやうな事を云つて、彼女は片意地になつて、この奇妙な名前に固執してゐた。彼女は可なりな音楽家で、ピアノを上手に弾いた。「私の指が長いお蔭ですわ。」と彼女は何となく惱ましげに云ふのであつた。「駝背は大抵こんな指を持つてゐるんですよ。」

三人の客が入つた時は、フォームシユカとフキームシユカとが食後の書齋から起き上つて、暮苦桃水を飲んでゐたところであつた。

「さあ我々は十八世紀の中へ踏み込んで行くんだ。」とパークリンは呼んだ。間もなく彼等はスポーチエフ家の入口をはいつた。

實際彼等は髪白粉をつけた騎士や婦人達の黒い古びた肖像畫に充たされた低い青い屏風のやうなものに囲まれた、その玄關で十八世紀に出會したのであつた。ラヴァターに依つて紹介されたこの影

像畫は前世紀八十年代の露西亞に非常に流行したものであつた。こんな大勢の訪問客が——たつた四人ではあるが——不意にやつて來たと云ふことは、この浮世離れした家の中に一種異常な感じを惹き起した。靴や素足の性つたり來たりする音が聞えた。幾人かの女の顔が一寸のぞいては直ぐに隠れた。或者は戸をぱたりと閉め、或者は呻吟聲を出し、或者はくすくす笑ひ、或者は「退けよ、おい」と囁いたりした。

到頭カリオピツチが古ぼけた短上衣を着て姿を現はした。そして「客間」へ入る扉口を開けながら豊高に呼んだ。

「シーラ・サムソニツチ様が御客様をお連になりましたー」

老夫婦は家僕達ほどには狼狽しなかつた。四人の大きな男が不意に客間へ浸入したので、老夫婦は部屋の廣さが丁度具合良かったに拘らず、實際は幾らか狼狽してゐた。が、パークリンは色々な可笑な文句を使つて、急ぎでネツダーノフとソローミンとマルケーロフの三人を順々に紹介して、善良な温厚な人々で、「政府の方」ではないからと彼等を落ちつかした。フォームシユカとフキームシユカとは「政府の方」——お役人を特別に嫌つてゐたからであつた。

兄に呼ばれて姿を現はしたスナンヂュリアは、スポーチエフ老夫婦に較べると酷く狼狽して、堅苦

しくなつてゐた。老夫婦は二人一緒に、しかも全然同じ言葉で、客に向つて腰を下して呉れるやうにと云つて、何か召し下らないか……お茶か、チョコレートか、それともジャムを入れた沸騰水がいゝかと訊いた。お客達がもう少し前にゴリューシキンの家で中食をして来たばかりで、そして間もなく又其處で食事をするのだから何にも欲しくないと聞くと、老夫婦は強ひて彼等に勧めなかつた。そして両方とも同じ容子に小さい手を胸に組み合せて、話をやりはじめた。

最初の間、會話は多少だれてゐた、が、直ぐに活氣を帯びて來た。パークリンはゴリューシキンの有名な作品に書かれてゐる、その時満員だつた教會に入り込むことにうまく成功した市長の事や、それと同じやうに市長の口へ入り込む事に成功したパイの事やを話して非常に老夫婦を面白がらした。彼等は頬に涙が流れるまで笑ひ崩れてゐた。その笑ひ方も彼等は全然同じやうで不意に金切聲を揚げながら、お終ひに咳き入つて顔中を、赤にほてらしてゐるのであつた。ゴリューシキンから引用する話は、一般にスパーチエフのやうな人々の上に衝動的な効果を、奏するものであることをパークリンは知つてゐた。が、自分の友人達に見物させる以上に老夫婦を嬉しがらせやうとは思つてゐなかつたので、彼はその策略を變へて、老夫婦が直きに氣分が落ちついて愉快になるやうにと話を連んで行つた。

フォームシユカは自分の愛玩してゐる彫刻を施した木製の嗅煙草の箱を持ち出して客に見せた。そ

れには會て様々な姿をした三十六人の人物を見別けることが出來たのであつたが、その彫刻はもう既うの昔に擦り消されてしまつてゐた。が、フォームシユカには今でもそれのはつきりと見えた、そしてそれを見別ける事が出來たので、それを指して、「御覽なさい、此處に窓から外を眺めてゐる人物があります。分りますかな、頭を出して居りますぢや……」と彼は云つた。彼が爪の伸びた丸々とした指で指し示したその場所はと云へば、箱の他の部分と同様に唯つる／＼になつてゐた。やがて彼は自分の頭の上の方に懸けてある油畫に客の目を向けさせた。それには一人の狩獵者が駿馬に跨つて、雪の平原を駆け足で飛ばしてゐるところが側面から描かれてあつた。その狩獵者は青い吹き流しのついた。白い羊の毛皮の高い帽子を被り、天鵝絨で縁取りした駱駝の毛皮の上衣を着、金糸で刺繡した帯をしめてゐた。その帯には絹糸で刺繡した手套が挟んであり、銀と黒とで裝飾した一つの短剣が下つてゐた。非常に年の若い、見たところ體格の大きなこの狩獵者は、一方の手に紅い房の飾りをつけた大きな角笛を持ち、もう一方の手に手綱と鞭とを握つてゐた。馬の足は四本とも空を飛んでゐた。その足の一つ一つに畫家は念入りに蹄鐵を描き、爪まで細かに描いてあつた。「そして御覽なさい」とフォームシユカは馬の足の後方の白い地面に點々と描かれてゐる半圓形を例の丸々とした指でさし示しながら云つた。「雪の中の足跡……こんなものまで描いてありますぢや！」その足跡はたゞ四つし

か描いてなかつた……その後方には一つも描かれてなかつた……が、それは如何云ふわけなのか、その點についてはフォームシユカは何とも云はなかつた。

「ところで、その人物は私ですちや。」と一寸息をついて、和らいだ微笑みを浮べながら云つた。

「何ですつて？」とネツダーノフは叫んだ。

「あなた狩獵をなすつたことがあるんですか？」

「ありました……けれどもうすつと前にやつた限りですちや。一度馬が勢一ぱいに走つてゐる時私は投げ出されましたな、私は *Kempy* に負傷しましたちや、それでフォームシユカが慄えてしまいましたので……私に許さなくなりましたのちや。それ以來私はすつかり止めました。」

「何處を負傷なすつたんですつて？」とネツダーノフは訊いた。

「*Kempy*」とフォームシユカは聲を低くして繰返へした。

客はお互に顔を見合はした。*Kempy* と云ふのは何の事なのか誰れも知らなかつた。マルケーロフだけは、コーカサス人だかサアカシア人だかの帽子に下つてゐるぼや／＼した毛の房を *Kempy* と云つてゐるのを知つてゐたが、フォームシユカが負傷したのは帽子の房のためではないに違ひない！が、ネツダーノフは他の人々と同様に老人に向つてこの言葉の意味を正確に訊いて見やうと云ふ氣にはな

らなかつた。

「あんたがそんなに自慢にしてお見せになつたから。」とフォームシユカが不意に云つた。「さあ今度は私がお見せしますよ。」

考夫婦が呼び習はしてゐるやうに *bonheur du jour* (その日の喜悅) である古風な小形の書架、それは中高の蓋が抽出の後方へ、折りたゞめるやうになつてゐて、彎曲した細い脚のついた……書架から彼女は楕圓形の青銅の縁をはめた水彩の密畫を取り出した。その畫には年頃四つ位の眞裸體の小供が箭筒を肩にかけ、胸に青いリボンを通はして、小さい指先で箭の根を調べてゐるところが描かれてあつた。小供は頭髮が縮れてゐて、笑顔をして、少し流れ目をしてゐた。フォームシユカはこの密畫を客に見せた。

「これは私なのでございますよ。」と彼女は云つた。

「あなたですつて？」

「え、私でございます、子供の時分の。よく父の處へ來ました佛蘭西人の畫家がありました……立派な畫家でしたよ！ その人が私の父の誕生日に書いてくれましたのでございます。何て良い佛蘭西人でしたらう！ その後もやつぱりよく私共を訪ねてくれましたつけ。その畫家はいつも點頭をする

と一緒に片足をすまして、その足を少し浮かして頼はしながら入つて來ましてね、それから人の手に接吻なすつたものですよ。それからお歸りになる時には、御自分の手に接吻をして、左と右と、前と後とに點頭をして行かれましたよ。それは氣持ちのいい佛蘭西人でしたよ！」

彼等はその畫家の作品を稱めた。パークリンは何となく似てゐるのが分ると斷言した。

すると、フオームシユカが現代の佛蘭西人について話し始めた。今の佛蘭西人について話し始めて今の佛蘭西人はみんな非常に墮落してゐるに違ひないと云ふ意見を述べた！

「どう云ふ譯で？ フォーマ・ラウレンルエヴキツチ。」

「む、近頃あの人達がどんな名前をつけて居るか、それだけ知れば分りますよ！」

「例へば、どんなのです？」

「例へば、ノーヂヤン・ツァン・ロオラン（ノオザン・サン・ロオレン）本式の悪黨の名前ですちや。」

フオームシユカは突然訊いた。「今巴里の君主はどなたで居られますか？」

客は「ナボレオン」だと話した。それが老人を吃驚させて、彼を苦しめたらしかつた。

「何故そんなに吃驚なさるんです？」

「はて、あの方はもう大層年寄りな筈ぢやが。」と彼は始めた。が、きよと／＼四邊を見廻しながら口

を噤んだ。

フオームシユカは、ほんの少し、か佛蘭西語を知らなかつたので、翻譯でヴォルテールを讀んでゐた。（寢床の頭の下に入れた秘密箱の中へ *candide* の翻譯の寫本を隠してゐた。）が、彼は時偶に「それは、あんな、*fouasse Porquet* ですちや。（「疑はしき」とか「信じられない」とか云ふ意味の時にこの言葉を使つて」と云ふやうな言葉を口に出した。或る學識の深い佛蘭西人はこの言葉をきいて、それは千七百八十九年頃まで佛蘭西で使はれてゐた古い議會の言葉だと云ふことを老人に説明したが、その時まで人々は老人の文句に笑はされたものであつた。

會話が佛蘭西と佛蘭西人との事に移つたのを聞くと、フオームシユカは兼ねて考へてゐた一つの事を訊き正して見る勇氣を起した。彼女は最初マルケーロフに訊ねて見やうと考へたが、彼が非常に偏屈に見えたので、彼女はソローミンに訊かなければならなかつた……が、否と彼女は考へた。「あの人は町人らしいから佛蘭西語を知らないに違ひない。」で、彼女はネツダーノフに訊くことにした。

「あなた様、あなた様に一つ御訊き申したいことがございますが。」と彼女は始めた。「どうぞ御許し下さいませよ。彼の従弟のシーラ・サムソニキツチがねえ、私のやうな年寄りを馬鹿にいたしましてね、私の古臭い頭を笑ひますので。」

「どうしてですか？」

「ですから御訊ねするんですが、佛蘭西語で「それは何の事ですか」と訊かうと思ふ時には、

québec

…… québec …… québec …… cécia と云はなければならぬのでございませうか？」

「さうです。」

「それから québec …… que …… cécia と云つてもいゝのでございませうか？」

「えゝ、好いのです。」

「それでは唯 *rose cora* だけでは？」

「さう、それでも好いのです。」

「では、みんな同じ事なのでございませうか？」

「さうです。」

フキームシユカはちつと考へ込んでゐたが、やがて両手を擴げた。

「それちやシリユウシカ。」と彼女は到頭云つた。「私が悪かつた、お前の云つたのが本統だつたよ、だけど、あんな佛蘭西人なんぞ、情けない人達だ！」

パークリンは何か小唄をうたつて聞かしてくるやうにと老夫婦に乞ひ始めた……彼等は二人共笑

ひ出して、どうして彼がそんな事を思ひつゝいたのかと怪んだ。とは云へ、若しスナンヂユリアが鍵盤器で伴奏をやつて呉れよばと云ふ條件をつけて、直ぐに承知した……どんなものが好いかは彼女が知つてゐるからと云ふのであつた。最初誰れも氣がつかかなかつたが、客間の一つの片隅に小さなピアノの置いてあることが分つた。スナンヂユリアはこの「鍵盤器」の前に坐つて幾つかの諧音を叩いた……これほど間の抜けた、不快な、潤ひのない、亂雑な音色をネツダーノフは今まで會て聞いたことがなかつた。が、老夫婦は直ぐに歌ひはじめた。

「悲しみを味へと」

フキームシカが始めた。

「戀にひそめる悲しみを味へと」

神はわれ等に

戀ふる心をさづけしや？」

「誰れかこの世に」

フキームシユカは答へた。

「戀ゆる惱む心もて」

悲しみと嘆きを知らぬ者あらん？

「あらし、あらし！ 誰一人！」

フオームシユカは繰返した。

「懐みをこそ戀の道づれ

とこしへに！ とこしへに！」

と二人は聲をそろへて歌つた。

「とこしへに！ とこしへに！」

とフオームシユカは獨りで歌つた。

「素敵！」とパークリンは叫んだ。「これは一番目ですね。さあ第二番目を聞きかして下さい。」

「よろしい。」とフオームシユカは答へた。「だが一寸待つて下さい。スナンヂユリア・サムソウナ、顫音はどうだな？ 私の答への歌の後で顫音を弾かなくちやいけないんだが。」

「ようござんす、顫音を弾きませう。」とスナンヂユリアは答へた。

フオームシユカは再び始めた。

「戀人にこがれて、誰れか

悲しみと嘆きを知らぬ者あらん？

嘆きつ、泣きつ、尙もまた

嘆くこそ戀人なれや。」

と、今度はフキームシユカが歌つた。

「大海に漂ひ迷ふ船のごと、

悲しみに心さわぎて堪えられず。

何ゆゑにこの戀心にさづかりし？

苦しめとてか！ 苦しめとてか！ 苦しめとてか！

とフオームシユカは泣き叫んだ。そして彼は顫音を弾く間をスナンヂユリアに與へるために聲を切つた。

スチンヂユリアは顫音を弾いた。

「苦しめとてか！ 苦しめとてか！ 苦しめとてか！

とフキームシユカは繰返した。

そしてやがて二人一緒に歌つた。

「神よ、我が心を取り去りたまへ」

最早や！ 最早や！ 最早や！

最早や！ 最早や！ 最早や！

そして歌はまた別の韻音ともつれ合つた。

「素敵！ 素敵！」マルケーロフを除いた他の客達は一齊に叫んだ。そして手を打ち鳴らしさへした。「それはさうと、みんなは。」とネズダーノフは喝采が止んでから間もなく考へた。「自分達が道化役者のやうな眞似をしてゐるのに氣がついてゐるのか？ 多分氣がつかずにゐるんだらう。いや、氣がついてゐるのかも知れないが、「何も悪いことはないさ？ 誰れの害にもなりやしない自分達は人を喜ばしてゐるんだと云ふ風に考へてゐるかも知れない。だから穩當に考へれば、それは正常なことだ、少しも間違つてはゐないんだ！」

斯う云ふ風に考へて突然老夫婦に向つて感謝の挨拶をしまへした。その返禮として二人は椅子から起ち上りもせず、たゞ軽く會釋をしたゞけであつた……が、その瞬間、さつきから長い間こそく嘔吐の聲や駈け廻る音がしてゐた寢室か女中部屋になつてゐるらしい隣の部屋から、矮人のブーフカが年

寄の乳母のワシリエウナに連れられて姿を現はした。ブーフカはきい／＼聲を揚げたり道化た眞似をしたり。乳母の方は少しの間それを制してゐたが、やがて自分から煽てはじめた。

長い事苛々してゐるやうな顔付をしてゐた、マルケーロフは不意に吃とフォームシユカを振り向いた。(ソローミンの方は何時もより却つて更にこ／＼した顔付をしてゐた。)

「僕はあなたの教養を得た精神から考へて、(あなたはヴォルテールの崇拜者ぢやありませんか)だからして其れから考へて」と、彼は例の唐突な調で始めた。「あなたがこう云ふ憐憫を催させるやうな人……詰り僕が云ふのは不具者のことです……さう云ふ人を、慰みにしてゐらつしやらうとは思ひませんでした。」云ひながら彼はふとパークリンの妹の事を思ひ出したので、口を噤まなければならなかつた。その間にフォームシユカは眞赤になつて、咳いてゐた。

「だが……だが、それは私がさせたものではありません……彼女が自分で……。」と、その時ブーフカはマルケーロフに喰つて掛つた。

「どうしてあなたはそんな風に考へて、と彼女に舌つ足らずな聲で叫んだ。「私達の御主人を辱しめるんです？ この御夫婦は私のやうな哀れな者を庇つて、お家へ引取つて、養つてゐるんです、それがあんなの氣に入らないんですね。あなたは他人の仕合せを嫉つかんでゐらつしやるんです、一體あなたは

何處から来たんです、甲蟲みたいな髭なんぞ生やしたこの黒つ面のならず者。」かう云つてプーフカは肥つた短い指で彼の髭の格好を作つた見せた。ワシリエウナの齒の抜けた齒並が高笑ひのためにかくく動いて、その面白さうな笑ひ聲が次の部屋まで響いてゐた。

「勿論僕は差出がましくあなたを批評するではありません。」とマルケーロフはフォームシユカに向つて云つた。「哀れな者や不具者を保護するのはそりや善い行爲です。けれ共僕に忌憚なく云はせると、贅澤な暮らしをして、安逸と飽適とを貪つてゐて、同胞を救ふために指一本動かさないと云ふ事は、假令他人を害さないとしても、大した美德など云へたものぢやない。僕一個の考へを明らかさまに云へば、そんな種類の善行には何にも價値は置きません！」

するとプーフカは耳の遠くなるやうな吼聲を揚げた。彼女はマルケーロフの云つた言葉は一言も了解しなかつた。が、「この黒つ面奴」は自分の主人や自分を罵倒してゐるのだと彼女は考へた。ワシリエウナも何やら譯の分らない事を呟いてゐた。一方のフォームシユカはその小さい両手を胸の上に組んで、妻の方を振り向きながら、「なあ、フキームシユカ。泣き出さないばかりの調子で云つた。「お前この旦那の云ふことを聞いたかへ？ お前とわしとは罪人なのぢや、悪人で、偽善者なのぢや……わし達は贅澤に暮してゐるのぢや、おゝ！ おゝ！……わし達は町へ出て行つて、わし達の暮しを立てる

ために手に掃をもつて働かなくてはならんのぢや。おゝ！ おゝ！ おゝ！」この悲しい言葉を聞くのと、プーフカは前よりも一層大聲を吼え立てた。フキームシユカの眼元は皺が寄つて、彼女の口の隅が下へ曲つた。彼女はさながら自分の激情をすつかり吐出して了はうとするかのやうに深い溜息をついてゐた。

若しパークリンが遮り留めなかつたら、お終ひにはどんな風になつて行つたか知れなかつた。

「一體これはどうした事つた？」と彼は一方の手を振つて、聲高に笑ひながら始めた。「諸君は耻かしとは思はないんですか？ マルケーロフさんはほんの一寸笑談に云つたばかりですよ、たゞマルケーロフさんの顔付が嚴つものだから、多少強く聞えて、あなた方が眞に受けたんです！ もう好いちやありませんか！ エフイーミヤ・パウロナ、えゝ可愛いゝの、僕等はもう直ぐ出掛けなけりやならないんです、そこで好いですか、あなたには私達が出て行く前に僕等みんなの運を占つて呉れなくつちやいけません……占ひにかけちやあ、あなたはなか／＼偉いからなあ。おい妹、骨牌を取つて来て呉れ！」

フキームシユカはちらりと夫を眺めやつた。彼は今すつかり落ち着いて坐つてゐた。彼女も再び落ち着いた。

「骨牌の占ひ。」と彼女は云つた。「でも私はすっかり忘れて了ひましたよ、だつて、あんた、もう長い事骨牌を持つたことがないんですもの。」

が、彼女は自分からスナンチユリアに手を差し出して、古ぼけた奇妙はオンプル・カード（十七世紀から十八世紀に流行した骨牌）の一组を取り上げた。

「どなたの運を占ふのです？」

「みんなの運を。」とパークリンは云ひながら、「一方で斯う獨り言つた。何て移り氣な老ぼれだらう！」

……如何でも云ふ通りならせる事が出来る……全く可愛い婆さんだ！ みんなの運ですよ、お婆さんみんなの。」と彼は聲高に續けた。「僕等の運命や性質や未來を……残らず占つて下さい！」

フキームシユカは骨牌を切り始めたが、彼女は不意にそれを投げ出した。

「骨牌を使はなくつても宜うござんすよ。私は骨牌がなくなつてもあなた方の性質は一人々々分つてゐますよ。運命もやつぱり性質と同じこつてすよ、で、あの方は（彼女をソロミンを指した）何時でも冷淡な方。それからあちらは（彼女はマルケローフの方へ指先を向けた）赫つとなる危い方ですよ……（プーフカは彼に向つてべろりと舌を出した。）お前さんは（彼女はパークリンを眺めた）占ひを云ふ迄もない、自分で分つてお居るだ……氣紛れやさんさ！ こちらの紳士は（彼女はネツダーノフ

を指して躊躇した。

「どうなんです？」と彼は云つた。「どうか云つて下さい。僕はどんな風な人間ですか？」

「あなたはどんな風な方かと云ふと」フキームシユカは靜かに云つた。「あなたは人に可哀相に思はれる方ですよ……これでもうお終ひ。」

ネツダーノフは身顛ひした。

「可哀相に思はれるつて、どう云ふ譯で？」

「おゝー 私があなたをお可哀相に思ふんです……それだけの事なんです。」

「併し、何故です。」

「おゝ、何故つて、私の眼にさう云ふ風に見えるんですよ。あなたは私が馬鹿な事を云ふとお思ひになりますでせうね。あなたは赤い頭髮をしてゐらつしやるが、でも私はあなたよりは賢いつもりですよ……可哀相な方……これがあんなの身の上判断ですよ。」

みんなは黙り込んでゐた。お互に顔を見合せた、が、矢張り何とも云はなかつた。

「所で、左様ならとしませう。」とパークリンが叫んだ。「僕等はあんまり長くゐて、あなた方を扱はせたりやうな氣がします。諸君はもうお出でにならなければならぬ時間ですよ……僕は途中まで一緒に送

つて行きますから。では、左様なら、あなたの深切な歡待を有難うございました。」

「では左様なら、左様なら、お遠慮なく又いらしつて下さい。」とフォーシユカとフキームシユカとは同じやうな聲を揃へて云つた……それからフォームシユカは不意に復唱句を歌ふやうに云つた。

「いつまでも、いつまでも御氣嫌よう。」

「いつまでも、いつまでも御氣嫌よう。」とカリオピツチは青年達のために扉を開けながら、まるで思ひ掛けなく低音で調子を合せた。

そして彼等四人はいきなりその蹲まつたやうな小さな家の前の往來へ飛び出した。その時窓のところで、プーフカのきい／＼聲を揚げてゐるのが彼等の耳に入つた。「馬鹿……」と彼女は叫んだ。「馬鹿？」

パークリンは聲を立てゝ笑つた。が、誰れもそれに應じなかつた。マルケーロフは何か憤慨の言葉が出て來るのを待ち設けてどもゐるやうに、一人々々を順繰りにちろ／＼眺めてゐた。

ソローミンだけは例のやうに微笑みを浮べてゐた。

二十

「さて。」と一番先に口を切つたのはパークリンであつた。「僕等は今まで十八世紀の中にあつた。今度は今速力で二十世紀の中へ連れて行き給へ……ゴリユーンシキンのやうな進んだ人間は十九世紀の中に數へるのは相當でないからね。」

「おや、君はあの男を知つてるのか？」とネヅダーノフが訊いた。

「あの男の名聲は世界に赫々たりさ。そこで、僕が『今連れて行き給へ』と云つたのは、僕も諸君と一緒に行きたいと云ふ事なんだ。」

「如何してそんな事が出来る？ 君はあの男を知らないんぢやないか？」

「そんな事は構はんさ！ 諸君だつてあの鸚鵡の夫婦を知つてやしなかつたからね！」

「併し君が僕等を紹介したんだから！」

「さうさ諸君は僕を紹介し給へ。諸君は僕に何にも秘密にしとく事は出来やせんよ、ゴリユーンシキンは心持ちの開つ放した男だからね。あの男はきつと誰れでも新らしい人に會ふのを喜ぶよ。それに此S——ではそんな禮儀作法なんぞ守らなくつたつて好いんだから！」

「さうだね。」とマルケーロフは呟いた。「この土地の人達はいかに無遠慮のやうだ。」

パークリンは背づいて見せた。

と云ふのは、多分僕の事を云つてゐるんでせう……成程！僕は非難される値打ちがある。けれ共まあ聞き給へ、僕の新しい友人、君の腹立ちばい氣質のために君が苛々するその陰氣な考へを暫く抑へ給へ！そして特に又……。」

「だが君、僕の新しい友人。」とマルケーロフは語調を強めて遮つた。僕の云ふ事を聞き給へ……警告的に云ふが、僕は如何なる場合でも僕は笑談と云ふものには少しも興味を持つたことがない、殊に今日は左様です！それで如何してあなたには僕の氣質が分るんです！我々は暫くの間顔を見合つてゐただけではありませんか……おまけに今日初めて顔を合せたばかりで。」

「まあ、さう偏屈になり給ふな、がみく云ひ給ふな。君がさう云はないでも、僕は君を信ずるさ。」とパークリンは云つて、ソローミンの方を振り向きながら「お、君」と彼は呼んだ。「あの眼光の鋭いフキムシユカが冷淡な人だと云つたソローミン君……確かに君には何となく人の氣を爽快にするところがある……だから聞かして呉れ給へ、僕が誰れかに對して何か不愉快な事をするつもりでゐたか如何か、又その場の見境もなく笑談を云つたか如何か云つて呉れ給へ。僕はたゞ諸君といつしよにゴリユースキンの處へ行きたいと云ふ意味を仄めかしたゞだけだ。のみならず僕はそんな人に寄掛る人間ぢやない。マルケーロフ君が癩癩の立つた顔付をしてゐるのは僕の罪ぢやないんだ。」

ソローミンは最初一方の肩をしやくり上げ、それから又もう一方をしやくり上げた。それは如何答へて好いか直ぐには決し兼ねた時にする彼の癖であつた。

「さう何にも悪い點はない。」と彼は到頭云つた。「君は誰れの氣を悪くする事も出来ない人間だ、又氣を悪くするつもりも無いだらう、パークリン君で、君がゴリユースキンの處へ行つたつて何で悪い事があらう！私達はきつと君の従兄弟の家へ行つたと同じやうに愉快に有効に時を過すことになるだらう。」

パークリンは彼に向つて指を振つた。

「お、君もやつぱり氣を悪くしてゐるんですね！だが、君は君自身もゴリユースキンの處へ行くんでせう？君は行かないんですか？」

「そりや私は行きますよ、とに角今日は一日無駄になつちやんだから。」

「では、二十世紀へ on avant, marchons (前進せよ) 二十世紀へ！ネツダーノフ、君は進歩した人間だ、先導になり給へ。」

「宜しい、さあ行かう。だが一寸、餘り澤山同じやうな笑談を繰返へし給ふな、で無いと君の貯藏の彈藥が種切れになるといけないからね。」

「いや諸君のお役に立つために何時も澤山貯へてをるさ。」とパータリンは快活に答へて、彼が自分で云つた通り躍進ではなしに、跛行進をして急いで前へ進んだ。「面白い男だね全く」とソローミンはネヅダーノフと腕を組んで、彼の背後から歩き出した時云つた。「若し——そんな事は決してあるまいが——我々はみなシベリアへ送られるやうな事があつても、我々を愉快にして呉れる人間が一人ある」と云ふものだ。」

マルケーロフは黙つてみんなの背後を歩いてゐた。

斯う云ふ間に一方商人ゴリューシキンの家では、當世風な食事を出すために色々な用意が調へられてゐた。非常に油濃い、氣持の悪い魚のスープが作られ、色々な夾肉饅頭や細切料理が料理された。(ゴリューシキンは舊信徒ではあつたが、歐洲文明の頂點に立つ人間として、食事は佛蘭西料理にしてゐた、そして不潔の廉で俱樂部から解雇された一人の料理人を雇ひ入れてゐた。)そして一ばん大切な事は、三鞭酒の燻が取出されて氷に浸けられたことであつた。

家の主人はあたふたした容子をしたりくすくす忍び笑ひをしたりして青年達を迎へた。パータリンが豫言したやうに彼はパータリンの來たことを非常に喜んでゐた。「我々同志の一人でせうね」と彼はパータリンの事を訊ねた、そして答へを待たずに、「いや、勿論さうで無ければならない筈ですと？」と叫

んだ。それから彼は、今丁度或る……忌々しい……慈善會の事で始終彼を悩ましてゐる「變人」の知事處から歸つたばかりだと話した……そしてゴリューシキンはその知事に歡待されたのを喜んでゐたのか、それとも進歩したこの青年達の前で知事の事をうまく嘲笑することが出來たのを喜んでゐたのか、それは少しも分らなかつた。聽て彼は前に話した改宗者をみんなに引き會はした。が、今朝或る用件のためにやつて來た此改宗者と云ふのはあの口巧者な、狐のやうな顔付をした、弱々しい小男に過ぎない事が分つた。そしてゴリューシキンはこの男を番頭のワシーヤと呼んでゐた。「あの男は誠に無口ですが。」とゴリューシキンは五本の指をすつかり彼を指しながら云つた。「我々の黨の仕事のためには誠心誠意盡して居るのです。」ワシーヤは唯點頭をしたり、顔を赧らめたり、目をしば叩いたり、愛想より笑つたりするだけで、彼が無智文盲な馬鹿者であるのか、それとも極印つきの悪黨であるのか、これも矢張り少しも分らなかつた。

「ですが、まあお食事をどうぞ、諸君お食事をどうぞ。」

一同の者は先づ最初側戸欄に乗つてゐる色々な美味さうな料理を氣儘に選んでから食卓に就いた。スープが濟むと直ぐにゴリューシキンは三鞭酒を命じた。それは燻の口から凍つた塊となつた杯の中へ滴つた。「我々の……我々の大事業のために。」とゴリューシキンは給仕人達の方に向つて、他の局外

者に對して見張り番をしてゐるやうにと云はないばかりに目をしば叩いたり頭を振つたりしながら叫んだ。改宗者のワーシヤは矢張り黙り込んでゐた。そして彼は椅子の端に腰掛けてゐたに拘らず、彼の保護者が云つたやうな「誠心誠意を盡してゐる」と云ふ信念とは全然かけ離れた野卑な振舞ひをしてゐて、やたらにがぶ／＼と酒を煽つた……が、他の者は饒舌つてゐた。殊に主人とパークリンと、取り分けパークリンは饒舌つてゐた。ネツダーノフは心中に苛立してゐた。マルケーロフは多少調子は違つてゐたが、先程スポーチェフの家で腹を立てゝゐたと同様に腹立たしげな思々しさうな顔付をしてゐた。ソローミンは傍觀的な容子でみんなをぢろ／＼眺めてゐた。

パークリンは一人で悦に入つてゐた。彼の巧妙な饒舌はゴリユースキンは大ひに喜ばした、ゴリユースキンはこの「面白い男が」その隣席に坐つてゐるネツダーノフにそつと囁いて、彼ゴリユースキンの無駄使ひの事を手酷く罵倒してゐるとは少しも氣がつかずにゐた。パークリンと云ふ男は、人の保護を受けなければならぬ一種の馬鹿者だと自分勝手に想像してゐた……パークリンが彼の氣に入つたのは半ばは其のためであつた。だから若しパークリンが彼の隣席に坐つてゐたら、指で彼の肋骨を搦つたり肩をぼんと叩いたりしたに違ひなかつた。さう云ふ風で彼は卓越しに彼に目をしば叩いて見せたり彼の方を向いて頸づいて見せたりした……が、彼とネツダーノフとの間には先づマル

ケーロフが嵐雲のやうに構へて居り、その次にソローミンが坐つてゐた。とは云へ、ゴリユースキンはパークリンが物を云ふたんにに痒痒でもしたやうに笑ひ出して、胸の上を叩いたり、青黒い齒齦まで露出しにしたりして、待ち構へてゐたやうに留め度もなく笑つてゐた。パークリンは自分が何を望まれてゐるかを直ぐに感づいた、そして凡ゆる事柄と凡ゆる人間とを罵倒し初めた（それは彼に取つては性に合つた仕事であつた）……保守黨、自由黨、官吏、辯護士、裁判官、地主、地方會議、地方集會、モスクワ、ペテルブルグなどを罵倒した！

「さうです、さうです」とゴリユースキンは合槌打つた。「全くです、全くです！ 例へば此土地の市長なんぞ本統に馬鹿者ですよ！ とても助からない野呂間だ！ 色々と話をして……奴には一言も解らないんです。知事だつて同じこつてすよ！」

「此處の知事は愚物ですかね？」とパークリンは訊いた。

「今愚物だつて云つたおやありませんか！」

「ぢや君は彼が豚のやうにぶ／＼呻吟つたり鼻でく／＼物を云つたりするのに氣がついてゐますかね？」

「え、何ですつて？」とゴリユースキンは少しまごついて訊いた。

「おや、君は知らないんですか？ 露西亞では偉い文官共に豚のやうにぶう／＼呻吟るし、偉い軍人は鼻先でくん／＼鯁舌りますよ。それから非常に地位の高い人物だけは一時にぶう／＼呻吟つたり鼻先でくん／＼云つたりしますよ。」

ゴリユーシキンは涙が流れ落ちる程げら／＼笑ひ崩れた。

「そうです、さうです。」と、は啞つた。彼奴は鼻でくん／＼云ひますよ、奴は軍人ですからね！」

「ふん、この間抜けが！」とパークリンは心中に獨言つた。

「何もかも我々に掛つちや減茶々々だ さあ思ひ切り遣つ附けませう。」とゴリユーシキンは少し経つてから吼えた。「何もかも減茶々々だぞ、何もかも！」

「最も尊敬するカピトン・アンドレイイチ。」とパークリンは好意を見せた調子で云つた……（彼は今ネヅダーノフに向つて、「どうだ、あの男があんなに腕を振り舞はす容子は、まるで上衣の脇下が緊まりすぎてゝもゐるやうにさ」と囁いたばかりであつた。）「最も尊敬するカピトン・アンドレイイチ。實際中途半端な手段はもう何の役にも立ちませんよ！」

「中途半端な手段！」とゴリユーシキンは不意に笑ふのを止めて、猛烈な顔付を装ひながら怒鳴つた。今はたゞ一つの手段があるだけさ。根本から引つこ抜いて了ふんだ！ ワーシヤ、飲め、野良犬飲

めよ！」

「この通り飲んでますよ、カピトン・アンドレイイチ。」と番頭は杯をこくりと呑み乾しながら答へた。

ゴリユーシキンも杯になみ／＼一杯飲み乾した。

「よく彼奴は腹が張り裂りさけないこつたね。」とパークリンはネヅダーノフに囁いた。

「しよつ中呑んでるからだ。」とネヅダーノフは答へた。

が、呑んだのはこの番頭一人だけではなかつた。段々と酒の利目がみんなの上に現はれた。ネヅダーノフも、マルケーロフも、ソローミンさへも次第に會話の仲間になつて行つた。

最初の間ネヅダーノフは、ちつと堪えてゐられない自分の性格と、何にもしてゐない自分の行爲とに對して、一種の嫌悪と苦痛とを覺えながら、最早や單に議論をしてゐる時ではないと云ふ事や、既に「行動」すべき時が來てゐるのだと云ふ事を主張しはじめた……彼は既に「岩床に達してゐるのだ」と云ふ事を仄めかしさへした……そして嚙て自分が矛盾してゐる事は氣にも留めずに、現在の社會が自分達が眞に信頼し得る分子は何者であるかと訊ね出して……自分にはまだ看出すことが出来ないから、それを示摘して見せてくれと云つた。

勿論、何にも答へは得られなかつた。得られる答へが無いためにはなく、今彼等はてんでに自分の事を饒舌り立てゝゐたからであつた。マルケーロフは例の疲れたやうな、腹立しげな聲で一本調子な執拗な呻吟聲をつゞけてゐた。へまるで玉菜を刻んでもゐるやうだとパークリリンは云つた。彼が何を考へてゐるのか、明確にはどうしても分らなかつた。一寸言葉が途切れた時「砲兵」と云ふ言葉を聞き取る事が出来た……恐らく彼がその編制上に発見した缺點を論じてゐたのであらう。獨逸人と傳令使とが例のやうに一緒に鎗玉にあがつてゐるらしかつた。ソローミンさへ猶餘と云ふ事には二つの方面があると論じてゐた、一つに猶餘して何事とも爲さないと、もう一つは事件を押し進めながら猶餘してゐるとだと云つた。

「漸進的であることは我々にとつて何の役にも立たん。」とマルケーロフは氣難しげに云つた。

「漸進的と云つても今迄のは上から行つてゐたのだ。」とソローミンが云つた。「我々は今下から行はうとしてゐるんだ。」

「そんな事が何の役に立つもんか！ 何にもなりやしない！」とゴリューシキンは、猛烈に割り込んだ。「我々は今直ちに、直ちに行動しなければならぬんだ。」

「ぢや本統に君は窓から飛出さうと思つてゐるのか？」

「飛び出すとも！」とゴリューシキンは絶叫した。「飛び出すとも！ そしてワシヤも飛出すんだ！ 僕が云へば、此男もきつと飛び出す！ えゝ？ ワシヤ、お前は飛び出すか、飛び出さないか？」

番頭は三鞭酒をぐつと一杯呑みました。

「あなたの仰しやるところなら、何處へでも参りますよ、カピトン・アンドレイイチ。私は決して考へ直したりはしません。」

「宜し！ それなら俺はお前を羊の角のやうに捻ぢ曲げてやるぞ。」

さう斯う云つてゐる中に、酔ひどれ仲間の言葉で「メベルの塔。」と云つてゐる奴が始まつた。大きな叫び聲や怒鳴り聲が起つた。

靜かに和らいだ秋の空氣の中に素早く渦を巻きながら落ちて來る初雪の片々のやうに、ゴリューシキンの食堂の熱した零圍氣の中に……進歩、政府、文學、租税問題、教會問題、婦人問題、裁判所問題、古典主義、現實主義、虛無主義、共產主義、國際問題、僧侶議員問題、自由主義、資本主義、行政、團體、同盟等の事から結社のことまで……凡ゆる種類の言葉が交互に縫れ合ひ、響き合ひし始めた！ゴリューシキンを有頂天にさせたのは正しくこの騒ぎのためであらう。事態の眞の目的は、彼にとつては此點に存してゐるらしかつた……彼は翹歌を奏してゐた！「さあ我々が進むんだ、退け、退かない

と殺してさふぞ！……カピトン・ゴリユーシキンのお通りだぞ。」とでも云つてるやうに。番頭のワーシヤは到頭べろんくに酔ひどれで、皿へ鼻面を突込んで、ぐづぐづ饒舌り出したり、不意に又憑かれた人間のやうに「Profymnasium づてなあ一體何でえ？」と怒鳴り出したりする迄になつてしまつた。

ゴリユーシキンは突然立ち上つて、野卑な癡猛さと自慢らしい顔付の中に、それとなく疑惑と恐怖との他の感情を持つてゐるらしい奇妙な表情を交へながら、眞赤になつた顔を反りかへらして怒鳴つた。「私はもう千留犠牲にする！ ワーシヤ持つて来い！」それに對してワーシヤは小聲で答へた。「盛んに遣つてるな！」

パークリンは蒼い顔をして、汗をにじませながら（彼は一時間のお終ひの十五分の間番頭と飲みつぐらをしたのである。）席から跳び立つて、頭の上へ兩手を振りあげながら調子はづれに叫んだ。「犠牲にする！ 犠牲にする」と云つたな！ おゝ、神聖な言葉に對する墮落だぞ！ 犠牲とは何だ！ 誰れが貴様の前などに跪く奴がある、貴様の命令する義務を果すやうな勇氣を持つてるものは誰れもないぞ、少くとも此處にゐる我々の中にはな……だのに、眼ち切れるやうな利益を慾しがつてゐるこの野卑な下劣な金囊奴が、一掴みの金を撒きちらして、犠牲にするとは何の云ひ草だ！ それで感謝

を求めたり桂の冠を貰ふつもりでゐるのか……卑劣な奴だ！」

が、ゴリユーシキンはそれを聴かなかつたのか、或は、パークリンの云つた事が解らなかつたのか、それともそれを談とでも思つたのか、彼はもう一度怒鳴つた。「さうだ、千留だぞ！ カピトン・アンドーレイツチの言葉は神聖だ！」彼は不意に横の衣兜に手を突込んだ。「そら此處にある、現金だ、さあ取つて呉れ、そしてカピトンを忘れないで呉れ！ 彼は或る點まで興奮すると、子供のやうに自分の事を第三人稱で云ふのが常であつた。ネツダーノフは酒の福れた卓の上に投げ出された札を拾ひ取つた。これでもう後には何にも話す事もなくなり、夜も更けてしまつたので、皆は起上つて、帽子を取り上げて、部屋を出た。

外へ出ると、みんなは眩暈を感じた、殊にパークリンはそれが強かつた。

「さて、我々はこれから何處へ行くんだ？」と彼は幾らか辛く感じながら、努めてはつきりと發音した。

「諸君は何處へ行かれるか知らないが。」とソーロミンは答へた。僕は家へ歸る。」

「君の工場へか？」

「さうだ。」

「今頃、こんな真夜中に、歩いて…」

「そんな事は何でもないさ。」此處いらには狼もゐなければ山賊もゐやしないからね。それに僕は身體はしつかりしてるから歩けるさ。夜中に歩くのは涼しくて好いものだ。」

「だが、四露里あるぜ。」

「なあに、五露里あつたつて何でもありやしない。ぢや左様なら、諸君！」

ソローミンは外套の釦をかけ、帽子を額まで引下して、葉巻に火をつけた。そして通りを大跨に歩き出した。

「我々は何處へ行く？」とソローミンはネツダーノフに振り向きながら云つた。

「僕は彼の處へ行く。」と彼は胸に手を拱いて、ちつと突出つてゐるマルケーロフを指した。

「僕等は馬と馬車とが待たしてあるんだ。」

「おゝ、そいつは素敵だね！……ぢや僕は、オアシスへ、フォームシユカとフキームシユカの處へ歸らうよ。時に僕は君に云はうと思ふことがあるんだ、何だが君には分るまい？ それはね彼處にも氣狂ひがゐれば、此處にも氣狂ひがゐるつて事なんだ……唯あの氣狂ひ、十八世紀の氣狂ひは、二十世紀の氣狂ひよりは露西亞の精神に近いだけだ。左様なら、兩君。僕は酔つぱらつてゐる、僕を怒つて

呉れ給ふな。序にもう一言僕には云はして呉れ。僕の妹のスナンヂユリア程親切な善良な女は何處へ行つたつてゐないと云ふ事をさ。兩君は彼女がどんな女か分つたらう……駝背で、スナンヂユリアと云ふ名前だつてことが。この名前は世の中では何時もどう云ふ意味に使はれてゐるか知つてるかね？ 勿論彼女にはよく相當してる名前なんだ。セント・スナンヂユリアと云ふのがどんな人だつたか知つてるかね？ 監獄を訪ねて囚徒や病人の傷を癒して歩いた美德の高い女だ！ ぢや左様なら！ 左様なら、アレキセイ……可哀相がられる男！ それから、ふむ……自分で士官と云つて居られる厭人家君！ 左様なら！」

彼はあつちへよろ／＼此方へよろ／＼しながら、オアシスの方へ跛行を曳いて行つた。マルケーロフとネツダーノフは馬車を待たして置いた立場を探して、馬をつけるやうに云ひつけた。そして半時間の後街道に馬車を走らしてゐた。

二十一

空は低い雲に掩はれてゐた。全くの暗夜ではなく、前方には路の上に盛りあがつたやうな轍の跡が微かに見えてゐたが、左右の凡ゆるものは陰影の中に没して、離れ／＼な物の輪廓が大きな入り亂れ

た暗の斑点と一つになつて溶け合つてゐた。朦朧げな、不味な夜であつた。風が濕つぽい疾風のやうに烈げしく吹きつけて、雨の氣配と廣々とした穀物畑の匂ひとを送つて來た。或る地境ひの標示になつてゐる櫛の林を通り過ぎて、横道へ曲らなければならなくなつてから、馬車を驅るのが一層困難になつた。狭い路の跡形が時々全然分らなくなつた……馭者は一層そろ／＼と馬車を走らしてゐた。

「路を間違へなければいゝが。」と今まで黙り込んでゐたネズダーノフは云つた。

「いや、大丈夫路の間違ふことはない！」とマルケーロフは答へた。「一日に二つも不幸が來るものぢやない。」

「ぢや、第一の不幸は何です？」

「だつて君、我々は一且無黙に送つてしまつたぢやないか……君はそれを何とも思はないのか？」

「さう……勿論……あの忌々しいゴリユーンキン奴！ 僕等はあんなに酒を飲まなければ可つた。今僕は頭が……づきん／＼痛くてならない。」

「僕はゴリユーンキンの事を云つてるんぢやないんだ。あの男は兎に角幾らかの金を我々のために出したんだから、我々の訪問は少くとも何物か得るところがあつたのだ。」

「では君はパークリンが彼の……所謂鸚鵡のところへ僕等を連れてつたのを忌々しく思つてゐるのか

ね？」

「そんな事は何にも忌々しく思つてやしない……と云つて喜ばしいとも思はない。僕はそんな詰らなゝい事に興味を持つやうな人間ぢやない……僕はそんな事を不幸だの何だのと云つてるんぢやないだ。」

「では、如何な事だね？」

マルケーロフは何とも答へなかつた。唯彼は身體を隠さうとでもするやうに馬車の隅つこへ身を縮こめたゞけであつた。ネズダーノフは彼の顔はつきり見ることが出来なかつた。たゞ彼の突出てゐる髭が黒い横線のやうに見えたゞけであつた。が、ネズダーノフは今朝からマルケーロフの心中に何か觸れてはならないやうな事が……或る漠然とした人知れぬ苛立たさがあるのに氣がついてゐた。

「話したまへ、セルゲイ・ミハーロヴキツチ。」と彼は暫く黙り込んでゐた後で始めた。「君は今朝僕に讀んで見ると云つて渡してくれたあのキスリヤコフ氏の手紙ね、あれを君は非常に讚嘆するかね？ 僕に云はせると……云ひ方が粗暴なのを許したまへ……あんな物は全然紙屑だね！」

マルケーロフは眞直に身を起した。

「先づ第一に。」と彼は腹立たしい聲で始めた。「僕はあの手紙について君の意見に同意することは出来ない。僕はあの手紙を非常に注意すべきもの……信念の籠つたものと考へてゐる！ 第二にキスリヤ

「コフは、苦んでゐる、身を粉にして働いてゐる、更に彼は信じてゐる。我々の仕事を信じ、革命の來ることを信じてゐる。僕は君に一つ云はなければならぬ事がある、アレキセイ・ドミトリウキツチ、僕には君が……我々の仕事に對して極めて微温的であるやうな氣がする、君がそれを信じてゐないやうな氣がしてならない。」

「どうして左様思ふのだ？」とネヅダーノフはゆつくりと明確に云つた。

「如何して？ 君の云ふ凡ての言葉や、君の凡ての態度はさう思はせるんだ！ 今日ゴリュエーシキンの家で、眞に信頼し得る分子の何者であるか？ 我々には分らないと云つたのは誰れだ。君だ！ その何者であるかを指摘して見せろと云つたのも、君だ！ それから君の友人のあの嘴をむき出す尾無し猿の幫間のパークリン氏が、目を空へ向けて、我々の中には犠牲をうける者などは一人もないと公言し始めた時、彼の尻押しをしたのは誰れか、頸づいて見せて讃成の意を表したのは誰れか、君ぢやないか、君が自分の欲してゐる事をどんな風に云はうと、君が知つてゐることを、如何な風に考へやうと、それは君の勝手だ……併し僕は自分の信念に忠實であらんがために、他人を裏切らないために、生活上の凡ゆる享樂を、戀の幸福をも抛つこと……何のある事を知つてゐる！ おゝ、勿論今君にはそんな事は出來ないが！」

「今？ 何故今です？」

「ふむ、ごまかしては可かんよ、幸福なドン・ファン、姫桃の冠に飾られた色男！」とマルケーロフは馭者のゐる事を全然打ち忘れて怒鳴つた。馭者は馭者臺から此方へ振り向きはしなかつたが、何もかもはつきり聞えたに違ひなかつた。が、實際はその瞬間、馭者は背後に坐つてゐる旦那達の口論よりも道路の方に酷く氣をとられてゐた。そして彼は注意深くと云ふよりも寧ろ、びく／＼しながら首をのけ反らして後方へたち／＼と跳り上つてゐる中央の馬を鎮めようと努めてゐた。馬車はこんな處にある筈のない岩の傾斜へ滑り下りやうとしてゐるのであつた。

「失敬だが、僕には君の云ふ事がさつぱり解らない。」とネヅダーノフは云つた。

「僕の云ふことが解らない！ は、は、は！ 僕は何もかも知つてゐるよ、色男君！ 僕は君が昨日誰れと戀の場面を演じたかを知つてゐる、君の立派な容子と巧い言葉とに迷はされたものが誰れかと云ふことを知つてゐる……夜の十時過ぎに……誰れか自分の部屋へ君を連れてつたからやあんと知つてゐる！」

「旦那！」と馭者が突然マルケーロフに聲けた。「手綱を持つて下せえ……私は降りて一寸見て來ます……道が間違つたやうですから……どうも此處は谷間のやうだな、それとも何處か……」

馬車は實際一方に傾いでゐた。マルケーロフは馭者の渡した手綱を引つ摘んで、前のやうに大聲で續けた。「僕は君を非難する譯ぢやないんだ、アレキセイ・ドミトリウキッチ、君は勿論……うまく手に入れたのさ、君は悪い事をしてるんぢやない。だから僕は唯君が我々の仕事に對して微温的なのは怪しむに足りないと思つてる事だけを云つて置く。僕はもう一度云ふがね、君は心中に何か外のものを持つてゐるのだ。僕から云へば、何が若い娘の心を惹きつけるのか、彼等が何を欲してゐるのか豫知することは逆も出来ない……」

「僕にはやつと君の云ふ事が解つた。」とネツダーノフは始めた。「君の苦んでゐるのが解つた。僕等を探偵して直ぐさま君に知らしたのが誰れかと云ふ事も分るよ……」

「だが、大して價値のある問題ぢやないね」とマルケーロフはネツダーノフの云ふ事を耳にもかけないと云つたやうな風をして、一言々々殊更らゆつくり發音しながら續けた。「精神的にも、肉體的にも……何にも異常な性質があるわけぢやない……いや！ 唯不正な子供の悪運……私生兒の悪運に過ぎない！」

このお終ひの言葉をマルケーロフはあたふたと口早に云つた、そして忽ち死んだやうに黙り込んでしまつた。

ネツダーノフは暗の中で自分が眞蒼になつてゐて、顔がびく／＼痙攣してゐるのを感じた。彼はマルケーロフに飛びかゝつて、咽喉を締めつけてやりたいのをやつとの事で抑へつけてゐた……「この侮辱は血で洗ひ淨めなければならぬ、血で……」

「路がわかりました！」右の前車輪のところへ、姿を現はしながら馭者が叫んで。「少し間違へたんです、左へ寄り過ぎたんです……もう大丈夫です！ もう直ぐ着きますよ、お宅までたつた一露里ぐらひなもんでさ。どうぞお靜に坐つてゐて下せえ。」

彼は馭者臺に攀ち上り、マルケーロフから手綱をうけ取つて、馬を向き直さした……馬車は二度ばかり烈しく揺れた後、すつと自由に滑らかに進んで行つた。暗が左右に分れて上へ揚つてゆくやうに見えた。煙の匂が漂つて來た。前の方に小さな丘のやうなものが小高く見えた。やがて燈影がぼつりと一つ瞬いて……そして見えなくなつた……と又他の煙影がちら／＼として……犬の吠えるのが聞えた。

「わつし等の小舎でさ。」と馭者が云つた。「そら、とつと行け、可愛い猫め！」

燈影の数が一つ又一つとだん／＼多く見えて來た。

「あゝ云ふ侮辱をうけたからは。」とネツダーノフは到頭始めた。「君にもよく解つてるだらうがね、セ

ルダイ・ミハーロツキツチ、僕は一晚だつて君の家で過すことは出来ない。僕はかう云ふ事を君にお願いするのは不愉快ではあるが、馬車が君の家へ着いたら、町へ歸るために馬車を僕に貸してくれ給へ。明日僕は手紙を受け取る宿を捜さう、その上で僕は君の期待にそむかないやうな通知を君に送る。」

マルケーロフは直ぐには答へなかつた。

「ネツダーノフ」と彼は低くはあるが絶望的な聲で不意に云つた。「ネツダーノフ、お願いだから僕の家へ来て呉れたまへ、僕は跪いて君の許しを乞ふ外はない！ ネツダーノフ！ 忘れて呉れ給へ……アレキセイ！ 僕の氣狂ひ染みた言葉を忘れて呉れ給へ。おゝ、若し僕がどんな悲しい氣持ちであるか知つてさへくれたら！」とマルケーロフは拳で胸を叩いた。そしてそれが空虚な呻吟聲を押し出したやうに思はれた。「アレキセイ！ 寛大に考へてくれ給へ！ さあ握手を！ 僕を許すしるしに握手をしてくれ給へ！」

ネツダーノフは手を差し出した……躊躇しながらではあるが手を差し出した。マルケーロフは泣き出さないばかりになつてその手を握りしめた。

馭者はマルケーロフの家の階段の前で馬車を留めた。

「ねえ、アレキセイ。」とマルケーロフはそれから十五分の後自分の部屋で彼に話してゐた……。「兄

弟。」と彼はこの親密な距てのない言葉で彼を呼んでゐた。ネツダーノフが自分の競争者として成功した事を知り、遂ひ今しがた烈しい侮辱を與へ、滅茶滅茶に切り苛なまして殺してやりたく思つてゐたその男に對する斯う云ふ好意の籠つた親密な調子の中には、もう取返しつかない絶交の心持ちと、謙遜した苦しい哀願と、同時にまた或る要求とがこもつてゐた……ネツダーノフはその要求の何であるかを知つて、同じやうに親密な調子でマルケーロフを呼んだ。

「ねえ、アレキセイ！ 僕はさつき戀の幸福を罵倒した、一身を擧げて自分の信念に奉仕しなければならぬと思つて、それを斥けた……が、あんな事を云つたのは謔言だよ、出鱈目だよ！ 僕にはまだ會つて戀など云ふやうな申出でをしたことはなかつたのだ、斥けなければならぬやうな事は何にもありやしなかつた！ 僕は生れながらにして幸福には縁がなかつたのだ、そして今でもやつぱりその儘なんだ……そして恐らくさうある可きが當然ならう。僕はその幸福を得ることが出来ないと思つれば、何か他の事をしなくてはならないんだ！ 君は兩方とも……愛する事も愛されることも出来れば……同時に黨の仕事に奉仕することも出来るんだから、君は實に素晴らしいよ！ 僕は君を羨む……僕はそんな譯には行かないんだ。僕には駄目だ、君は幸福だ、君は幸福だよ！ 僕にはそんな事は出来なう。」

マルケーロフは低い椅子に腰掛けて、頭を垂れ下げて、兩側に手をぶらりと下げながら、押しつぶされたやうな聲で斯う云つた。ネツダーノフは夢でも見てるやうな気持ちで彼の前に立つて。マルケーロフが彼の事を幸福だと云つたに拘らず、彼は少しもそんな幸福を感じなかつた。

「僕は青年時代に欺されたことがある……」とマルケーロフは續けた。「その女は美しい娘だつたが、僕に寝返りを喰はした……誰のためかと云へば、或る獨逸人のためにさ！ 或る傳令使のためにさ！だが、あのマリアンナは……」

彼は言葉を切つた……初めて彼は彼女の名を口ばしつた、そして其れが彼の唇を焼きつけたやうに思はれた。

「マリアンナは僕を欺きはしなかつた。彼女は僕を愛してゐないときつぱりと云つた……彼女が僕などを愛する筈はないさ！ 彼女は自分の方から君に心を捧げてゐたんだ……だが、それが何だらう？ 彼女の自由ぢやないか？」

「おゝ、ちよつと待ちたまへ！」とネツダーノフは叫んだ。「君は今何と云つた？ 彼女の方から心を捧げてゐるつて？ 君の妹が、どんなことを手紙に書いて寄越したか知らないが、僕は君の前に誓つて……」

「僕は肉體的にどうと云ひはしない、たゞ精神を、魂を君に捧げたと云つたんだ。」とマルケーロフはネツダーノフが叫び聲をあげたのを何故ともなく愉快に思つたらしい調子で遮つた。「そして彼女が左様したのは好い事だ。所で僕の妹のことは……勿論、中傷的な気持ちは少しも持つてはゐない……少くとも彼女はそんな事は少しも氣にかけてゐない、が、彼女が君を憎んでゐることは事實だ、そして又マリアンナをも憎んでゐる。彼女は嘘は云つてゐない……が、そりや、彼女にとつては當然なことだ！」

「さうだ」とネツダーノフは心中に考へた。「彼女は私達を憎んでゐる。」

「萬事好い結果になつた。」とマルケーロフはその態度を變へずにつゞけた。「僕を躊躇させる最後の路はもう断たれたんだ。最早や僕の障害になるものは何にもない！ ゴリューシキンが馬鹿だなんて事も氣にかけやしない、そんな事は大きくして問題ぢやない。それからあのキスリヤーコフの手紙は……そりや馬鹿々々しいかも知れないが……それでもその重要な點はよく考へて見なければならぬ。即ち彼の手紙に云つてあるやうに、到る處に萬事の準備が出来てゐると云ふもの點だ。君は恐らくそれを信じないかも知れないが。」

ネツダーノフは答へなかつた。

「恐らく君の考へが正しいかも知れない。併し萬事の準備が一つ残らず出来るまで待つてゐるとしたら、我々は多分始めることが出来ないだらう。豫め「萬事」の結果を考慮してゐたら、そこに必らず何か面白くない點があるに決つてゐる。例へば、我々の先輩が農奴解放を完成した時、彼等はこの解放の一つの結果として、金貸しの地主階級が一齊に頭を持ち上げるだらうと云ふ事を豫知してゐたらうか？ 彼等が微臭い一チエートウエルの麥を六留取つて百姓達に貸つて、先づ最初に（とマルケーロフは一本の指を折つた）その留全部に相當するだけの仕事をさせ、その上に（マルケーロフは第二の指を折つた）上等な燕麥を一チエートウエル取りあげ、更に尙（マルケーロフは第三の指を折つた）利息まで強請り取るやうな事にはなろうとは思はなかつたに違ひない……實際彼等は百姓から一滴まで搾り取るやうになつたのだ！ 我が解放者はそれを豫知する事が出来なかつたのだ！ けれ共、假令ば彼等がそれを豫知したとしても、そんな結果なんぞ考慮せずに彼等は矢張り百姓達を解放する運動を起したにちがひない！ それと同じやうに僕はもう決心してゐるんだ！」

ネツダーノフはおづ／＼しながら怪訝さうにマルケーロフを眺めやつた。が、後者は隅つこの方へ眼をそらした。彼の睫毛が掩ひかゝつて目を隠してゐた。彼は唇を嚙んだり髯を啣へたりした。

「さうだ、僕は決心してゐるんだ！」と彼は彼の黒い毛むくぢやらな、握拳を膝へ下しながら繰返し

た。僕は君の知つてゐるやうに片意地な人間だ、僕は……何にもしないやうな中途半端な小葦西亞人ぢやない。」

さう云つて彼は起ち上つた、そして足が利かなくなつたやうによろ／＼としながら自分の寢室へ入つて行つて、框に硝子をはめたりマリアンナの小さい肖像を持つて來た。

「これを君に進呈しやう。」と彼は悲しげなが、しつかりした聲で云つた。曾つて僕が描いたんだ。非常に描方はまづいが、見給へ、似てゐると思ふがね。」（そのスケッチは鉛筆で横顔をかいたものであつたが、實際よく似てゐた。）「さあこれを取つてくれ給へ、兄弟、僕の最後の遺品だ。この肖像と一緒に僕は僕の権利を一切君に捧げて了ふ……僕は何にも持つてゐはしなかつた……けれ共、ねえ、アレキセイ、何もかも一切君に捧げて了ふふだ、アレキセイ……そして彼女を。ねえ兄弟、彼女は善良な……」

マルケーロフは言葉を途切らした。彼の胸の波打つてゐるのが見えた。

「さあ取つて呉れたまへ。君は僕に對して怒りはしないだらうね、アレキセイ。さあ取つて呉れ給へ。僕は今何にも持つてないし……僕にはもう要らないのだから。」

ネツダーノフはその肖像を受取つた。が、奇妙な感覺が彼に迫つて來た。彼は自分にはこの贈物を

受ける権利がないやうな気がしたのであつた。若しマルケーロフが彼ネツダーノフの必中を知つてゐたら、彼は恐らく此肖像を彼に與へなかつたかも知れないと云ふ風に思はれた。ネツダーノフは金箔刷りの臺紙にはられて念入りに黒い框にはめられてゐるその小さい丸い紙片を手にとつたが、彼にはそれを如何したらいいのかわからなかつた。「今自分の手の中に一人の男の全生涯が握られてゐるのだ。」と彼にはふと斯んな考へが起つた。彼はマルケーロフが今心中に想像してゐる犠牲の何であるかを了解した。が、何故、何故自分に對してその犠牲が捧げられるのか？ その肖像を返した方がよくはあるまいか？ 否！ それは一層殘酷な侮辱にあたるだらう……そして詰りその肖像は彼に取つて懐しい顔ではないか？ 彼女を愛してゐるではないか？」

ネツダーノフはマルケーロフが彼の心を讀まうとして、自分を見詰めてゐるのではないか……と内心幾らか掛念しながらマルケーロフを振り向いた。が、マルケーロフはやつぱり片隅を見詰めた儘、髯を咬んでゐた。

年取つた家僕が蠟燭をもつて部屋へ入つて來た。

マルケーロフは驚いて起ち上つた。

「もう寝る時間だ、アレキセイ！」と彼は叫んだ。「朝になれば善い思案が浮ぶだらう。僕は君に馬車

を提供するから、それで歸りたまへ。ではお休み、兄弟。」

「それからお前もお休み、爺さん！」と彼は老僕の方を向いて、彼の肩を叩きながら、不意につけ加へた。「俺のことを好く思つて呉れよ。」

老人は驚いて蠟燭を落さなければかりであつた。そして主人を見詰めた彼の眼付は、何時もの落膽よりも……更に以上の……他の何ものかを表はしてゐた。

ネツダーノフは自分の部屋へ行つた。彼は悲痛な氣持ちになつてゐた。彼の頭はまだ酒のためにづきん／＼痛んでゐて、耳の中がちん／＼鳴つてゐた。そして眼をつぶつてさへ、眼の前に色々な光がちん／＼した。ゴリニューシキン、番頭のワシヤ、フォームシユカ、フキームシユカなどが彼の前をぐる／＼彷徨つてゐた。遠くの方にマリアンナの姿が朦朧と浮んでゐたが、此方近づいて來さうには見えなかつた。彼には自分の云つたり爲たりした事が何もかも虚偽で、矯飾で、餘計な無駄事で、瞞着の謔言であるやうに思はれた……そして實行しなければならぬ事や、近づいて行かなければならぬ目的や、錠と門とに閉ぢこめられ、底知れぬ穴の中に葬られてゐて、何處にも看出すことが出來ないやうに思はれた。

そして彼は、起きてマルケーロフのところに行つて「君の贈物を返す、さあ返す。」と彼に云つてや

りたいたやうな渴望のために絶えず惱まされてゐた。

「あゝ、何と云ふ忌々しい人生だらう」と到頭彼は叫んだ。

翌朝彼は早く出かけた。マルケーロフはもう階段のところ立って百姓達に取り囲まれてゐた。彼が百姓達を呼び集めたのか、それとも百姓達の方から集つて来たのか、ネツダーノフには分らなかつた。マルケーロフは彼に向つて、唯簡単に冷淡に左様な事を云つた……が、彼は百姓達に何か重大な事を報告しやうとしてゐるらしかつた。例の年寄の家僕は、いつも悲しげな顔付をして階段のところをぶら／＼してゐた。

馬車は直きに町を通り過ぎてしまつた、そして凄しい速力で走つて、間もなく廣々とした耕地へ出た。馬は昨日と同じ奴であつたが、馭者の方はネツダーノフが宏大な家に住んでゐるためか、其れとも他の理由からか、火酒が饜腹飲めるものと思ひ込んでゐた……我々の誰れもが知つてゐるやうに、馭者が火酒の御馳走にありついた時とか、今に一杯貰へるなどと思つてゐる時には、馬を全速力で走らせるのであつた。六月ではあるが爽やかな天気であつた。空高く雲が跳るやうに翔つてゐた。微風は強く平調に吹いてゐて、昨日の雨に濡つてゐる路には塵埃も立たなかつた。柳の樹はさら／＼鳴つたり、さら／＼輝いたり、ゆら／＼揺れ騒いだりしてゐた。凡てのものが動いて、ひら／＼翻つてゐた。

赤喉鶉の鳴聲が遠い傾斜の方から、まるでその鳴聲に羽が生えて飛んでゞも来るやうに、緑の谷間を越えて、はつきりと澄んで聞えた。魚の群が日光の中で美しく翼を輝かしてゐた。遠く展がつてゐる地平線の上に大きな黒い蟲のやうなものが幾つとなく動いてゐた……それは百姓達が休耕地（耕した儘一年間種蒔かずに休めて置く畑）に二度目の鋤を入れてゐるのであつた。

が、ネツダーノフはそんな物には少しも目を向けずに通り過ぎてしまつた。何時かシプヤーギンの領地に入つたことさへ気がつかずにゐた。彼は陰鬱な物思ひに氣を取られてゐたのであつた。

とは云へ、家の屋根や、二階や、マリアンナの部屋の窓が目に入つた時、彼ははつと驚いた。「さうだ。」と彼は獨言つて、心臓のあたりが熱くなるやうに感じた。「あの男が云つたことは本統だ。彼女は善良な娘だ。そして自分は彼女を愛してゐるんだ」

二十二

彼は急いで服を着換へて、コリーヤに學課を教へに行つた。會堂でシプヤーギンに出會つたが、シプヤーギンは冷淡に丁寧な挨拶をして、「訪問はどうでした。愉快でしたか？」と咬きながら、書齋へ入つてしまつた。この政事家の外交官的な胸中には、既に或る事が決定されてゐたのであつた。この

家庭教師は「餘りに過激な革命黨」であるから、休暇が終つたらば直ぐに、ペテルブルグへ追ひ歸して、當分彼を警戒してゐることにしなければならぬ、とシプヤーギンは考へたのである、……『*n'aipas eu la main heureuse cette fois-ci*』(今度は、さすがの俺も閉口した)と、彼は心中に思つた。
Pourrais tu tomber Dire (だが、今の中でまだ好かつた)とも思つた。ネヅダーノフに對するワレンチーナ・ミハロウナの感情はそれより一層強く、決定的であつた。彼女は彼に對してもう我慢がならなかつた……彼は……あの卑しい小さな子供奴は……自分を侮辱したと、女は思つた。マリアンナが其れと察して、廊下で彼女とネヅダーノフの容子を探つてゐたのはワレンチーナ・ミハロウナだと云つたのは間違ひではなかつた……然り、この身分の高い貴婦人は、さう云ふ不仕態を大目に見てはゐられなかつたのであつた。ネヅダーノフが二日續けて留守にしてゐた間、彼女はこの「氣狂ひ染みた」姪に向つて何とも云ひはしなかつたが、自分は何もかもちやんと知つてゐると云はん許りな事を幾度となくマリアンナに仄めかした。若し自分が半ば輕蔑し、半ば憫れんでゐる心持ちがなかつたら、どんなに立腹したか知れないと云はんばかりな事も當てつけて云つた……彼女の顔付には内心の侮辱を押し耐えてゐるやうな色が現はれてゐた。マリアンナと顔を合せたり物を云つたりする度に、彼女の肩は一種皮肉な、と同時に又憐憫を示すやうな風につり揚げられた。彼女の美しい眼は、物優しい昏

惑の思ひと恐ろしい憎惡の念とを浮べながら、自分の色々な「空想と偏奇な思想」とに驅られて取るにも足りない哀れな大學生と……暗い部屋で……接吻するまでになつた我儘娘にちつと注がれてゐた！
 哀れなマリアンナ！ 彼女の堅い、剛慢な唇は、これ迄まだ男の接吻を知らなかつたのだ！
 とは云へ、ワレンチーナ・ミハロウナは自分の發見した事を夫には何とも仄めかさなかつた。夫の前では、たゞ意味ありげな微笑を浮べて、その事件とは全然何の關係もない事をほんの一言三言マリアンナに話しかけるだけで自分を満足させてゐた。ワレンチーナ・ミハロウナは、自分の兄に手紙を送つたことを幾らか後悔してゐた……が、大體から云つて、彼女は手紙を送らず、後悔せずにも、手紙を出して後悔してゐる方を寧ろ好んでゐた。

ネヅダーノフは朝食の時食堂でマリアンナをほんの一寸見かけただけであつた。彼女は瘦せて蒼ざめてゐるやうに思はれた。今日は彼女は少しも美しく見えなかつた。が、彼が部屋へ入つた瞬間ちらりと彼に投げた彼女の敏捷な視線は、眞直に彼の心臓を射透した。すると一方ではワレンチーナ・ミハロウナが「お芽出たう！ 巧いわ！ 素ばしつこいのね！」と其れとなく繰返してゐるかのやうにちつと彼を見詰めてゐた。と同時に、マルケーロフがあの手紙を彼に見せたか如く、かを彼の顔付から看破らうと彼女は思つてゐた。そして最後にマルケーロフが見せたのだと云ふことに決めてしまつた。

シブヤーギンはネツダーノフがソロミンの監督してゐる工場へ行つた事を聞くと、「非常に利益のある驚くべき多くの特色を示してゐるその製造業」についてネツダーノフに様々な質問を浴びせかけた。が、この青年の答へから推し考へて、彼はその工場で實際の事を何にも観察しては來なかつたのだと信じたので、こんな無経験な青年から何か價值のある報告を聞かうとしたことを自分と自分に非難するやうな態度を見せながら、聽て又重苦しく口を嚙んでしまつた。彼等が食堂を出る時、マリアンナは、「あの古い樺の林で私を待つて下さい。な、アレキセイ私は出られたら直ぐ行きます。」とまゝく囁くことが出來た。ネツダーノフは「彼女もマルケローフと同じやうに、自分の事をアレキセイと呼ぶ。」と思つた。そしてその親密さが、彼には幾らか恐ろしく思はれたが、云ひやうもなく嬉しかつた。若し今彼女が不意に以前のやうにネツダーノフさんと改まつた呼方をして、彼に一層距たりを置いたとしたら、どんなに變挺な、空々しい感じがしたらう！それは自分に取つて悲しいことだつたに違ひないとネツダーノフは思つた。彼は自分が彼女を戀してゐるのか如何かはつきりと決める事が出來ないでゐたが、自分にとつて彼女が貴いものであり、親み深いものであり、必要な人であると云ふことは……然り、とり分け必要な人であると云ふことは心の底から深く感じたのであつた。

マリアンナが彼に指定した林は、多くは低く枝を垂れ下げた、何百本と云ふ古い樺の樹の茂みであつた。風はまだ吹きつゞいてゐた重なり合つた細長い梢が、ゆるんだ垂れ髪のやうに微風に連れてゆら／＼揺れてゐた。雲の片が今朝と同じやうに大空高く飛ぶやうに翔つてゐた。そしてその雲の一つが太陽の面を横ぎつた行く時、凡ゆるものが……黒ではないが……一様な色彩になつた。する中にそれが漂ひ去つて、不意にきら／＼した光の斑點があつちにも此方にも揺ら／＼と揺れ動き、影と影が入り亂れたり、光が明るく暗く別れたりしてゐた……木の葉のさわめきと動搖とは前と同じことであるが、そこには一種喜ばしげな調子が加へられるのであつた。懊惱のために擾き亂され暗くされてゐる胸の中には、丁度これと同じやうな烈しい情熱が喜びにみち／＼と湧き上るものである……今ネツダーノフの胸中に起つたことは、まさしくこれなのであつた。

彼は樺の樹の幹に凭りかゝつて待つてゐた。彼は自分が今何を感じてゐるのか本統には知らなかつた。實際また知らうともしなかつた。彼はマルケローフの家にゐた時よりも、一層氣が亂れたやうにも、また一層軽くなつたやうにも感じた。彼は何よりも先づ彼女に會つて、話をしたいと願つてゐた。突然二つの生物を繋ぎ合せるところの鎖が、今しつかりと彼を結びつけてしまつたのであつた。船をつなぐために埠頭に投げられる綱のことはネツダーノフは思つて見た……今それは抗にぐる／＼と捲きつけられ、船はしづかに留つたのであつた。

港に入ったのだ！ 神の恵みの下に！

と、突然彼は戦慄した。向うの方の小徑に女の服がちらりと見えた。彼女であつた。が、彼女の姿の上を、日光と影の斑點が上から下へと移つてゆくのが目に入るまでは、彼女が此方へ来るのか、向ふへ行くのか分らなかつた……彼女は近づいて来るのであつた。若し向うへ行くのなら光と影の斑點が下から上へと移つて行くはずである。やがて直ぐ彼女は彼に近づいて来て、喜ばしさうに顔色を輝かし、眼に物優しい光を漂へ、微かにではあるが、瞞しげた微笑みを唇に浮べたがら、もう彼の前に立つてゐた。ネヅダーノフは彼女の差出した手を握りしめた。が、最初は一言も物を云ふことが出来なかつた。彼女も何にも云はなかつた。彼女は大意で歩いて来たので、せい／＼息を切らしてゐたが、ネヅダーノフが彼女に會つたのを喜んでゐるので、彼女はそれを堪らなく嬉しく思つてゐるらしかつた。

最初に口を切つたのは彼女であつた。

「あのね。」と彼女は始めた。「あなたは如何んな決心をなすつたのか、早く聞かして下さいまし。」

ネヅダーノフは吃驚した。

「決心……今僕等に何か決心しなければならぬことがありますか？」

「まあ、あなたには私の云ふ事が分つてらつしやるのに！ あなたが何を話していらしたか、誰れに會つていらしたか聞かして頂戴。ソローミンとお知己になつてらしたか？ すつかかり聞かして下さい、何もかも！ あゝ一寸……もう少し奥へ行きませう。私人に見つからない……好い場所を知つてますわ。」

彼女は先に立つて歩き出した。彼は素直に彼女の後について、丈の高い、疎らな枯草の間を分けて行つた。

彼女は彼女の思ひついた場所へ彼を連れて行つた。そこには嵐のために倒れた大きな樺の樹が横はつてゐた。二人はその幹に腰を下した。

「さあ、話して頂戴！ と彼女は繰返へした。が、直ぐに自分の方から云ひ出した。「あゝ、あなた、私あなたにお會ひ出来て、」どんなに嬉しいでせう！ 私二日経つのがどんなに長かつたでせう。ねえ、アレキセイ、ワレンチーナ・ミハロウナがね、私達の話を聞いてよ。」

「あの人はその事をマルケーロフに手紙で知らせたんです。」とネヅダーノフは云つた。

「マルケーロフに！」

マリアンナは一寸の間物を云はなかつた。そして耻羞のためではなく、他の強い情熱のために、次

第に顔を赧くした。

「残酷な悪い女ねー」と彼女は靜かに呟いた。「あの人に、そんな事をする権利はありません……けれど、心配することはありませんわ。さあ話して下さい、何もかもすつかり。」

ネヅダーノフは話し始めた……マリアンナはちつと身ぢろぎもしないで熱心に耳傾けてゐた。そして彼が事件の細かい點を端折つて、餘り急いで話すのに氣がついた時しか口出ししなかつた。が、彼の訪問の間の細かに出来事が何もかも彼女に興味があつたわけではなかつた。彼女はフオームシユカとフキームシカの話をお可笑がつた、が、彼女には何も興味はなかつた。その老夫婦の生活は彼女にとつては餘りに縁が遠かつた。

「まるでネブカドネツツアルの話でも聞いてるやうですわね。」と云ふのが彼女の註釋であつた。

が、マルケーロフの云つた事や、ゴリユーシキンの考へや、勿論彼女は彼がどんな人物であるかは直ぐに覺つてしまつた。とり分けソローミンの思想や、その人物や……さう云ふ點に彼女は興味を寄せて、それを聞きたく思つてゐたのであつた。「何時ですの？ 何時ですの？」ネヅダーノフが話してゐる間柄えず彼女の頭に湧き上り唇にものぼつた問ひはこれであつた。が、ネヅダーノフの方は、その問ひに對して判然とした答へを避けてゐるやうに見えた。彼はマリアンナにとつて興味がないと思

はれる枝葉な出来事に却つて重きを置いてゐることに明らかに氣がついた……そして絶えず話がそれに返つて行くことに氣がついた。面白おかしい細かい説明は彼女を背立たせ、疑惑をもつた生氣のない調子は彼女の感情を害ふのであつた……彼は絶えず「黨の目的」とか「問題」とかに觸れてゐなければならなかつた。さう云ふ事を云つてさへるれば、どんなに儲舌つてゐても彼女は退屈しなかつた。ネヅダーノフはまだ大學生にならない前に或る夏幾人かの古い友達と一緒に田舎で暮らした時の事を思ひ出した。その頃彼はよく子供達に話をして聞かしたことがあつたが、子供達もやつぱり細かい説明や、人物の表情や、個人個人の感情については聞きたがらないで……やつぱり行爲と事實とばかりを知りたがつた！ マリアンナは子供ではないが、その感情の卒直さと單純さはまるで子供のやうであつた。

ネヅダーノフは眞面目に熱心にマルケーロフを稱めた。ソローミンの事を特に讚嘆して話した。殆んど有頂天な調子でソローミンの話をしたが、彼は何であの男をそんなに讚嘆してゐるのかと自分と自分を怪んだ。ソローミンは特別に立派な意見は一言も云はなかつた。彼の意見の或る點は彼ネヅダーノフの信念とは全然反對でさへあるやうに思はれた……「彼はよく均整のとれた人物だ。」と云ふのがネヅダーノフの結論であつた。「詰り、フキームシユカが云つたやうに、事務的な冷めたい堅い人

間なのです。沈着な強い人間です。彼は自分に必要な事は何でも知つてゐる。そして自信を持つてゐる上に他人にも信頼の念を起させる。彼は決して興奮しない……何時でも調和を保つてゐることを忘れない……それが偉大な點です、僕の全然持つてゐない所ですよ。」とネツダーノフは口を嚙んで、ちつと思ひ沈んだ……と、不意に彼は優しい手が肩に置かれたのを感じた。

彼は頭をあげた。マリアンナは憂はしげな優しい眼付で彼を見詰めてゐた。

「あなた！ 如何なすつたの？」と彼女は訊いた。

彼は肩に置かれた彼女の手を執つて、初めてその強い小さい手を接吻した。マリアンナは如何して彼にこんな蕭やかな気分を起させることが出来たのかと驚いてゐるかのやうに、軽く微笑みを見せた。そして今度は彼女がちつと沈んだ。

「マルケーロフはワレンチーナ・ミハロウナの手紙をあなたに見せたんですの？」と彼女は到頭訊いた。

「え、見せました。」

「それで彼の人とはどんな容子でしたの？」

「彼の男ですか？ あの男は高尚な、最も利己心のない人間です！ あの男は……」とネツダーノフ

は例の肖像の事をマリアンナに話さうとしたが、自分を仰へつけた、そしてたゞ斯う繰返へした。「高尚な人間です。」

「え、左様ですわね、左様ですわね！」

マリアンナは再び思ひ耽つた。そして不意に二人が腰掛けてゐた幹の上で、ネツダーノフを振返つて、生ま／＼とした熱心さで云つた。

「それでどんな事が決定されたんです？」

ネツダーノフは肩をしやくり上げた。

「それは今云つたやうに……何にも……まだ。僕等はもう少し待つてなければならぬでせう。」

「もう少し待つてゐるつて……何を待つんですの？」

「最後の命令を。」（勿論こんな事は嘘つばちだとネツダーノフは思つた。）

「誰れからの？」

「あの……ワシリイ・ニコラエウキツチからの。そして左様です、僕等はオストロデューモフの歸つて来るのを待たなければならぬのです。」

マリアンナは怪訝さうにネツダーノフを見詰めた。

「ねえ、あなたはワシリイ・ニコラエヴキツチにお會ひになつた事がありますの？」

「僕は……ほんの一寸……二度會つただけです。」

「どんな人ですの……偉い人ですか？」

「さあ如何云つたら好いか。あの男は今首領になつて、凡ての事を指揮してゐるんです。僕等の仕事は律がなくては行へないので。服従と云ふ事が肝心なので。(すそして此れも嘘だ、と彼は心中に云つた。)

「どんな容子の人ですの？」

「づんぐりとした、重々しい、陰気な……カルミツクのやうに頬骨の高い、……野卑な顔付した男です。たゞ非常に鋭い、光つた眼を持つてゐます。」

「口の利きやうはどんな？」

「あの男は命令するだけで、無口です。」

「どうして首領にされたんです？」

「おゝ、彼は人格者だからです。あの男は何事にも躊躇しない男です。若し必要の場合には誰れでも殺すでせう。そんな風で人に恐れられてゐるのです。」

「ソローミンはどんな人です？」とマリアンナは一寸口を嚙んでから訊いた。

「ソローミンも矢張り奇麗ぢやありません。が、あの男はすつきりした、單純な、正直な顔を持つてゐます。よく神學生の連中に見るやうな顔です……勿論いゝ顔付です。」

ネツダーノフはソローミンの事を細かに話した。マリアンナはネツダーノフを長い間……長い間ぢつと見詰めてゐた。やがて、彼女は獨言でも云ふやうに云つた。「あなたも好い顔をしてらつしやるのね、あなたと一緒に生活したらどんなに楽しいでせうね、アレキセイ。」

この言葉に、ネツダーノフは感動して、もう一度、彼女の手を執つて、唇のところへ揚げやうとした……

「禮儀めいた事はお止しなさいませね。」とマリアンナは微笑みながら云つた……彼女は手に接吻されると何時も微笑みを浮べるのであつた。「あなたは知つてらしやらないけれど、私はあなたに白狀しなければならぬ悪い事をしましてよ。」

「どんな事をしたんです？」

「あなたの留守に私あなたのお部屋へ入りましたの、そしてあなたの卓の上にあつたあなたの詩の書いてある手帳を見て……(ネツダーノフは吃驚した、彼はその手帳を卓の上に置き忘れて行つたこと

を思ひ出した。……「私は好奇心を抑へることが出来ないで、それを讀みましたのよ。あれはあなたの書いた詩なんでせう？」

「さうです。そしてねえ、マリアンナ、あなたには分りますか、僕があなたに對してどんなに心を捧げてゐるか、どんなにあなたを信じてゐるかと云ふ一ばん好い證據は、僕はあなたには迎も怒れないつて云ふ事です。」

「迎も？ ぢやあなたはほんの少しは怒つてらつしやるのね？ でも其様なことはまあさうとして、あなたは私をマリアンナつてお呼びになるのね……それは好いですけど、私はあなたをネツダーノフと呼ぶことが出来ませんから、私あなたをアレキセイと呼ばなければなりませんわ。で、あの親愛なるものよ、『私が死んだら』と云ふ句で始まつてゐる詩もあなたの作ですの？」

「さう……さうです。だが、何卒もう止めて下さい……僕を苦しめないで下さい。」

マリアンナは彼女の頭を拂つた。

「あの詩は……大へんに悲しい詩ですわ……私がまだあなたとお知己にならない時分にお書きになつたんでせうね。でも、私に解つた所だけで云へば、あれは本流の詩ですわ。あなたは作家におなりになつても好かつたやうに思ひますけど、あなたには確かに文學よりもつと善い、高い天職がお有り

になる事を私は知つてゐますわ。以前のやうに、何にも外に出来ない時代には……著作をするのが一ばん好い仕事でしたのね。」

ネツダーノフは素早くちらりと彼女を眺めやつた。

「あなたはさう思ふんですか？ さう、僕はあなたの意見に賛成です。こんな事に成功するより失敗した方がいゝんです。」

マリアンナは衝動的に立ち上つた。

「さうですわ、あなた、あなたの仰しやる事は本統ですわ！」と彼女は叫んだ。そして彼女の顔中が恍惚とした熱と光と、寛いだ和らかな感情とで眞赤になつてゐた。「あなたの仰しやる事は本統です、アレキセイ！ けれども私達はまだ直ぐには失敗しはしないでせう。見てゐて御覽なさい、私達はきつと成功しますわ……私達は役に立ちますわ。私達の生活には無駄にはなりませんわ。私達は民衆の中へ出て行つて生活させよう……あなたは何か商賣を知つてらしつて？ 否え、心配することはありませんわ、私達は働かせよう、私達の同胞のために、私達の知つてゐる凡ての人々のために一身を捧げませう。私はもし必要な時には料理人になつたり、裁縫をしたり、洗濯をしたりしますわ……見てゐらつしやい、きつと遣りますから……そして何にも報ひられはしないでせうけど……それでも幸福

ですわ、幸福ですわ……。」とマリアンナは言葉を切つた。彼女の眼は……彼女の前に展がつてゐる地平線の上ではなしに、たゞ彼女だけにしか認められない、他人には見えない、未知の地平線の上を遠くちつと見詰めてゐた……彼女の眼は燃えるやうに輝いてゐた。

ネヅダーノフは彼女の前へ頭を屈めた。

「おゝマリアンナ！」と彼は囁いた。「僕はあなたに取つて何の値打ちもない人間です。」
彼女は不意に身を顛はした。

「もう歸らなければならぬ時間ですわー」と彼女は言つた。「で無いと直ぐに又私達を探し廻るでせう。ワレンチーナ・ミハロウナは、もう私を見棄てゝゐるやうに思ひますけれどね。あの人の目から見ると、私は荒んだ人間に見えるんですわ。」

マリアンナは斯う言つた時いかにも晴れ／＼とした幸福な顔付をしてゐたので、ネヅダーノフもその顔を見ると微笑みを浮べずにはゐられなかつた、そして「荒んだ人間ですつて？」と繰返さずにはゐられなかつた。

「でも、あの人は酷く感情を害してゐるんですよ。」とマリアンナは續けた。「あなたがあの人の思ふやうにならなかつたからですわ。でも其様な事どうだつて構ひません。それより他にお話しななければ

ならないのは……私もう此處で暮らしてゐる事が出来なかつて事です……私何處かへ逃げ出さなければなりませんわ。

「逃げ出すんですつて？」とネヅダーノフは繰返へした。

「さうです、逃げ出すんです……あなたどうつてもう此處に居らつしやらうとは思はないでせう？ 私達一緒に行きませう……私達は一緒に働かなければなりませんわ……あなたは私と一緒に行つて下さるでせうね、行つて下さいませんか？」

「世界の涯までいも！」とネヅダーノフは叫んだ。その聲は突然感動して一種熱烈な感謝を籠めた調子があつた。「世界の涯までいも！」その瞬間彼は確かに彼女の獄する處なら何處へでも彼女と一緒に行つたに違ひなかつた。

マリアンナは彼を了解した、そして短い嬉しさうな溜息をついた。

「ぢや手を握つて頂戴、アレキセイ、でも接吻なすつてはいけませんよ。仲間のやうに友達のやうにしつかりと握りしめて頂戴……えゝ、さう言ふ風に！」

彼等は靜かに嬉しさうに並んで住居へと歸つて行つた。若草が彼等の足を撫でた。若い緑の梢が彼等の周圍でさら／＼と搖れた。光と影の斑點が彼等の服の上に差したり消えたりした。そして彼等一

人はこの目まぐるしい日光の戯れや、風の嬉しげなさどめきや、木の葉の新鮮な翫きに微笑みを浮べ、彼等自身の青春に……微笑みを取り交はした。

三十二

ゴリユーンキンの家での晚餐の後、ソローミンが五露里の道を急いで歩いてから、工場を繞つてゐる高い扉の門を叩いた時には、既に曉方の光が夜空に差してゐた夜番は直ぐに門をあけた。毛のもちやくくした尻尾を勢ひよく振り立てる三匹の番犬につき纏はれながら、門番は長まつた容子で小さい寄宿舎へと彼を導いて行つた。彼は自分の親分が、事もなく歸つて来たことを喜んでゐるやうに見えた。

「如何して今夜お歸りになりましたのです？　ワシリイ・フョードチツチ、明日でなければお歸りがあるまいと思つて居りましたが。」

「うむ、左様だつたらうな、ガブリーラ。だが夜歩くのは氣持ちがいゝものだから。」

ソローミンと彼の職工達との間には、減多にない事ではあるが、美しい關係が存在してゐた。彼等は目上として彼を尊敬しながら、同輩として、彼等自身の一人として彼に振舞つてゐた。が、彼等の

眼には彼は驚く可き學者だと見られてゐた。「ワシリイ・フョードチツチの言ふ事は何時も本統だ！　何故と言つてどんな學問でもあの人の知らねえ學問は一つも無え、あの人の持て餘すやうな英國人は一人もゐねえからな。」と彼等は常に繰返すのであつた。實際、或る有名な英國の製造業者がこの工場を參觀に來た時、ソローミンがその男と英語で話したゝめか、或は彼の商業に對するソローミンの智識を心から感嘆したゝめか、その男はよくソローミンの肩を叩いて笑つてゐた。そしてリヴァアールへ自分を訪ねて來て呉れるやうにとソローミンを誘つてゐた。その男は又職工達に向つて、無茶苦茶な露西亞語で「おゝ、「彼女」は非常にいゝ人だ、諸君の仲間は！　常にいゝ人だ！」と言つて退けた。職工達はその答へとして、多少矜りをもつて心から笑つたものであつた。「さうとも、俺達の仲間にはみんな左様なんだ！　あの人は俺達の一人なんだ！」とこんな風に感じながら。

實際彼は彼等の一人であり、彼等のものであつた。

次の朝早く、ソローミンの氣に入りのパーウエルが部屋へ入つて來た。彼を起して、顔を洗ふ水を汲んだり、何かと報告したりしながら、色々と彼に問ひをかけた。やがて彼等は急いでお茶を飲んで、ソローミンは油染みた薄汚い仕事服を纏つて工場へ出て行つた。そして彼の生活は再び大きな節動輪と同じやうに廻轉しはゞめた。

が、又もや或る新らしい故障が起つて来た。

ソローンが自分の仕事に歸つてから五日目に、立派な馬を四頭つけた一臺の奇麗な小さい四輪馬車が工場の中庭へ入つて来た、そして蒼白い豌豆色の制服を着た一人の馭者がパーウエルに案内されて寄宿舎へ入り、紋章の封印を押してある「ボリス・アンドレエヴィチ閣下」からの手紙を重々しい容子でソローミンに渡した。この手紙の中からは、一種特殊な、むつとするやうなイギリス香水の匂ひが、微かにではなく、強く強く匂つた。手紙の文章は秘書の手ではなく、アルザアノ領地に於ける最も進歩した地主である所の閣下自身の手で、三人稱で書いたもので、先づ最初に、彼シプヤーギンは兼ねてあなたの御高名は承つてゐながら、まだ個人的にお知己にならないのに、斯うして手紙を差し上げる失禮を許して頂きたいと言ふ文句で始まつてゐた。次に彼は、あなたの御高見は、多少大規模の製造業を企てゝゐる彼シプヤーギンに取つて、この上もなき利益でなければならぬから、どうぞ自分の田舎まで御出で下さる御好意を持つて頂きたいと、ソローミンを招待する意味が認めてあつて、あなたが御承諾下さるつもりで、彼シプヤーギンは馬車を差し上げるとしてあつた。それで若し今日ソローミン君にお差支があつて、お出向き下さることが出来なければ、何時なりとも貴下の御都合の宜き日を御指定下さるやうに、彼シプヤーギンは熱心に御願する、さうすれば、彼シプヤーギン

は、ソローミン君の御指定の日に喜んで馬車をお迎へに差し出す、と言ふのであつた。斯うして次の例の儀式的な文面があり、最後に第一人稱で、「どうぞ夜會服をお召しなく——極く簡単な御服装で、私共で晚餐を召上つて頂きたい。」と言ふ追伸があつた。「簡単な御服装」と言ふ言葉には圈點がつけてあつた。この手紙と一緒に豌豆色の制服をつけた馭者は、幾らかもち／＼しながら、一枚の紙片をソローミンに渡した。それは封をしたまゝ、封印も押していないネツダーノフからの手紙であつた。それは「どうぞ来てくれ給へ、此家では非常に君の來るのを待つてゐます、そして非常に利益になるかも知れません。勿論シプヤーギン氏のためでない事は言ふまでもないことです。」とたゞ二三行認めてあるだけであつた。

シプヤーギンの手紙を読みながらソローミンは考へた。「極く簡単な御服装で！ それでなかつたら如何して行けるものか？ 俺の生活ちや夜會服なんぞ一度だつて要ることはないからな……だが、何で俺をそんな處へ引張り出すんだらう？……たゞ時間潰しになるだけだがな！」が、ネツダーノフからの紙片を一寸見てから、彼は頭を掻きまはしながら、心を決め兼ねて、窓際へと歩いて行つた。

「どう言ふ御返事を承りましたと申し上げれば宜しうございませうか？」と豌豆色の服を着た馭者は靜かに訊いた。

ソローミンは少時の間窓際に立つてゐたが、到頭頭髪を後の方へ掻きのけて、その手を額の上へやりながら言つた。「上りませう。服を着換へるから一寸待つて、呉れ給へ。」

馭者は行儀の好い足取りで引きさがつた。ソローミンはパーウエルを呼びにやつた。彼と二言三言何か話してから、彼はもう一度工場へ驅けて行つて、田舎の裁縫師が仕立てた、非常に裾の長い黒い上衣を着て可なり汚れ目のついた山高帽子を被つた。それが彼の顔に窮屈さうな表情を與へた。そして彼は馬車へ乗つた。が、不意に彼は手套を持つて來なかつたことを思ひ出して、機敏なパーウエルを呼んだ。パーウエルは遂ひ此頃洗濯したばかりで指が一本一本突張つたやうに擴がつて、まるでピスケットのやうに見える。白い羚羊皮の手套を持つて來た。ソローミンはその手套を衣兜へ押し込むと、馬車を出しても宜いと言つた。馭者はまるで必要のない急な早さでひらりと馭者臺に飛び乗り、驥の届いた馬丁は響き渡るやうな叱聲を與へた。と、馬は驅足で走り出した。

彼等が次第にシプヤーギンの領地の方へとソローミンを運んでゐる間に、一方の政治家は、客間の椅子に腰掛けて、膝の上へ半ば頁を切つた政事に關する小冊子を置いたまゝ、夫人に向つてソローミンの噂をしてゐた。彼は自分の工場が事實非常に不仕態になつてゐて、大々的に改革する必要があるので、あの商人の工場から自分の方へソローミンを引抜いて來たいのであるが、それが出来るか出来

ないかを試して見るために彼に手紙を送つて招いたのだと夫人に打明けて話した。彼は手紙の中でソローミンの都合の宜いりを決めて呉れるやうにと自分の方から書いて置いたに拘らず、ソローミンが來訪を斷るかも知れないと言ふ考へや、事に依つたら別の日に延ばすかも知れないと言ふやうな考へは一刻も抱いてゐる事が出来なかつた。

「けれども私達の方は製紙工場で、紡績工場ではないではありませんか。」とワレンチーナ・ミハロウナは言つた。

「そんな事はどつちだつて同じ事さ。向うも機械工場なら此方も機械工場だ……そしてあの男は機械技師だ。」

「でも多分彼は専門家でせう。」

「そんな事はお前——第一露西亞には専門家はゐないよ。第二に私はもう一度言ふが、あの男は機械技師だ。」

ワレンチーナ・ミハロウナは微笑んだ。

「お氣をおつけ遊ばせ。あなたは一度もう若い男のために手を焼いてゐらつしやるんですから、今度は失敗なさらぬやうにお氣をおつけにならないといけませんわ。」

「ネツダーノフの事を言つてるのかい？　だが私はとに角私の目的は達したと思つてゐる。あの男は
 コーリヤにとつては立派な教師だからね。それにねえ、non bis in idem　—　だよ。學者氣取は許し
 て貰ひたいが……それは、同じ事は二度繰返へされるものぢやないつて言ふ意味だよ。」

「さうお思ひになつて？　けれど世間の事は何事でも幾度か繰返されてゐるものだと思ひますわ
 ……殊に物事自然の理法から言つて何事もさうですわ……それに殊に若い人の上では。」

「Voe voulez-vous dire？　お前は誰れのことを言つてるんだい？」とシプヤーギンは蕭やかな身振
 りで卓の上へ小冊子を投げ出しながら訊いた。

「Ouvrez les yeux,ci vous verrez　（目を開けて御覽なさい、さうすれば分りますわ。）」とシプヤーギン
 夫人は答へた。勿論二人は佛蘭西語で話す時にはお互に vous と呼び合つてゐた。

「ふむ」とシプヤーギンは言つた。「お前はあの大學生のことを言つてるんだね？」

「あの大學生さんのことを……ええ。」

「ふむ！　あの男が此處で何事かを……」（彼は指を額にあてがつた。）「仕出來かしたと言ふのかい、
 ええ？」

「目を開けて御覽遊ばせ！」

「マリアンナか？　ええ？　（今度の「ええ」は初めのよりは餘程鼻聲であつた。）」

「目を開けて御覽遊ばせと云ふのに！」

シプヤーギンは顔をしかめた。

「だが、そんな事はいづれ後で話すこととして、今たつた一つ私はお前に云つて置きたいと思ふ事がある。あのソローミンが恐らく多少當惑を感じるだらうと思ふ……勿論彼の男は交際社會に馴れてゐないのだから、それは極めて當然なことと思ふのだ。そこで私達はあの男に對して餘程馴れ／＼しくして……あの男をどぎまぎさせないやうにしなければならぬよ。これはお前に對して云つてるんぢやない、お前は全く重寶物だ、お前はその心算になれば、どんな人間だつて何時でも捕虜にすることが出来るんだからね。Ten sais pu!vne, chose Madame　—　（私はさう云ふ色々な事實を知つてゐるよ、マダム。）私は他の人の事を心配してゐるんだ、例へばあすこに居る私達の友人さ。」

彼は柵の上に置かれてある流行の灰色の帽子を指した。それは今朝早くからアルザーノにやつて來てゐるカロミエーツエフの帽子であつた。

「Heuties Cassani,　（あの男は頗る亂暴を云ふからねえ。）民衆と云ふものを酷く輕蔑してゐるから、私はその點に深く反對なんだ！　それに此間中から彼の男は何だか苛々して喧嘩早くなつてゐるやう

だからね……あの方の事件が（シプヤーギンは何處を指すと云ふてもなく頭を振つて見せた、が、夫人にはその意味が解つた。）巧く進行してゐないと見えるね、ええ？」

「目を開けて御覽遊ばせ！もう一度私繰返しますわ。」

シプヤーギンは起ち上つた。

ええ？（今度の「ええ」は全然前のと性質のちがつた「ええ」であつた。調子も違つてゐて……非常に小聲であつた。）そんなに云はなくても好い。私は餘り目を廣く開け過ぎるかも知れない。寧ろ控え目に注意した方がよさ相だ。」

「それはあなたの御勝手ですわ。けれど今度新らしく來る青年の事なら。今日直ぐに來てもあなた心配なされる事は御座いませぬよ——何もかもよく注意して置きますから。」

が、結局何にも注意する必要はなかつたと云ふ事が分つた。ソローミンは少しも當惑もしなければ驚きもしてゐなかつた。家僕が彼の到着を知らせた時、シプヤーギンは直ぐに起ち上つて、玄關まで聞える程聲高に「御通しするやうに、御通しするやうに。」と云つて、客間の扉口へ行つて、その前に直直ぐに立つてゐた。ソローミンが扉口に入るや否や、殆んどソローミンに衝當らないばかりになつた。シプヤーギンは、彼に手を差出して、愛想よく笑ひながら、點頭をして丁寧に云つた。「宜うこそ

御出で下すつた！……非常に嬉しく存じます！」そしてワレンチーナ・ミハロウナの前へ彼を連れて行つた。

「私の妻です」とソローミンの背中にそつと手をやつて、ワレンチーナ・ミハロウナの方へ彼を押すやうにしながら云つた。「この方は機械監督技師で製造業者のワシリイ……フョードシエヴキツチ、ソローミン。」

シプヤーギン夫人は起ち上つて、その美しい睫毛を蕭やかに揚げて、最初は——たゞ一寸——古い知己にでも對するやうに微笑みを見せ、それから肘を腰にくつ附けて、頭を一方へ傾げて、惠みでも求めるやうな容子をしながら、その小さい片手を差し出した。ソローミンは自分に對するこの夫婦の下らない手品をやらせて了つてから、二人に握手して、勧められる通りに先づ椅子に就いた。シプヤーギンは彼に對して「何か召し上りませんか？」と色々氣を揉みはじめた。がソローミンは途中少しも疲れなかつたから、何にも欲しくはない、どうか構はずに置いて頂きたいと答へた。

「では工場を御覽になつて頂けますまいか？」とシプヤーギンはすつかり恐縮して、客の方にそんな謙遜があるとは信じやうともしないで叫んだ。

「ええ直ぐに。」とソローミンは答へた。

「それは何とも有難い次第です！ では馬車を申しつけませうか、それともお歩きになる方が宜しいですか？……」

「あなたの工場は此處からさう離れても居りませんのでせう。」

「まあ半露里位なものです。」

「ぢや馬車をお命じになることはないでせう？」

「それなら恐縮です！ 給仕、私の帽子と杖を、急いで！ それからお前は氣を配つて御馳走の用意をさせて呉れ。おい帽子！」

シプヤーギンは來客の方よりも餘程狼狽してゐた。「帽子は何處だ？」と彼はもう一度繰返へしながら堂々たる大官の身で、燥ぎ屋の小學生のやうに部屋を飛び出した。彼がソローミンと話してゐる間、ワレンチーナ・ミハロウナはこつそりと併し注意深くこの「新來の青年」をちら／＼眺めてゐた。彼は安樂椅子に靜かに腰を落ちつけ、膝の上に露出しの手をのせて（詰り彼は手套をはめなかつたのである。）好奇心をもつてはあがあるが、落ち着き拂つてあたりの家具や繪畫やを眺め廻してゐた。「どう云ふわけだらう？」と彼女は考へた。「あの人は平民——間違ひなく平民なのに……どうしてあんなに平然としてゐるんだらう！」

ソローミンはまさしく非常に自然に振舞つてゐた。實際身分の低い人間がするやうな容子ではなく、丁度「俺を見て呉れ、俺がどんな人間か分つたらう。」とでも云うやうに一種緊張した容子をしてゐた。その感情や思想は複雑ではないが、力強いやうに見えた。シプヤーギン夫人は彼と會話を交へたいと思つたが、彼女が自分で驚いたことは、直ぐには適當な話題を何にも思ひつくことが出来なかつた。「まあ、何てこつたらう！」と彼女は思つた。

「私がこんな機械屋なんぞに威壓されるなんてことがあるものか？」

「ボリス・アンドレエヰキツチはどんなにあなたに感謝して居りますか知れませんが。」と到頭彼女は云つた。「あなたの貴い御時間をあの人のために割いて下さいましたことを……」

「さう仰つて下さる程貴い時間ぢやありませんよ、夫人。」とソローミンは答へた。「それにほんの暫くの間上つたんですから。」

「Voilà au L'ours a montré sa Patte. (ほら此熊奴爪を出した)」と彼女は心中に佛蘭西語で云つたが、その瞬間彼女の夫が手に帽子と杖とをもつて、開け放つた扉口に姿を現はした。

半分身體を振り向けながら、彼は打ち融けた容子で叫んだ。「ワシリイ・フョードシエヰキツチ！ 出掛けませうか？」

ソローミンは起ち上つて、ワレンチーナ・ミハロウナに點頭をして、シプヤーギンの後に従つた。「此方へ、此方へいらしつて下さい、ワシリイ・フョードシエヰキツチ」とシプヤーギンはまるで森の中でも歩いてゐて、ソローミンに道案内の必要でもあるかのやうに云つた。「此方です、この階段を上りますのです。ワシリイ・フョードシエヰキツチ。」

「私の父稱でお呼び下さるのでしたら。」とソローミンは謹み深く云つた。「私はフョードシエヰキツチではありません、フョードチツチです。」

シプヤーギンは殆んど憎み立つやうに肩越しに彼の顔を眺めた。

「あゝ、これは如何も實に失禮しました、ワシリイ・フョードチツチ。」

「ど、致しまして、何でもありません。」

彼は中庭へ入つた。彼等はカロミエーツエフにばつたり出會わした。

「何處へ行くんだね？」と彼はソローミンを流し目に見ながら訊いた。「工場か？ Oest la'India da question ? (これが問題の人か)」

シプヤーギンは目を一ぱいに開けて、氣をつけて呉れと云つた風に軽く頭を振つた。

「Eh さう、この方に——この機械技師の方に、僕の不仕末や不整頓を見て頂かうと思つて……工場へ

行くのだ。御紹介しませう、この近所に居られるカロミエーツエフ君です。こちらはソローミン氏……」
カロミエーツエフは、ソローミンの方へは全然見向かうともしないで、それとも分らない程二度ばかり軽く頭を振つた。が、ソローミンはカロミエーツエフを見詰めた。そして何となく特殊な閃めきが彼の半ば閉ぢたやうな眼の中を通り過ぎた。

「一緒に行くても宜いかね？」とカロミエーツエフは訊ねた。「君も御存じのやうに僕は物を教へられるのが好きだからね。」

「さうとも、來たまへ。」

彼等は廣庭から往來へ出た、そして二十歩も行つたかと思ふと、帯に法衣を捲くしつけて、「法王區域」と呼ばれてゐる方へ歩いて行く管區の僧に出會した。カロミエーツエフは直ぐ様二人の連れから離れて、そんな事とは全然思ひも掛けず、寧ろ知らん顔してゐた僧侶の方へどん／＼大踏で近づいて行つた。自分のために十字を切つて呉れるやうにと僧に乞ひながら、彼の赤い濕つぽい手を音高く接吻した。そして、ソローミンを振り向きながら挑むやうな視線を投げた。明らかに彼はソローミンに ついて二つ三つ何かの事實を知つてゐて、この學問のある悪者に對する自分の侮蔑を見せつけてやうと思つたらしい容子であつた。

「C'est une manifestation, mon cher? (これは或る表示なのか?)」とシプヤーギンは齒の間から囁いた。

「Oui, mon cher, une manifestation necessaire par le temps qui couit! (ちうだよ、君、かう云ふ場合に非常に必要な表示なのだ!)」

カロミエーツエフは鼻先を上へ反りかへらした。

彼等は工場へ入つた。彼等は長い髻を生やして入齒をした小露西亞人の出迎へをうけた。この男はシプヤーギンが以前監督にしてゐた獨逸人を遂に解雇してしまつた時、その後任に雇つた男であつた。この小露西亞人はこの事業については何の智識もなく、たゞ溜息をついたり、何時も「多分」とか「その通りです」とか言ふ外には何一つ出来ないで、ほんの當坐の代理にしてあつたのであつた。

組織の觀察が始まつた。職工の或る者はソローミンの顔を見知つてゐて、彼に點頭をした……彼等の一人に對してソローミンは「ほう、グリゴリー! 此處に居るのか?」と言葉をかけさへした。彼は直ぐにこの工場の監督が不仕鱈になつてゐるのを見てとつた。金は大きつばに、併し無益に費されてゐた。機械は粗末なものであるのが分つた。多くは不必要な無駄な物で、而も必要なものが大部分缺けてゐた。シプヤーギンは彼の意見を推察するために絶えずソローミンの顔を眺めながら、鬼に

角彼がこの組織に賛成かどうかを知らうとして、一言三言臆病な問ひを出した。

「組織は結構です。」とソローミンは答へた。

「併しこれで利益が上りますか? 私はそれを疑ひますね。」

シプヤーギンのみならずカロミエーツエフですら、ソローミンには工場と言ふものが家庭も同様であり、工場内の事は萬事すつかり分り切つてゐて、極く些細な事までも精通してゐると言ふ事……工場ではソローミンが主人だと言ふ事を感じた。彼はさながら馭者が馬の首に手を當てるやうな具合に機械に手を置いた。彼が車輪に指を入れると、それが廻り始めたり、廻轉を止めたりした。彼は紙の作り出される原料を桶からほんの少し手にすくひ上げて見た、そして其のいろ／＼な缺點を見破つてしまつた。ソローミンは餘り物を言はなかつた。小露西亞人などの方は全然振向いても見なかつた。矢張り黙り込んだ儘彼は工場を出た。シプヤーギンとカロミエーツエフとは彼の後に従つた。

シプヤーギンは彼に連れ立つて來ることを誰れにも許さなかつた……彼は酷く足を踏みつけて、齒を喰ひしばつてゐた。彼の胸は非常に擾き亂されてゐた。

「私にはあなたの顔付で。」と彼はソローミンに向つて言つた。「あなたが私の工場に御賛成でない事が分ります。私自身でも不十分な有様で、利益のない事は承知して居ります。ですが、どうぞ忌憚なく

仰つて頂けますまいか……一ばん重大な缺點は何かと言ふことを。そしてそれを改良するには如何すれば宜しいか？」

「製紙業は僕の専門ではありません。」とソローミンは答へた。「が、唯一つだけの事は申し上げることが出来ます……それは製造工業は貴族の仕事でないと云ふことです。」

「さう言ふ職業をするのは貴族の墮落だと仰しやるんですか。」とカロミエーツエフが口を挿んだ。

ソローミンは例の大膽な微笑みを浮べた。「いや、そんな事を申すのぢやありません。墮落なんてどうして其様なことがあるものですか？ 假に墮落をしても貴族がそれを氣に病むことはないでせう。」

「ええ？ それは一體如何言ふ事なんです？」

「私の申すのはたゞ。」とソローミンは靜かに續けた。

「貴族がさう言ふ事業をするのは何の役にも立たないことだと言ふのです。さう言ふ事業には商賣上の先見の明が必要です。凡ての事が異つた立場の上に置かれなければならないのです。あなた方にはその訓練が必要なんです。貴族はこの事を了解していません。私は彼方でも此方でも貴族が織物工場や、製毛工場や種々な工場を始めてゐるのを知つてますが、その中にはそんな工場はみんな商人の手に落ちて了ふんでせう。そりや氣の毒なものです。商人と言ふ奴はまるで吸血鬼のやうなものですか

らな。が、それは如何しやうもありません」

「あなたの意見に依ると。」とカロミエーツエフは叫んだ。「經濟上の問題は我々貴族に關係がないやうに聞えますね。」

「いや、全く反對です！ 貴族は經濟上の問題については第一流の手腕家ですよ。鐵道敷設の認可を得る事や、銀行を建てる事や、彼等自身に對する或る課税を免除させる事や、さう言ふ種類の事にかけたら誰れも貴族に敵するものではありません。彼等は莫大な資産を積み上げますからな。私は今丁度その事を漠と言つたので、あなたの挑戦を得たやうですね。ですが私は純粹な産業と言ふものを考へに置いて言つたのです。私が『純粹な』と言ふのは一私人の營むでゐる酒屋とか、詰らぬ雜貨店とか、我々の地主の貴族が現在やつてゐるやうに、十割或は十五割の利で百姓に麥や金を貸しつけたりする高利貸とか……さう言ふ種類の商賣は純粹な商業と認めることが出来ないからです。」

カロミエーツエフは何とも答へなかつた。彼はマルケーロフが逢ひ此前ネツダーノフと話合つた時に論じた金貸の地主と云ふ新しい種族に當つてゐた。そして彼は百姓を會て人間扱ひにしたことがない程その強奪的なやり口が一層無慈悲であつた。彼は歐羅巴式な香氣の高い書齋へ百姓を入れることは許さず、彼等との交渉は凡て管理人に代理させてゐた。で、今彼はソローミンの考へ深い、公

平無私な意見を聞きながら心中に怒り立つてゐた……が、彼はこの場合黙つてゐた。唯顔の筋肉の運動がその心中に湧き立つてゐる怒りを表はしてゐるだけであつた。

「けれ共、ワシリイ・フ・ロードチツチ……失禮ですが、失禮ですがね。」とシプヤーギンは始めた。「あなたの仰しやる事はみんな、貴族が今と全然違つた特權を持つて居て……現今とはまるで違つた地位に立つてゐたずつと以前の時代の批評ですよ。けれ共凡ての有益な改造が行はれて……産業時代になつた今日、貴族だからと言つてさう言ふ事業に、力と才能とを働かしてならないと言ふ事はないでせう！ それに極めて單純な、どうかすると文字も書けないやうな者もある商人に解ることが、貴族に解らないと言ふ筈はないでせう？ 貴族は無教育のために苦しむやうな事はなし、或る意味に於て貴族は文明と進歩の代表者だと斷言してもいい位ですからね。」

ボリス・アンドレーヴキツチは非常に巧みに論じた。彼の能辯は、若しベアルブルグだつたら……彼の官省の中だつたら……或は更に高い地位の人々の間でも非常な効果があつたに違ひなかつた。が、ソローミンに對しては何の感動をも與へなかつた。

「でも貴族にはさう言ふ事業を處理することは出来ませんよ。」とソローミンは繰返へした。

「何故出来ないのです、何故？」とカロミエーツエフは怒鳴りつけなければかりに言つた。

笑つた。「あなたはた御自分の仰しやつてる事を體驗して居られないやうですね、ソローミン氏。」

ソローミンは矢張り前のやうに黙つてゐた。

「何故さうお思ひになるんですか？ コロメンツエフ氏。」（カロミエーツエフは自分の姓がこんな風に「毀損」をうけたので恐ろしく身を顛はした。）「いや、私は何時も自分が充分に體驗してゐることを云つてゐるのです。」

「ではあなたが今仰しやつた事の意味はどう云ふのか説明して頂きたい。」

「承知しました。私の考へでは凡ての官吏は門外漢です。今まで常にさうでした。そして今では貴族が門外漢になつたのです。」

カロミエーツエフは一層聲を揚げて笑つた。

「どうも失禮ですが、僕には何の事かさつぱり分りませんね！」

「ではあなたに取つて尙更ら可くない事です……大いに努力してやつて御覽なさい……さうすればお解りになるでせう。」

「君！」

「兩君、兩君。」とシプヤーギンは誰れかをきよろ／＼捜し廻つてゐるやうな容子で慌て／＼遮

つた。「どうか、願ひだ……カロミエーツエフ、願ひだから静かにして呉れたまへ。それにもう食事の用意が出来てるだらう。何卒兩君こちらへいらしつて下さい！」

「ワレンチーナ、ミハロウナ」とそれから五分の後にカロミエーツエフは彼女の居間へ駆け込みながら呻吟つた。「あなたの御良人のなさる事は何と云つていゝか實に飛んでもないこつてす！ 虚無黨を一人既にあなたの方の中へ雁つてゐるのに、今又別の奴を引張つて来るなんて！ それにあの男は一層たちの悪い奴ですよ！」

「どうしてとすの？」

「實にどうも彼女は怪しからん意見を主張するんです。そのみならず——まあ一寸考へて御覽なさい、彼奴はあなたの御良人に向つて始終議論をしつゞけです、そして「閣下」と呼んだのも一度や二度ぢやありませんよ！ あの無宿者奴が！」

二十四

食事の前にシプヤーギンは夫人を書齋に呼んだ。彼は夫人と二人だけで話したい事があつたのである。彼は思ひ悩んでゐるやうであつた。彼は工場が明らかに悲しむ可き有様になつてゐると云ふ事や

ソローミンと云ふ男は……少し不遠慮ではあるが、非常に才能のある人間だと思はれると云ふ事や、彼に對して款待をつゞけて行かなければならないと云ふ事やを夫人に話した。「あゝ！ あの男を説きつけて連れて来る事が出来たら。どんなに好いか知れないんだが！」と彼は二度繰返した。シプヤーギンはカロミエーツエフが來てゐるのを酷く氣色悪く思つてゐた……。「何て困つた男だ！ あの男は何處でも此處でも虚無黨を見つけ出して、それを迫害することしか考へて居ない。迫害するのならば自分の家であるがいゝんだ。どうしても黙つて耐えてゐる事の出来ない男だ！」

ワレンチーナ・ミハロウナはこの新しい容を款待する事は喜んでゐるが、あの男はそんな款待を望みもせず、氣にもかけないらしいと云つた。それはあの男が不作法であるためで許りではなく、平民社會の人には非常に珍らしく、そんな款待に冷淡であるためだと云つた。

「まあ心配することはない……一生懸命にやつて呉れ！」とシプヤーギンは彼女に頼んだ。ワレンチーナ・ミハロウナは一生懸命にやるからと約束して、その約束通りにした。彼女は先づ最初にカロミエーツエフと内密に話をした。彼女が彼に何を云つたかは分らなかつたが、カロミエーツエフは如何な事でも命じられた事は慎重に柔順に守ることを「請け合ひました」と云つた風な容子で食卓にいた。その場合に適したこの「忍従」は彼の態度全體の上に其れともない陰鬱な影を與へたが、その

代りにその動作の一つ一つに重々しい威厳が見えた。ワレンチーナ・ミハロウナは家族の全體の者をソローミンに紹介した。(彼はマリアンナを熱心にちつと眺めてゐた。)そして食卓につく時彼は彼女の右の方の近くに坐らされた。カロミエーツエフは彼女の左の方に坐つた彼はナブキンを廣げるや否や、「さあ、詰らない狂言を初めるかな」と云つたやうな微笑みを浮べて顔をしかめた。シプヤーギンは彼と差し向ひに坐つて、幾らか不安らしく彼を見守つてゐた。シプヤーギン夫人の食卓の指圖でネツダーノフはマリアンナの傍ではなく、アンナ・ザハロウナとシプヤーギンとの間に席を決められた。マリアンナはカロミエーツエフとコーリヤとの間のナブキンの上に自分の名札を看出した。(今日の食事は儀式的であつた。)食卓は仰々しい儀式で開かれた。献立表まで備へられ——一人一人のナイフとフォークとの側には彩色した名札が置かれてあつた。スープが終ると直ぐに、シプヤーギンは彼の工場、事や露西亞全體の製造工業の事に再び話を移して行つた。ソローミンは何時もの例で極く簡単に答へた。彼が物を云ひ始めると、マリアンナの眼は直ぐに彼の上に注がれた。カロミエーツエフは彼女の傍に坐つてゐたので、彼女に様々なお愛想を云ひはじめた「議論に携はらないやうに」と特に頼まれてゐたので、彼女はカロミエーツエフの云ふことに耳を傾けてはゐなかつた。それに實際は、この若い娘と彼との間に越へる事の出来ない或る障壁のある事が分つてゐたので、カロミエーツエフは唯その意識を慰めるために心からでは無しにそんなお愛想を云つてゐたのであつた。

ネツダーノフについては、彼と此家の主人の間には尙一層悪い距てが出来てゐた……シプヤーギンにとつて、ネツダーノフは全然——全然と云つていゝ程——思ひ出されもしない家具の一つ、又は空虚な場所のやうになつてゐたのであつた。斯う云ふ新しい關係は、非常に素早く、非常に明瞭に事實の上に現はれてゐた。それはネツダーノフが食事の間に隣席のアンナ・ザハロウナに何か云はれて「一言三言答へた時、シプヤーギンがあたりを見廻はして、「おや何處であんな聲がするんだらう？」と不思議さうな容子を見せた程であつた。

明らかにシプヤーギンは地位の高い露西亞人の異彩となつてゐるところの或る性格をもつてゐたのであつた。

魚の料理が出た後でワレンチーナ・ミハロウナは——彼女の役割として彼女の右隣りにゐるソローミンに對して様々な技巧で愛嬌をふり撒いてゐたが——夫に向つて卓越しに「お客様は葡萄酒を召し上りませぬのよ、多分麥酒がお好きなんでせう。」と英語で云つた。シプヤーギンは「強い麥酒を」と聲高に命じた。するとソローミンは靜かにワレンチーナ・ミハロウナの方を向いて、「夫人、あなた

は御存じありますまいが、私は二年間英國へ行つて居りましたので、英語は知つても居りますし饒舌することも出来ますから、私の前でもし何か御内密な話を英語でなさるといけませんから申し上げて置きます」と云つた。ワレンチーナ・ミハロウナは笑つて、あなたのお耳に入れて善い事だけしかお聞きせしませんから、そんな御心配は御無用に願ひますと云つた。彼女は心中にソローミンの所業を少し奇妙に思ひましたが、その遣り口はなかく繊細だと思つた。

かう云ふ場合になると、カロミエーツエフは遂に爆發せずにはゐられなかつた。

「ほう貴方は英國に行つて居られたんですか。」と彼は始めた。「では多分あちらの風習を見聞しておゐてなつたでせうね。いかゞです、あなたは做すべき値打ちのある風習があると思ひになりましたか？」

「或る物は値打ちがあり、或物は値打ちがありません。」

「簡單なお答へですが、意味がはつきりしませんね。」とカロミエーツエフはシプヤーギンが彼目くばせしてゐる合圖を故意と見ないやうにしながら云つた。「だが、貴方は今朝貴族の事を論じて居られた所を見ると……あなたは英國で（地主の旦那）と云はれてゐる社會の事を彼地で御見聞になつたんでせう？」

「いや、私にはそんな機会がありませんでした。私はそんな連中とは全然違つた區域で暮らしてゐたのです。さう云ふ貴族に對する意見は私自身の見解です。」

「成程、ではあなたはさう云ふ事柄は我々の間に見ると無用な人間であつて、いかなる場合にも望ましいものでないとお考へになるのですか？」

「先づ第一に、私は正しくても無用な人間だと思ひます。第二に、何れにしても望ましくないものだと思ひます。」

「それは如何云ふ譯です？ 親愛なるあなた。」とカロミエーツエフは云つた。手に「親愛なるあなた」と云つたのは、ちつと椅子に落ちついてゐられないやうな不安らしい容子をしてゐるシプヤーギンを宥めるためであつた。

「何故と云つてあなたの仰るやうな事柄は今から二十年か三十年の中には、どの道滅びて了ふでせうから。」

「けれ共、實際、それは何故です、親愛なるあなた。」

「その時代になれば、土地と云ふものが、階級の差別のない所有者の手に入つて了ふでせうからね。」

「商人にですか？」

「多分商人に、大部分は。」

「何故さうなるんです？」

「彼等が買つて了ふんです、土地を。」

「貴族から？」

「さうです、貴族から。」

カロミエーツエフは卑しげな空笑ひをした。

「あなたは前に水車場や工場について云つてゐらしつたとそつくり同じ事を、土地についても云つてゐらしやるやうですな。」

「さうです、土地についても同様な事を云つて居るのです。」

「そしてあなたはさう云ふ結果になることを喜んでいらつしやるでせうね。」

「いや、少しも喜びません。既にお話したやうに民衆の生活はそれがために少しも善くはなりませんからね。」

カロミエーツエフは少し片手を揚げた。「何ですつて、民衆の幸福を氣遣つていらつしやるんですか？」

「ワシリイ・フョードチツチー」とシプヤーギンは出来るだけ聲高に叫んだ。「あなたの召上る麥酒がまゐりました。(おいシメヨーン)」と彼は小聲でつけ加した。

が、カロミエーツエフは靜かにしやうとはしなかつた。

「あなたは商人に對して。」と彼はソローミンに向つて始めた。「餘り好意のある意見をもつてゐらつしやらないやうですね。併し彼等も畢竟民衆の一部ぢやありませんか？」

「だから如何と仰しやるんです？」

「あなたの目から見れば民衆に關係のあるもの、又は民衆から出てゐるものは何もかも善く見える筈だと私は思ふんです。」

「いや、あなた！ あなたの御想像は當つてゐません。わが國の民衆は必らずしも悪いと云ふのはありませんが、色々な點で非難すべき缺點をもつてゐます。我々の間でも商人はまるで盜賊です。

彼は掠奪のために自分の財産を使つてゐます……どんな風にしてゐるかと言へば、商人は利用されると同時に利用してゐるのです。所が民衆は——」

「民衆は……どうなんです？」カロミエーツエフは高い作り聲で訊いた。

「民衆は……眠つてゐます。」

「では、あなたは彼等を覺醒させたいと思つてゐらつしやるでせう？」

「それは不常なことではないでせう？」

「あゝ！あゝ！それなら、さう云ふ事は——」

「失禮ですが、失禮ですが。」とシプヤーギンは大急ぎで叫んだ。彼はこの場合線を引かなければ……詰り議論を止めさせなければならぬと感じたのであつた。そして彼は線を引いた！ 議論を中止させた！ 彼はその腕を食卓に凭せかけた儘、右の小手先だけを動かしながら、長たらしい細事に亘つた演説をした。一面に於て彼は保守主義を稱讃し、又一面に於て自由主義を是認して、幾分それを特別扱ひにしながら、彼自身をも、その主義の一人に數へた。彼は民衆を讚美すると同時に、その缺點を示した。政府に對しては絶對の信任を表明したが、その凡ての屬僚が政府の恩惠的な計劃を充分に運んでゐるか如何かは疑問であると論じた。彼は言論の任務と尊嚴とを承認した。が、それは出来るだけの警戒が拂はれなければ危険だと斷定した！ 彼は東の方を回いて、初めは喜びの意を示し、それから疑惑の色を見せた。西の方を向くと、彼は最初冷淡な顔付をして見せ、次ぎに突然起ち上つて見せた！ 最後に彼は「宗教、農業、工業」の三位一體を祝福するために杯を揚げやうと提議した。

「權力の保護の下に！」とカロミエーツェフは嚴然としてつけ加した

「賢明にして寛大なる權勢の保護の下に！」とシプヤーギン、訂正した。

沈黙の中に祝杯は飲み干された。シプヤーギンの左側の空席同様に見られてゐるネツダーノフは、確かに何やら不讃成の言葉を發したのであつたが、何の注意も拂はれないで、再び沈黙に陥入つてしまつた。そして食事は討論擾ぎを惹き起さずに満足に終つた。

ワレンチーナ・ミハロウナはこの上もなく愛想の籠つた微笑みを浮べながら、ソローミンに珈琲を渡した。彼はそれを飲みながら、早くも帽子を探してゐた……が、シプヤーギンのために物知らかに胸を掴まれて、いきなり彼の書齋に連れて行かれた。そして先づ非常に上等な葉巻を出され、それから「あなたに絶對の支配をお任せしたい、ワシリイ・フォードチツチ、絶對の支配を——」と云ふこの上もない有利な條件で、シプヤーギンの工場に入つて貰へまいかと云ふ相談を受けた。ソローミンは葉巻は受け取つたが、その申込みは拒絶した。彼はシプヤーギンが何と云つても、固く拒絶してきかなかつた。

「さう打ちつけに「否」と云つて下さるな、ワシリイ・フォードチツチ。少くとも明日まで考へると云つて下さるな。」

「けれ共矢張り同じこつてす。私はお申込みに應ずることが、出来ないのです。」

「明日まで！ ワシリイ・フョードチツチー。あなたの御決心をお延ばしになつた所で何にも御損害はないでせう？」

ソローミンは何にも損害はないと云つた……が、彼は書齋を出て、再び帽子を挿しに行つた。所が今まで彼と一言も言葉を交はすことが出来ずにゐたネツダーノフが彼に近づいて、急いで囁いた。「どうぞ君歸らないで呉れ給へ。で無いと我々は話をする事が出来ません。」

ソローミンは帽子を下に置いた。彼が決心し兼ねた容子で客間の中を往つたり來たりしてゐるのを見ると、シプヤーギンは一層快活な調子で叫んだ。「あなたは勿論今夜泊つて下さいますでせうね。」

「お仰せに従ひませう。」とソローミンは答へた。

マリアンナは——その時客間の窓のところに立つてゐたが——嬉しさに充ち／＼たやうな視線をソローミンに投げた。彼はその眼付のために深い物思ひに沈められた。

二十五

ソローミンの來る前まで彼女は彼を全然異つた人間のやうに思ひ込んでゐた。最初彼を見た時、何

となく個性のない、漠然とした人間のやうに彼女には思はれた……こんな頭髮の奇麗な、筋だらけな瘦せた男なら今までに幾人も會つたことがあると彼女は獨言つた。が、彼の容子をよく見、彼の云ふ事をちつと聽いてゐる中に、彼を頼母しい男だと思ふ感情がだん／＼と強くなつて行つた——彼女が彼女に與へたものは正しくこの信頼の念であつた。

醜い態度とは云へない落着き拂つた、重々しいかう云ふ男は、嘘や駄法螺を云ふことが出来ないばかりでなく、人に石垣のやうな信頼の念を起させるものである……かう云ふ男は他人を裏切らないばかりでなく、人を理解し人の助けになるに違ひない。こんな風に感ずるのはマリアンナ自身ばかりでなく、彼に出會つたものは誰れも同じやうに感ずるに違ひないとさへ彼女は思つた。彼の云つた言葉に對しては、彼女は特別な意味を置かなかつた。商人や工場の話は彼女にとつて何の興味もなかつたが、彼の物を云ふ時の調子、彼が話してゐる時の眼付や笑顔が彼女は非常に好きであつた……。

眞實のある人間……それは異常な人でなければならぬ！ 彼女を感動させたのはこれであつた。一體どう云ふ譯であるかは分らないが、露西亞人は世界の中で一番嘘つきだと事ふ事はよく知れ渡つた事實である。それにも拘らず露西亞人ほど眞實を重んずるものはない——露西亞人ほど眞實に惹きつけられる人間はない。尙その上、マリアンナの眼から見ると、ソローミンは全く異常な烙印をもつ

た人間であつた。彼の後ろにはワシリイ・ニコラエヴキッチ自身が自分の仲間に彼を推薦したと云ふ光背が輝いてゐたのであつた。食事の間にマリアンナはソローミンに關して幾度もネツダーノフと眼を見合はした。が、彼女は何時か知らず／＼の中に二人の男を比較してゐたことに不意と氣がついた。その比較はネツダーノフにとつて有利なものではなかつた。ネツダーノフの容貌は、ソローミンよりは遙かに奇麗でもあり容子も好かつた。が、彼の顔付には屈托や躊躇や焦燥や……心氣沮喪の色さへ見えて、精神の亂れ切つた様子が表はれてゐた。彼はまる／＼荊棘の上に坐つてでもゐるやうであつた。彼は何か齟齬らうとしたが、途拍子もなく神経的に笑ひ出してしまつた……一方のソローミンは、幾らか退屈してゐるらしい容子は見せてゐたが、すかり打寛ろいでゐて、いかなる場合にも他人の云つたり爲たりしてゐる事には全然無關心に、自分は自分だけの事を云つたり爲たりしてゐるやうに思はれた。「どうしても私達はこの人に勸告して貰はなければならぬ。」とマリアンナは思つた。「あの人はきつと何か善い助言を私達に與へて呉れるに違ひない。」かうして食事が濟んでから、マリアンナはソローミンの處へ行くやうにとネツダーノフに勧めたのであつた。

幸ひにも食事は遅くまでかゝらずに終つた。宵の間は幾分退屈であつたが、もう夜までに間もな

つた。カロミエーツエフはきちんとした鹿爪らしい容子をして、物も言はなかつた。

「どうなすつたんです？」とシプヤーギン夫人は半ば揶揄するやうに云つた。「何か紛失物でもなすつたやうな容子ですね。」

「仰しやる通りです。」とカロミエーツエフは答へた。「我々の近衛の司令官の中の或る男は、兵卒がよく靴下を失くすので、始終それを翻して『おい、その靴下を探し出して來い』と口癖のやうに云つてると云ふ話ですが、私も丁度それと同じです。私はいま（貴方）と云ふ言葉を探して來いと云つてゐるんです。と云ふ言葉が何處かへ紛れ込んでしまつたんです。それと同時に位階に對するそれ相應な尊敬や威厳がみんな何處かへ雲隠れしてしまつたんです。」

シプヤーギン夫人は、さう云ふ搜索のお手傳ひなら何の川意もないから眞平ですと決めつけた。

食卓でやつた自分の演説が成功したので、それに乘氣になつて、シプヤーギンは尙二くさりも長々と演説をして、緊急的政策についていかにも政治家らしい二つ三つの法案を提出して見せた。彼はベテルブルグで使ふために特に用意して置いた機智以上に重味のある二つ三つの諺——

（箴言——をもふり撒いた。「若しかう云ふ風に云ふ事が出来ると思つれば」と云ふ文句を前置にして、その諺の一つを彼は二度も繰返へしさをした。それは現在の大臣の中の一人に對する批評であつた。

その大臣について、シプヤーギンは彼が架空的な、目的に驅られた輕卒な不誠實な考へを持つてゐることを非難した。が、一方に又、シプヤーギンは今一人の露西亞人——民衆の一人——と交渉してゐるのだと云ふことを忘れずに、折々諺めいた文句を巧く即席に案出して、自分も又種族として露西亞人であるのみならず、その精神に於ても國民生活の眞髓に接觸してゐる眞の露西亞人であると云ふ事を示さうと努めてゐた。斯うしてその例證として、雨は稻刈りを遅れさせると云ふカロミエーツエフの意見に對して、「稻が赤く枯れれば蕎麥は白くなる」と即座に云ひ返した。それから又、「主人のないう倉は父親のない子供である」「一度布地を裁たふと思つたら十度物尺をあてよ」「穀物のある處にはきつと樹がある」「セント・イゴール祭の時、榎の樹の葉が一銅錢貨の大きさになつてゐたら、カザンの聖母の祭には穀物は倉に入つてゐる。」と斯う云ふ諺めいた文句を幾つとなく引用した。時々彼はちぐはぐな言葉の使ひ方をして、例へば「大工をして飽くまで反抗せしめよ」とか「立派な家とは食に飽きてゐる」とか云つた。が、斯う云ふ大間違ひを聞かされてゐる人々は、「この眞の露西亞人が」飛んだ云ひ損ひをしてゐるとは殆んど氣づかなかつた。それに事實プリンス・コウリーヅキンのお蔭で、かうした露西亞人の言語の誤用には既にもう馴れ切つてもゐたからであつた。シプヤーギンはかう云ふ箴言や諺を云ふ時、一種特異な強い、力の籠つた、百姓言葉のやうな粗野な調子で云ふので

あつた。かうした言葉は、ベテルブルグで適當な場所と適當な場合に云はれれば、地位の高い羽振りのいゝ貴婦人選から「Come in hann ait Tien lede natte gunge（あの方はよくあんなに人民の風習を知つてらつしやるのね！）」と云ふ喝采を博すると同時に、同じやうに勢力のある地位の高い人々が、それにつけ加へて「Les maewset les decoinl」（風習と要求をですよ！）と云ふに違ひないのである。

到頭退屈な會合が終ると、みんなはお定まりの肅やかな愛想を面に浮べて、取つて附けたやうな握手や微笑みや作り笑ひを取り交はしてから、疲れ切つた客を疲れ切つた主人とは別々になつた。

ソローミンは英國式の化粧棚と浴室のついた二階の一ばん好い寢室へ案内された後、ネツダーノフの部屋へ向つた。

ネツダーノフは何よりも先づソローミンがその晩泊することを承知して呉れた事を心から感謝した。

「さぞ……あなたには迷惑だつてでせう……。」

「お、少しも迷惑な事などありません！」とソローミンは落ち着いた調子で云つた。

「それにあなたのお望みを斥けることは出来ませんからね。」

「どうしてよす？」

「それはあなたを親しみ深く思ふからです。」

ネッダーノフが驚いたやうにして喜んでゐる間に、ソローミンは彼の手を握りしめた。やがて彼は椅子へ跨いだやうに腰を下して葉巻に火をつけた。そして椅子の凭掛りに兩腕をかけながら云つた。

「さて、一体どう云ふ話があるんです？」

ネッダーノフも椅子へ跨いだやうな風にソローミンと向ひ合つて腰を下した。が、彼は葉巻はつけなかつた。

「どう云ふ話があるかつて？……あなたに話したいのは、僕が此家を逃げ出さうと思つてゐる事なんです。」

「ぢや、あなたはこの家から暇を取らうと思つてゐるんですね？ 如何云ふわけ？」

「暇を貰ふのぢやありません……逃げ出すんです。」

「何故です。あの人達が君を無理に引留めてゐるんですか。あなたは多分幾らか報酬を前借してゐるんでせう。それなら斯う云へばいゝぢやありませんか……僕は喜んで——」

「僕の云ふ意味が君には通じないんですね、ソローミン君……僕は暇を貰ふのではなく——逃げ出すのだと云つたんです。それは僕一人だけで此處を出るのぢやないからです。」

ソローミンは顔を揚げた。

「誰れと一緒に？」

「君が今日この家で會つた娘と……」

「あの娘と！ あの娘はいゝ顔付をしていますね。君方は愛し合つてゐるんですか。え？……それとも單に君方が二人とも不幸な目に合つてゐるので一緒にこの家を逃げ出すことにしたんですか？」

「僕等はお互に愛してゐるんです。」

「おゝー」とソローミンは少時の間黙り込んだ。「あの娘は此家の人達の親戚ですか？」

「さうです。けれ共あの娘は我々の信條に味方してゐるんです、そして一緒に進まうと決心してゐるのです。」

ソローミンは微笑みを浮べた。

「そして君の決心はどうなんです？ ネッダーノフ。」

ネッダーノフは一寸顔をしかめた。

「何故そんな事を訊くんです。今に僕の行動が分るでせう。」

「僕は君を疑つて云ふんぢやありませんよ、ネッダーノフ。僕は君以外に誰れも覺悟を決めてゐる

ものがないと思ふので一寸訊いたわけです。」

「マルケーロフは如何ですか？」

「さう、成程マルケーロフがゐますね、けれ共あの男は生れながらにして覺悟の出來てゐる人間です。」

その瞬間誰れやら扉を軽くこつくと叩いて、答へをも待たずに開けた。マリアンナであつた。彼女は直ぐにソローミンに近づいた。

「あなたは。」と彼女は始めた。「こんな時間に此處で私にお會ひになつても驚きはなさらないでせう……あの人の（マリアンナはネツダーノフを指した。）きつと何もかも御話いたしましたでせう。御手を下さいまし、そしてあなたの前に立つてゐる娘が誠實な人間だと云ふことをお信じになつて下さいまし。」

「え、私は知つて居ります」とソローミンは眞面目に云つた。彼はマリアンナが入つて來た時から席を立ててゐた。「私は食事の時によくあなたを見て、（あの若い婦人は何て誠實な眼付をしてゐらつしやるんだらう。）と思ひました。勿論ネツダーノフ君からもうあなた方の計劃は聞きました。けれ共あなたが家出しやうと思ひになるのは、本統にどう云ふ譯なんです？」

「どう云ふ譯つて？ 私は内所の目的を持つてゐるんです……もう五六日中に仕事が始まることになつてゐると云ふ事を……ネツダーノフがすっかり打ち明けて話して呉れましたの……ですのに虚偽や矯飾ばかりなこんな貴族の家にどうして私がちつとして居られませう。私が好きな民衆が危険な目に會ふでせう、ですから私は——」

ソローミンは手を振つて彼女を遮つた。

「興奮なすつてはいけません。まあお掛けなさい、僕も腰を下しますから。ネツダーノフ君も掛け給へ。僕に云はせると、若しあなたの理由が唯それだけの事ならば、あなたは未だ此處から家出する必要はありません。その仕事はあなたがお考へになる程さうすんぐ進行してはゐませんよ。その事についてはもう少し慎重に考へる必要があります。無暗に盲進するのは可くありませんよ。」

マリアンナは腰を下して、肩に引つけてゐた大きなスコッチ羅紗を纏ひつけた。

「でも、私はもう此家にちつとしてはゐられませんのよ。今日もあのお馬鹿さんのアンナ・ザハ・ウナが、コーリヤの前で、暗に私のお父さんの事を仄めかして、林檎の實は林檎の樹から遠くへ落ちるものぢやないなんて云ふんですの。コーリヤでさへ吃驚して、それは如何云ふことだつて訊きました。シプヤーギェ夫人の事は何にも申しませんわ。」

ソローミンは再び彼女を遮つた、そして今度は微笑みを浮べた。マリアンナは彼が彼女の事をそれとなく笑つてゐるのに気がついた。が、彼の笑顔には誰れにも氣を悪くさせるやうなところはなかつた。

「あなたの仰ぐことは如何云ふ事です？ 僕はアンナ・ザハロウナがどんな人か、あなたの仰しやゝるその林檎の樹がどんな意味か私は知りません……けれ共、まあ或る馬鹿らしい女の人があるに何か馬鹿な事を云つた所で、あなたは立腹なさるにはあたりますまい？ そんな事に我慢が出来なかつたら如何して一生を送ります？ 世間には馬鹿な事ばかりあるものですよ。いや、そんな事は理由にはなりません。まだ外に何かありますか？」

「僕はシプヤーギン氏が。」とネツダーノフは口籠つた聲で口を入れた。「一日二日の中に自分の方から僕を放逐するだらうと思つてゐます。彼は僕等の事をきつと聞いたに違ひないんです。彼は僕に對していかにも輕蔑したやうな態度をとつてゐます。」

ソローミンはネツダーノフを振り向いた。

「では若し君が何時か放逐されるなら、君は逃げ出さなくてもいいではないですか？」
ネツダーノフは直ぐには答へなかつた。

「僕は前に君に云つたやうに——」と彼は答めた。

「この人は私が。」とマリアンナが遮つた。「一緒にいきますので、今のやうに云ふのです。」

ソローミンは彼女を見詰めて、上機嫌に頸づいて見せた。

「さうです、仰しやる通りですよ、お嬢さん。けれ共僕はもう一度云ひますがね、若しあなたがね革命がもう直ぐに起るからと云ふために此處を家出するおつもりなら——」

「私達があなたにいらしつて頂くやうに手紙を上げましたのは。」とマリアンナは口を挿んだ。

「事件がどんな風になつてゐるかお聞きしたいと思つたからです。」

「それなら。」とソローミンは續けた。「私は——もう少し此家にゐらつしやい——と繰返して云ます。若しあなた方がお互に愛してゐて、その外に一緒にゐる方法がないのなら、それなら——」
「それなら如何なんですの？」

「それならもう僕の云ふ事は、「愛とよき相談」と云ふ諺一つだけです。そして若し必要があれば僕ので出来るだけの事をして上げたいと思ふだけです。それはねお嬢さん、僕は最初お會ひした時からあなたが、それからこの人が僕自身の兄弟姉妹のやうに好きになつたからです。」

マリアンナとネツダーノフは左右から彼の傍に寄つて、彼の手を握つた。

「どうすれば好いかそれだけ云つて下さいまし。」とマリアンナは云つた。「革命がまだ遠いとしても……それまで色々な準備をして置かなければなりませんわ、さう云ふ仕事をするのは、この家では、この周囲の中では出来ませんわ。ですから私達はどうしても一緒に行かなければならないんです……あなたは私達の教へて下さるでせう、私達は何處へ行けば好いかそれだけ仰しやつて下さい……私達をやつて下さい。あなたは私達をやつて下さるでせう、やつて下さいませんか？」

「何處へ？」

「百姓達の中へ……民衆の中に行くことが出来なければ、百姓達の中へ行かなければなりませんわ。」

「森林中へ入りこむさ」と云つたパークリンの言葉を、ネツダーノフは不意と思ひ出した。ソローミンはマリアンナをぢつと見詰めた。

「あなたは民衆と云ふものを知りたいと思ふですか？」

「ええ、私達はたゞ民衆と云ふものを知るばかりでなく、その人達を感化したい……その人達のために働きたいと思ひますわ。」

「宜しい。僕は約束します、民衆と云ふものと親しくなるやうにして上げませう。さう云ふ人達を感化したり、その人達のために働いたりする機会を得させて上げませう。それからネツダーノフ君は

さう云ふ中へ……民衆の中へ行く決心なんだね？」

「勿論その決心です。」と彼は急いで断言した。

「Juggernaut (譯註第四章、パークリンの言葉の中にあり)」と云つた。パークリンの言葉がふと又浮んで来た。「その大きな車が今此方へ進んでくる……自分にはその車輪の軋むのが聞える……」

「宜しい。」とソローミンは考へ深い調子で繰返した。「けれ共何時あなたは家出するつもりです？」

「明日出たいと思ひます。」

「それで——何處へ？」

「叱！ 靜かに……」とネツダーノフが囁いた。「誰れか廊下をやつて来るやうですよ。」

「何處へ行くつもりです？」とソローミンは小聲を出して再び訊いた。

「何處とも分りませんの。」とマリアンナは答へた。

ソローミンはネツダーノフの顔へぢつと眼を向けた。後者はたゞ拒否するやうに頭を振つただけであつた。

ソローミンは手を伸ばして、注意深く蠟燭の心を剪つた。

「では君方に勧めるが、僕の工場へ来たまへ。」と到頭彼は云つた。「汚い處だが安全ですからね。君方を隠まつて上げませう。僕はあすこに小さい部屋を一つ持つてゐる。誰れにも見つかりつこはありません。君方は唯そこへ入りさへすれば好いんです……僕は君方を見棄てるやうなことはありません。「工場には人が澤山ある」と君方は云ふだらうが、それだから非常にいゝんです。人の澤山ある處が隠れるには安全なんです。行くでせうね、え？」

「僕は君に感謝する外ありません。」とネツダーノフは云つた。その間に、最初工場と云ふ考へに吃驚してゐたマリアンナは口早につけ加した。「勿論、勿論参りますわ。まあ本統に有難うございます。けれ共私達を其處にお置きにはならないでせうね。外へ私達をやつて下さるでせう？」

「それは君方の希望に任せます……けれ共あすこの工場にゐらつしやれば、君方が結婚する場合に非常に便利ですよ。直ぐ近くに或る隣人があるんです——僕の従兄弟ですが——名前をゾシムと云ふ管區の坊さんで、非常に愛想のいゝ男です。その坊さんが君方の結婚の祝福式をやつて呉れますよ。」マリアンナは獨りでそつと微笑んだ。その間にネツダーノフはもう一度ソローミンの手を握りしめた、そして一寸黙つた後で訊いた。「けれ共、君の雇主の工場主がそのことを何とか云ひはしないですか？　あなたを悪く思やしませんか？」

「僕の事は心配したまふな……そんな心配の必要はありません。工場さへ巧く行つてれば僕の雇主には同じこつてす。君も君のお嬢さんも工場主から悪く思はれる恐れは少しもありませんよ。それに職工達も君方には少しも危険ぢやありません。ただ豫め僕に知らし給へ。何時君方を待つてたら好いか？」

ネツダーノフとマリアンナとは顔を見合せた。

「明後日朝早くか、その翌日。」とネツダーノフは漸く云つた。「それ以上猶豫してはゐられませんからよ。明日此處を追いされることもありませんから。」

「宜しい……」と彼は頷づいて、椅子から立ち上つた。「毎朝君方の來られるのを注意してゐませう。それにこの壹週間は實際外出しないつもりだから。凡てを適當に用意し給へ。」

マリアンナは彼の傍へ寄つた。(彼女は扉口まで彼を送つて行つたのであつた)「では左様なら、親切なワシリイ・フョードチツチ……あなたの名はさうでしたわね？」

「さうです。」

「左様なら……少くとも今度お目にかゝるまで。そして幾度もお禮を申します。」

「では左様なら……お休みなさい、お嬢さん。」

「そしてネツダーノフ、明日まで左様なら……」と彼女はつけ加へた。

マリアンナは急いで出て行つた。

二人の青年は少しの間ちつと身ぢろぎもせず立つてゐた、そして二人共黙り込んでゐた。

「ネツダーノフ。」とソローミンは到頭始めて、言葉を切つた。が、「ネツダーノフ」と到頭再びはじめた。「あの娘の事で……君が話していゝ事は何もかも話したまへ。あの娘は今までどんな生活を送つて来たのか？ どう云ふ女なのか……如何して此家に來てるのか？」

ネツダーノフは自分の知つてゐるだけの事をソローミンに話した。

「ネツダーノフ。」と彼は遂に又云つた。「君はあの娘をよく世話してやらなければ可けません……若し何かあの娘の身に事件が起つたら……君が非難を負はなければなりませんよ。では左様なら。」

彼は出て行つた。ネツダーノフは尙少時の間部屋の真中に立つてゐたが、やがて「あゝ、そんな事は考へない方がいゝ」と呟きながら、床へ上つて顔を夜着に伏せた。

マリアンナは部屋へ歸つた時、卓の上に小さい紙片が乗つてゐるのを見つけた、それには斯う走り書きがあつた。「私はあなたが憎めではありません。あなたは身を減ぼさうとしてゐるのです。自分のしてゐる事をよく考へて御覽なさい。自分の目を自分から閉ぢてどんな深淵に身を投げやうとし

てゐるか、それは誰れのためなのか、何のためなのか、よく考へて御覽なさい——ワ。」

部屋には一種特殊な新しい微妙な香氣が漂つてゐた。ワレンチーナ・ミハロウナが今しがたまで此處にゐた事は明らかであつた。マリアンナはペンを取上げて、即座に斯う云ふ手紙を書いた。「私を憎めだなんて思はないで下さい。私達二人の中どつちが憎めに思はなければならないかは神様が御存じですわ。私は唯私がおあなたのお家に居ないと云ふ事を知つて居るだけです——マ。」彼女はこの手紙を卓の上に置いた。自分のこの答へがワレンチーナ・ミハロウナの手に入るに違ひないと云ふことを彼女は疑はなかつた。

翌朝ソローミンはネツダーノフに會つた後、シプヤーギンの工場監督の申込みを断然拒絶してから歸途についた。彼は減多に起つたことのない或る事を途々思ひに耽つて行つた。馬車の動搖がいつものやうに軽い睡眠を誘つた。彼はマリアンナとネツダーノフの事を考へてゐた。彼は自分が若し戀に落ち入つたら、自分をもつとまるで異つた顔付をするに違ひないと思つた。自分をもつと全然異つた調子で物を云ひ、異つた容子をするに違ひないと思つた。「だが」と彼は思ひ返へした。「俺には會つてそんな事はなかつたのだから、勿論自分が戀に落ち入つたらどんな容子をするかと云ふやうなことは分らない」と、彼は或る時或る店の勘定臺のところで見たとのことのある一人の愛蘭土展を思ひ出した。その

娘がどんなに美しい黒い頭髪や碧い眼や濃い睫毛をもつてゐたか、彼女がどんなに物悲しげに慰めしげに彼を見詰めたか、その後長い間どんなに彼は彼女の家の窓下の往來を往つたり來つたりしたか、どんなに彼は興奮してゐたか、彼女と知己になれるだらうか如何だらうとどんなに始終思ひつゞけてゐたかを彼は思ひ出した。彼はその時ロンドンに滞在してゐたのであつた。その雇主が買入れのため或る金を持たせて彼を出張させたのである。ソローミンは彼の主人に金を送り返へして、その儘もロンドンに足を留めやうとした程。この愛らしいポリイ（彼は店の他の娘達が彼女を呼ぶのをきいて彼女の名前を知つたのであつた）から受けた感動は強かつた。とは云へ、彼は自分を抑制して主人のところへ歸つてしまつた。ポリイはマリアンナよりは遙かに美しかつた。が、その悲しげな物思はしげな眼付はちやうどマリアンナと同じやうであつた……それにポリイも露西亞人であつた……。

「だが、俺は一體何でこんな事を思つてゐるんだ？」とソローミンは半ば聲に出して云つた。「他人の情人のことで俺の頭を悩ませるなんて！」そして凡ての不必要な考へを振るひ落さうとするやうに外套の襟をふるつた。丁度その時馬車は工場へ着いて、彼の小さな寄宿舎の入口に忠實なパーウエルの妻がちらりと見えた。

二十六

ソローミンの拒絶は非常にシプヤーギンの感情を傷けた。——そのためにシプヤーギンは急にソローミンに對して、あの教育のないスチヴンソンは畢竟そんな偉い商人ではなくて、すつかり假面を被つてゐるわけではないとしても、確かに純粹の賤民の態度を裝つてゐるのだと云ふ意見を抱いた程であつた。「凡てあゝ云ふ露西亞人は、自分達が一つの事を心得てゐると想ひ込んでゐる時には、逆も御しがたい。詰りカロミエーツエフの云ふ通りだ。」斯う云ふ怨恨的な憤慨の影響から、この政治家の *an Herbe* (雛子) は、一層反感を増した冷然とした態度でネツダーノフを見るやうになつた。で彼は、今日はあの家庭教師の授業をうけなくても宜しい——自修習慣を作らなくてはいけない——とコリーヤに申し渡した……とは云へ、彼はネツダーノフが顧慮してゐたやうに、自分から家庭教師に解雇を云ひ渡しはしなかつた。彼は前と同じやうに彼を度外視してゐた。が、ワレンチーナ・ミハロウナはマリアンナに對して黙つてゐなかつた。彼等の間には或る恐ろしい場面が演じられた。

午後二時頃彼等二人はどう云ふ譯でか不意に二人つきりで客間に居残つた。二人は避けがたい衝突の時が來たことを二人とも直ぐに氣づいた。そして一寸躊躇した後、二人は両方から次第に近寄つた

ワレンチーナ・ミハロウナはそれとなく微笑みを浮べ、マリアンナは堅く唇を噛みしめて、二人とも眞蒼になつてゐた。ワレンチーナ・ミハロウナは部屋を横切つて行きながら、眼を左右にそらして、天竺葵の葉つばをちぎつた……マリアンナの眼は、自分に近寄つて来るその笑顔を眞正面にちつと見詰めてゐた。

シプヤーギン夫人は最初に立停つて、指先で椅子の凭掛りを叩きながら「マリアンナ・ウイツケンツエウナ。」と無頓着な調子で云つた。「私達は手紙で物を云ひ合はなければならぬ關係になつたやうね……かうして一つ屋根の下に住んでるのに、それぢや随分變ですわ、そして私がこんな風な變な事を嫌ひなことはあなたにも分つてゐるでせう。」

「手紙で話すことを初めたのは私ぢやありませんわ、ワレンチーナ・ミハロウナ。」

「え……そりや左様です。今度の變なことは私が悪いんです。けれど、あなたに或る考へ……を起させるには他にどうしていゝか分らなかつたんです……如何云つたら好いか……或る感情——」

「はつきり云つて下さい、ワレンチーナ・ミハロウナ、構はずに——私の氣を悪くすることなんぞお考へにならないで。」

「正しい道を守ると云ふ……感情を……。」

ワレンチーナ・ミハロウナは言葉を切つた。室内には椅子の凭掛りを叩いてゐる彼女の指の音より外には何にも聞えなかつた。

「どうしてあなたは私が正しい道を破つてゐるとお考へになりますの？」とマリアンナは訊いた。ワレンチーナ・ミハロウナは肩をしゃくり上げた。

「Ma Chère, vous n'êtes Plus un enfant, (まあ、あなた、あなたはもう子供ぢやありませんよ。)だから私の云ふ事がよく解る筈ですわ。あなたは本統にあなたの行ひが、私や、アンナ・ザハロウナや家中のものに隠してゐられると思つてゐるんですか？ それにあなたはその秘密を隠さうともなさらないのね。あなたは見てくれと云はないばかりな人つばらな振舞ひをしてゐるんですもの。それに氣がつかないのは多分ポリス・アンドレイイチだけだせうよ……あの人は他のもつと役に立つ重大な事件に夢中になつてゐますから。けれどあの人を別にすれば、あなたの行ひは誰れもみんな——みんな知つてゐますわ！」マリアンナの顔色はますます蒼くなつた。

「お願ひですから、ワレンチーナ・ミハロウナ、もつとはつきり云つて下さいまし。本統に何をあなたは氣に觸へていらつしやるの？」

「I'm insolent. (横着者奴！)」とシプヤーギン夫人は思つた。が、彼女はまだ自分を抑制してゐた。

「あなたは私が何故氣を悪くしてゐるか聞きたいんですの？ マリアンナ。ちや云ひますわ。私はあなたが、血筋も教育も社會の地位もあなたよりずつと下の若い男と長い間會つてゐたのを忌はしく思つてゐるんです。いゝえ、忌はしく思つてゐる……と云ふ言葉だけちやまだ意味が弱いくらゐですわ……私はあなたが夜遅く……夜中にあの若い男の部屋へ行くのを身詣ひしてゐるんです。而もそれを私の屋根の下で！ あなたはそれが正常な事で、私があなたの氣紛れを黙つて目をつぶつてゐるのが當り前だと思つてゐるんですか？ 非難をうけたことのない貞操の正しい女として…… Oui, mademoiselle, je Pai été, je le suis, et j'en serai toujours (どうです、あなたは、今まで左様でした、今もさうですそしてこれからも左様でせう)——私は忌はしく思はずにはゐられないんです。」

ワレンチーナ・ミハロウナは彼女の嫌惡の重さに押し潰されたやうに、安樂椅子にぐたりと身を投げかけた。

マリアンナは初めて微笑みを見せた。

「私は今までいゝ、今でも、これから先でも、あなたの貞操の正しい事は疑ひませんわ。」と彼女は始めた。「私は眞面目にそれを申しますわ。けれどあなたはそんなにお腹立ちになる必要はありません私はあなたの屋根の下に何にも破廉恥な事を惹き入れてはゐないんですから。あなたが暗に仰しやつ

た若い人を……えゝ、私は確かに……あの人を愛するやうにはなりましたけど……。」

「あなたがネツダーノフさんを愛してゐるんですつて！」

「えゝ、私あの人を愛してゐます。」

ワレンチーナ・ミハロウナは椅子から立ち上つた。

「まあ、マリアンナ！ あの人は家柄もなければ家族もない學生ぢやありませんか！ それにあなたより年下ぢやありませんか！（かう云ふ言葉を發する時、何となく唾を吐きかけるやうな心地快けた容子があつた。）この先如何なると思ふんです？ あなたは賢い人なのに、あんな男に何を期待することが出来るんです？ あの人は唯淺はかな子供ですわ。」

「あなたはあの人の事を何時もそんな風には仰しやつてゐませんでしたわ、ワレンチーナ・ミハロウナ。」

「おゝ、どうぞ私の事は放つとして頂戴…… Pas tant desiré que O, je vous prie. (どうぞ其様な風にむかつ腹を立てないで下さい。)私達はあなたの事を云ひ合ひしてゐるんですよ——あなたとあなたの將來の事で。まあ考へても御覽なさいな！ あの人があなたにとつて如何なお婿さんか？」

「私は打ち明けて云ひますけどね、ワレンチーナ・ミハロウナ、私はそんな風にその事を考へてゐる

んぢやありません。」

「えゝ？ 何ですつて？ それは一體どう云ふ事ですか？ あなたは自分の感動の儘に動いてゐるつもりなんでせう……けれどお終ひにはどうしても結婚しなければならぬぢやありませんか？」

「私には分りませんわ……其様なことは考へてゐませんから。」

「そんな事は考へてゐないんですつて？ まああなたはまるで氣狂ひですわ！」

マリアンナは少し顔をそむけた。

「もうこの話は止めませうよ、ワレンチーナ・ミハロウナ。何の役にも立ちませんわ、お互に了解しつこはありませんもの。」

ワレンチーナ・ミハロウナは衝動的に起ち上つた。

「いけません、私はこの話をお止めにする譯にはいきません！ 大へんに大切な事ですよ……私にはあなたに云はなければなりません……」ワレンチーナ・ミハロウナは「神様に對して」と云ふつもりであつたが、彼女は口籠つて「世間に對して」と云つた。「こんな不仕懸な事をきいては世間に對して黙つてはゐられません。どうして私があなたを了解することが出来ないんです？ 若い人つてものは何て憎らしい自惚れを持つてるんでせう……いゝえ、私にはあなたがよく解つてゐますわ。あなた

があの新らしい思想にかぶれて、自分の破滅するの知らないでゐる事をよく知つてます。けれど一度破滅したらもう追つきませんよ。」

「さうかも知れませんが、けれど斯う云ふ事だけははつきり云つて置きます、私が破滅したつて、あなたのお助けに頼るために指一本出しはしないつて事を。」

「又自惚れなの！ 恐ろしい自惚れですね！ まあお聞きなさい、マリアンナ、お聞きなさいつてば。」と彼女は不意に調子を變へながら續けた……彼女はマリアンナの傍へ詰め寄らうとしたが、マリアンナは一步後へ下つた。「Eonteg-moi, je vous en conjure (お頼みだから聽いて頂戴) 詰り私が云ふのは、お互に了解し合ふことが出来ない程私は年を取つてもゐないし馬鹿でもないつて事ですよ。」

Je me suis Pas une encroûte (私は泥人形ぢやありませんよ。) 私は若い時分には……今あなたがさう思はれてるやうに……共和黨のやうに思はれたこともありませうわ。お聞きなさい、私は自分の思ひもしない事を云ひはしません。私はあなたに對して母親のやうな優しみを感したことは一度もありませんわそれにあなたもそんな事を悲しく思ふやうな性質ぢやありませんわね……けれど私はこれ迄あなたに對しては大きな責任を持つてると思つてゐたんです、今もさう思つてゐるんです、そして何時もその責任を果さうと努めてゐたんです。私があるために好い配偶者を考へて、ボリス・アンドレエヰキ

「ツチも私も、その爲めにはどんな面倒も見て上げるつもりでゐたんですけれど——その候補者は多分あなたのお氣に入らなかつたんでせう……けれど私は心の底から——」

マリアンナはワレンチーナ・ミハロウナの美しい眼やほんのり薄紅をつけた唇や、この美しい婦人が見せびらかすやうな風に絹の上衣の胸にあてがつてゐる、指輪で飾られた指の微かに開いた手をちら／＼眺めてゐた、が、不意に彼女の言葉を断ち切るやうに云つた。

「配偶者ですつて？　ワレンチーナ・ミハロウナ、その配偶者と云ふのは、あなたのお友達のあの無慈悲な卑劣なカロミエーツエフさんの事ですか？」

ワレンチーナ・ミハロウナは胸當から指をどけた。

「さうです、マリアンナ・ウイッケンツエナ、私はあの教育のある立派な青年のカロミエーツエフさんの事を云つてゐるんです。あの人はきつと奥さんを幸福にする人ですわ、氣狂ひ女でなければあの人の申込を断る人はありませんわ——氣狂ひ女でなければ！」

「では如何すればいゝんです、*Эгогого*。(お叔母さん) 私はその氣狂ひ女の一人かも知れませんわ。」
「けれどどんな悪い所があの人にあるんです——もつと眞面目にその悪い所を去つて御覽なさい。」
「いゝえ、悪い所なんて少しもありませんわ、私はあの人を輕蔑してゐるだけの事です。」

ワレンチーナ・ミハロウナはもう我慢がならないと云つたやうに頭を一方から一方へと振つて、再び安樂椅子に腰を下した。

「あの人の事はあの人の事として *Retour nous a nos notions*。(私達の問題に歸りませう。) それではあなたはネヅダーノフさんを愛してゐるんですね？」

「えゝ。」

「そしてあなたはこれから天張りあの人へ……會ひに行くつもりなんですか？」

「えゝ、そのつもりですわ。」

「それぢや……若し私がそれを禁じたとしたら？」

「私はそんなお云ひつけは聞きませんわ。」

ワレンチーナ・ミハロウナは椅子の中で身を跳らした。

「まあ、あなたは私の云ひつけを聴かないんですつて？　まあ本當に驚いた！　情をかけて置いていてあげるのに、私の家で世話になつてゐるのに、その娘が私に向つてそんな事を——この私に向つて……そんな事を云ふなんて……」

「不名譽なことをした父親の娘がそんな事を。」とマリアンナは陰鬱に言葉を挿んだ「構はずにさう

仰しやうきうだ。」

Ce n'est Pas moi qui Vous le fais dire, mademoiselle, (私はそんな事は云やしませんでしたよ、お嬢さん。) けれ共どつちにしても其様な事は何も自慢にはなりませんね。私のお金で暮らしてゐる娘が——」

「そんな事で私をお辱めになることはありませんわ、ワレンチーナ・ミハロウナ！ コーリヤのためには佛蘭西語の女教師をお雇ひになつたらもつとお金がかゝるでせうよ……私はコーリヤに佛蘭西語を教へて上げてゐますからね。」

ワレンチーナ・ミハロウナは片隅に白糸で大きく組み合せ文字の刺繡してある、ランラン香水の匂ひのする白麻のハンケチを持つた一方の手を揚げて何か云ひ返へさうとしたが、マリアンナは激しい調子で續けた。

「あなたはあんな色々な事を數へ立てないで、あんな偽つばちなお情けや費用の事を仰しやらないで、「私の愛してゐた娘が……」と仰しやれば話がうまく行つたでせうに、その方がずつと好かつたでせうに、あなたはそんな嘘を仰しやるにはまだ餘まり正直過ぎますのね。」マリアンナは痙攣でも起したやうに顫えてゐた。「あなたは始終私を憎んでゐらしたんですわ。たつた今もそれを仰しやつたやうに、あなたの平常爪めかしていらつしやる事や、蔭口や不名譽を受けてゐる事を私がちゃんと知つて

るのをあなたは今だつて心の底で喜んで——そうですわ——喜んでいらつしやるんです。あなたが心配していらつしやる事は、あなたの貴族的な節操の正しい家庭に不名譽を被やしないかと云ふ事なんですわ。」

「あなたは私を侮辱してゐるんですね。」とワレンチーナ・ミハロウナは口籠つた。「どうぞ部屋を出て行つて頂戴。」

が、マリアンナは自分を抑へることが出来なかつた。

「あなたはあなたの家の方が、家中の方やアンナ・ザハロウナが私の行ひをすつかり知つてると仰いましたわね、そしてみんなが驚いたり怒つたりしてゐると仰しやるんですね……けれどあなたは私があなたか、あの人達か、あの人達の誰れかに何か訊いて見ると思つてゐらつしやるの？ 私があの人達の云ふ事を大切に思つて聞くとでも思つてゐらつしやるの？ あなたが今仰つたやうにあなたのお金で暮らしてゐるのを氣持ちよく思つてゐるとでも考へてゐらつしやるの？ 私はこんな贅澤な眞似をするよりはいつそ貧乏で暮らしたいと思ひますわ。あなたにはあなたの家の方と私との間に隠しても隠しきれない隙があるのがお分りになりませんか？ あなたも懶巧な方ですから——それが分つていらつしやるに答はありませんわ。そして若しあなたが私を憎んでゐらつしやることすれば、私が

あなたに對してどんな感情をもつてゐるかお分りにならない筈はありませんわ、そんな事は分り切つた事ですから一々細かには云ひませんが。」

「Scriez, scriez, Vous dis-je! (出てつて頂戴、出てつて頂戴と云ふのに!)」とワレンチーナ・ミハロウナは繰返へして、美しい華奢な小さい足でちだんだ踏んだ。

マリアンナは一足戻りの方へ出かけた。

「私はすぐにあつちへ出て参りますわ。けれどあなたは斯う云ふ事を知つてらして、ワレンチーナ・ミハロウナ、ラシーヌの Bajaret の中には、ラツシエルの口から出てさへその scriez と云ふ言葉に何の効力もなかつたと書いてあるさうですよ、そしてあなたはラツシエルから見ればすつと下ですからね。それから未だあなたは何か仰しやいましたわね。 Je suis une honnête femme, Je l'ai été, et Je serai toujours. (私は正直な女です、今までもさうでしたけれど、これからも左様です) つて。でもね、私の方があなたよりすつと正直だと思ひますわ。では左様なら—」

マリアンナは足早に出て行つた。その間にワレンチーナ・ミハロウナは椅子から立ち上つた。彼女は金切聲を揚げて叫ぼうとした。今にも泣き出さうとした……が、何と叫んだら好いのか分らなかつた。涙が思ふやうに出て來なかつた。

彼女はハンケチで自分を煽ぐより外にどう氣を和らげやうもなかつた。が、それはしみ込んでゐる香氣が一層彼女の神經をいら立たせるだけであつた。彼女は憐めに辱かしめられたやうな氣がした。今彼女が聞いてゐた言葉の中には幾らか眞理があることを知つた。が、自分はどうしてあんなに理不盡に云はれることがあらう? 「私はそんな奇地悪な女か知ら?」と彼女は考へた。そして彼女は不圖二つの窓の間に掛つてゐる鏡の面に眞正面に映つてゐる自分の顔を眺めた。何となく惱ましげな、上氣した赤い色が斑らに残つてゐながら、やつぱり人を魅惑するやうな美しい顔や、微妙な物優しい和らかな眼が鏡の面に映し出されてゐた……「こんな目付をしてる私が。」と彼女は再び考へた。「私が意地悪な女か知ら?」

が。その瞬間彼女の夫が入つて來た。彼女は再びハンケチで顔を隠した。

「お前何か面白くない事があるのかい?」と彼は心配さうに聞いた。「どうしたんだ、ワリーヤ。(彼はわざとこの愛稱を使った。勿論これは特に田舎で全然使はれてゐる時の外は決して使はないのであつた。)」

最初の間彼女は黙り込んでゐて、何にも面白くない事があるのぢやないと云つたが、到頭椅子に坐つた儘蕭やかな媚びるやうな態度で振り向きながら、夫の肩に兩腕を巻きつけて(彼は彼女の方へ身

を屈めて立つてゐた。彼の胸衣の胸前に顔を隠して、何もかも残らず話してしまつた。何にも偽らずに、又何にも秘密の計謀を持たずに、彼女は全然許せないとしても、少くとも或る程度までマリアンナの云つた事を是認しやうと努めた。彼女は凡ての非難を彼女の若さと彼女の熱情的な性質と、彼女の子供の時分の教育の缺點の所爲にした。彼女はまた或る程度までは、やつぱり何にも妙な計謀は持たずに自分自身を批難した。「私の娘でしたら決してこんな事は起りはしなかつたでせう！ もつとまるで別な監督の仕方をしてせうけれど。」と彼女は云つた。シプヤーギンはお終ひまで思ひ遣りの籠つた、物優しい、幾らか厳格な容子でちつと耳傾けてゐた。彼は夫人が肩から腕を離さず、頭を動かもしないのでやつぱり屈んだ儘立つてゐた。彼は彼女を天使と呼んで、彼女の顔を接吻して、自分は今此家の主人としてどう云ふ處置を取らなければならないかを知つたと云つた。そして不快ではあるが止むを得ない義務を果さうと決心して、人情に富んでゐる、とは云へしつかりとした人間らしい歩調で部屋を出て行つた。

午後八時頃、食事が終つた後でネツダーノフは自分の部屋に坐つて、友人のシーリンに手紙を書いてゐた。

「親愛なるウラヂミール、僕は今僕の生活に於ける一大變化の瞬間にこの手紙を君に書く。僕は今

この家から解雇されやうとしてゐるのだ。僕は此處を去らうとしてゐるのだ。併しそんな事は何でもないことなんだ。僕は僕一人でこゝを出て行くんぢやない。何時か君に書いたことのあるあの娘が僕と一緒に行くんだ。僕等二人は生涯の運命がよく似通つてゐたために、僕等の物の考へ方が同じだつたために、又お互の感情が共鳴し合つたために結びついたのだ。僕等は今愛し合つてゐる。少くとも今僕の上に形造られてゐる愛より外には、どんな形をとつても僕は他に愛情を感じることは出来ないと思つてゐる。併し今僕が心中に人知れぬ恐怖と一種奇妙な感情を抱いてゐないと云つたら、君に嘘をついてゐることにならだらう。未來は眞の闇だ。そして我々はこの闇の中へ突進して行かうとしてゐるのだ。僕等が何處へ行くのか、どんな仕事を撰んだかと云ふ事は君に説明する必要はない。マリアンナと僕は幸福を求めてゐるんぢやない。我々自身の享樂を欲してゐるんぢやない。手を取つて相助け合ひながら奮闘しやうと思つてゐるのだ。僕等の目的は僕等にははつきりと分つてゐる。が、その目的に達するにはどんな路を辿らなければ分らないのか分らない。同情や保護を看出すことはないとしても、少なくとも勞働の自由を看出すことは出来るだらう。マリアンナは優れた正直な娘だ。若し僕等が破滅しなければならぬ運命になつたとしても、僕は彼女を破滅に陥れたと云ふ良心の苛責は感じないだらう。何故と云つて、今彼女にとつては他に生る路を看出すことが出来ないからだ。併し

ウラヂミール、ウラヂミール！ 僕の心は重苦しい。勿論それは彼女に對する僕の感情については……僕には分らないが……疑惑のために惱まされてゐる。とに角後へ引き返すにはもう時遅れなんだ。遠くから僕等二人に手を差出してくれ給へ、そして忍耐と自己犠牲の力と愛とを……別けても愛を我々のために祈つて呉れ給へ。そして我々が魂を捧げで愛してゐながら、まだ見知らぬ人々、我々の心臓の血潮であるところの露西亞の民衆よ、我々をあまり冷遇しないで、君達が期待してゐるところを教へて呉れるやうに！ 左様ならウラヂミール、左様なら！」

かう云ふ手紙を書いた後、ネツダーノフは村の方へ出掛て行つた。

その次の晩、曉方の光がさすか差さないかに彼はシプヤーギン家の庭園からあまり遠くない樺林のあたりに佇んでゐた。彼の少し後ろの方には、馬銜をつけてない馬を繋いだ二頭曳の百姓馬車が、大きな様のこんもりした緑の木蔭に見えてゐた。馬車の中には席の座席の下に白髪刈の小さい年寄の百姓が、乾草の束を敷いて、つぎはぎだらけな外套を枕にして眠つてゐた。ネツダーノフは絶えず往來の方や、庭園の端れにある柳の茂みの方を見張つてゐた。夜の仄白い静寂がまだ凡ての物の上に掩ひかゝつてゐた。弱々しい光を競ひ合つてゐた小さい星が、大空の茫漠とした深みに消えて行つた。ひろびろと擴がつてゐる雲の下の方の丸い縁から青白い光線がさつと射した。と、轉て先づ曉方の冷や

くした空気がそよいで來た。不意にネツダーノフは身を顛はして、四方へ氣を配つた。最初何處か直ぐ近くで鋭い軋るやうな物音がして、やがて扉の開く音がした。シヨールにくるまつて、露出しの手に一つの包みを抱えた小さい女の姿が、用心深い歩き付で森とした柳の木蔭から和らかに塵埃の濕つた往來の方へ出て、爪先歩きをしながら眞直ぐにそこを横切つて、小さい林の方へ曲つた。ネツダーノフはそつちへ驅け寄つた。

「マリアンナ？」と彼は囁いた。

「私よ？」優しい答へが顔を包んでゐるシヨールの下から聞えた。

「こつちです、僕についていらつしやい。」とネツダーノフは束を差出した彼女の露出しの手をおぼくと捕まへながら答へた。

彼女はさながら寒さがぞつと沁みこんだかのやうに身を縮めた。彼は彼女を馬車の處へ連れて行つて、百姓を起した。百姓は直ぐに飛び起きて、急いで馭者臺に攀ち上つて、大きな外套に腕を廻して手綱の代りにつけてある繩を手を取つた。馬はぶる／＼と身を顛はした。百姓はまだ睡眠から覺めきらない唖れ聲で絶えずしづかに馬を勵ました。ネツダーノフは馬車の席の座席の上に外套を敷いてマリアンナを腰掛けさせ、彼女の足を手布でくるんでやり——馬車の下に敷いた乾草が濕つてゐたので

「自分は彼女の傍に座つて、百姓の方へ身を屈めながら小聲で云つた。『さつきお前に云つて置いた彼處へやつて呉れ。』百姓は手綱をぐつと引いた。馬は鼻風を吹いたり、胴震ひしたりしながら、森を抜けた。福の狭い古い車輪はがた／＼軋んだり動揺したりしながら、馬車は街道を走つて行つた。ネツダーノフは彼女を交へるために片手をマリアンナの腰に廻してゐた。彼女は冷え切つた指でシヨールを少し揚げて、彼の方を向いて微笑みを浮べながら云つた。『何て気持ちよくせい／＼してゐるんでせうね、アリョーシャ！』」

「左様。」と百姓は答へた。「露が一ぱい下りるでがせうよ。」

車輪の軸が路傍の丈の高い雑草の上に觸ると、美しい雫が夕立のやうにぱら／＼と降り注ぐほど露は既に一ぱいに下りてゐて、草の緑色が青みかゝつた灰色に見えた。

マリアンナは再び寒さのために身をすくめた。

「何てせい／＼してゐるんでせう、何とせい／＼として！」と彼女は浮き／＼した聲で繰返した。「そしてもう自由なのね、アリョーシャ、自由なのね！」

二十七

或る紳士と婦人とが今馬車で着いて、彼に面會を求めてゐることを人々が告げに行くと、ソローミンは直ぐに工場の門まで駆け出して行つた。この二人の客に朝の挨拶もせず、たゞ幾度か頷づいて見せたゞけで、ソローミンは中庭まで馬車を乗り入れるやうにと百姓に命じた。そして小さい寄宿舎の處まで真直に導いて行つて、マリアンナを馬車から助け下した。ネツダーノフは彼女の後から跳び下りた。ソローミンは小さい、長い、暗い廊下づたいに二人を案内しながら、寄宿舎の裏側についてゐる狭い小さい曲りくねつた梯子段を二階へと上つた。そして或る狭い扉口を開けた。三人は二つの窓のついた非常に奇麗に掃除の出来てゐる小さな部屋に入つた。

「好く來ましたねー」とソローミンは今日は一層ゆつたりと快活に見える何時ものやうな笑顔を見せながら云つた。

「この部屋は君の宿だ、それから其處にもう一間隣りに部屋があります。見かけはさう立派ではないが、併しまあ住めますよ。そして此處なら誰れも君方をつけ廻すものはありません。この窓下には地主が花畑と云つてゐる場所があります。だが、僕なら野菜畑と云ひますね。眞向ふは塀で、右と左は生垣です。静かな小さい隠れ場所です。さて其處でもう一度歡仰の意を表しますよ、お嬢さん、それから君にも、ネツダーノフ！」

彼は彼等二人と握手を交はした。二人はまだ襟巻もとらずにちつと立つて、半ば當惑したやうな、半ば嬉しいやうな気持ちで、物も言はずに前の方を眞直ぐに見詰めてゐた。

「如何したんです？」とソローミンは再び始めた。「まあ外套や何かを脱ぎ給へ！荷物はどんな物を持つていらつしたのです？」

マリアンナはまた手に抱へてゐた包みを見せた。

「持つてまわりましたのはこれだけです。」

「それから僕のトランクと雜糞とはまだ馬車に置いてあるんです。けれ共直ぐに行つて持つて來ます。」

「まあ此處に居たまへ。」ソローミンは扉を開けた。「パーウエル！」と彼は暗い階段に向つて叫んだ。

「驅けてつて、馬車の中に置いてあるものを……此處へ運んで來よ。」

「直ぐ持つて參ります。」聲をかければ居なかつた事のないパーウエルの聲が聞えた。

ソローミンはショールをとつて、外套の釦をはづしてゐたマリアンナの方を振り向いた。

「何もかもうまく行きましたか？」と彼は訊いた。

「え、何もかも……私達誰れにも見つかりませんでした。私シプヤーギンに手紙を置いて參りました。」

たの。私は衣服は一枚も持つて參りませんでしたのよ、ワシリイ・フォードウイツチ、だつてあなたが私達をやつて下さると思ひましたから……マリアンナは何故か「民衆の中へ」と云ふ言葉をつけ加へることが出来なかつた。でも、どつち道あんな衣服は入りませんもの。けれど必要なものを買ふだけのお金は持つてまわりました。

「ぢや凡ての事は後で御相談しませう……そこで」とソローミンはネツダーノフの荷物を運んで來たパーウエルを指しながら云つた。彼のこの上ない友達を御紹介します。私を信用して下さると同時に……充分此男を信用たすつて宜いです。お前の湯沸の用意をする様にターチャナに云つたかね？」と彼は小聲でつけ加した。

「直ぐ持つて參る筈です」とパーウエルは答へた。「それからクリームも何もかも。」

「ターチャナと云ふのはこれの妻です。」とソローミンは續けた。「彼女もこの男同様に信用して下さつて大丈夫です。あなたが少しお馴れになる迄……さう……彼女がお附添ひをするでせうよ、お嬢さん。」

マリアンナは部屋の片隅に置かれてある小さい革張の長椅子に外套を投げかけた。「私をマリアンナと呼んで下さい、ワシリイ・フォードウイツチ——私はお嬢さんなんて云はれてゐたくないんです。そし

て私は誰れも附添つてくれる人なんぞ入りませんわ……私は下婢を使はうつもりで此處へ参つたのでありません。私の上衣をそんなにざろ／＼御覽になつてはいけませんよ、私は外に——一つも持つて居りませんの。これもみんな變へなければなりませんのね。」

彼女の黄褐色の美しい上衣は、非常に質素ではあつたが、ベテルブルグ仕立のもので、マリアンナの腰と肩のあたりに優美な装が重なつてゐて、全然流行風であつた。

「ぢや下婢でなく、アメリカ流に御手傳ひと云ふ事にしませう。だが、まあお茶を上らなければ可けない。まだ早いし、疲れてもいらつしやるでせう。僕はこれから工場の仕事を見廻りに行つて來ます。あとで又お目にかゝりますよ。御用があつたら何でもパーウエルかターチャナに云ひつけて下さ。」

マリアンナは素早く両方の手を彼に差し出した。

「どうお禮を申し上げたらいいのかわりませんわ、ワシリー・フォードチツチ。」と彼女は心から感動して彼を見詰めた。

ソローミンは彼女の一方の手をそつと撫でた。「お禮なんぞ仰つしやるほどの事はありませんが……さう云つては本統でないかも知れませんね。あなたの感謝はこの上ない喜びを私に與へるのですと云

つた方が宜いですね。さう云へば丁度返禮になりますからね。ぢや暫く失禮！パーウエル行かう。」

マリアンナとネツダーノフとは二人つ限りになつた。

彼女は彼の方へ駆け寄つて、ソローミンを眺めてゐたと同じ眼付で、一層興奮した嬉しさうな浮き／＼した容子さへ見せて彼を見詰めた。「お、あなた！」と彼女は云つた。「……私達の新しい生活が到頭始まつたのね、到頭！私達が二三日あるだけの此哀れな小さい部屋が、あの忌々しい屋敷と較べて私にはどんなに懐しく嬉しいかあなたには信じられないでせう。ねえ、あなたも嬉しいでせう？」

ネツダーノフは彼女の手を取つて自分の胸に押しつけた。

「あなたとこの新しい生活に入つたことが僕には幸福です、マリアンナ！あなたは僕の路案内の星ですよ、僕の保護者です、僕の力です……。」

「可愛い、アリオシヤ！でも一寸お待ちなさい。私顔を洗つてさつぱりして來たいんですから私自分の部屋へ行きますわ……あなたは此處で暫く待つて、頂戴。」

マリアンナはもう一つの部屋へ入つて扉をしめた。そして一分ばかりすると、半分扉を開けて、頭を覗かしながら言つた。「ソローミンは何て好い人でせうね！」やがて再び彼女は扉をしめた、かちや

りと鏡を下す鍵の音がした。

ネヅダーノフは窓際へ行つて小さい庭園を眺め下した……古い、非常に古い一本の林檎の樹がどういふ譯か特に注意を惹きつけた。彼は身體を揺つたり伸びをしたりして、荷物を開きはじめた。が、何にも取出さうとはしないで、物思ひに沈んだ……。

十五分ばかりするとマリアンナが顔を綺麗に洗つて、晴れ／＼と元氣よく部屋へ歸つて來た。と、間もなくパーウエルの妻のターチャナが湯沸と茶盆と巻きパンとクリームとを持つて入つて來た。

ジブシイのやうな彼女の夫とはまるで反對に、彼女は或る典型的な露西亞女で、身體付ががっちりとして、亞麻色の頭髮を角の櫛へ大きな結び玉のやうにぐる／＼と捲きつけて、帽子を被らずに、ぼんやりしてはゐるが氣持ちのいゝ容貌をしてゐて、いかにも氣立の善さうな灰色の眼を持つてゐた。彼女の服は色褪せた更紗の寬衣ではあつたが、さつぱりとしてゐた。その手は大きいことは大きい、清潔で、いゝ形をしてゐた。彼女は物靜かに點頭をして、少しもつべこべした調子でなく、しつかりした精確な發音ではつきりと口を利いた。

「よく御出でになりました。」

そして湯沸やお茶の道具を並べはじめた。

「お手傳しませう、ターチャナ。一寸私に拭巾をお貸しなさい。」

「宜しうございますよ、お嬢さま、私共は馴れて居りますから。ワシリイ・フョードチツチが仰いしましたが、何か御用があたりになりましたら、どうぞお云ひつけになつて下さいませ。私共は出來ますことなら何でも喜んでいたしますから。」

「ターチャナ、どうぞ私をお嬢さまつて云はないで頂戴……私まるで貴婦人のやうな服を着てますけどね……でも私は……私はすつかり……」

ターチャナの鋭い眼がちつと見詰めてゐるので、マリアンナは狼狽して言葉を途切らした。

「では何におなりになるので御座いますか？」とターチャナは落ちついた聲で訊いた。

「それりやまあ私は……生れは貴婦人ですけど、そんな事はみんな見棄てたいと思つてるのよ、そしてみんなのやうに……極く普通の女のやうになりたいと思つてるのよ。」

「まあ、左様ですか？ ちや、よく分りました。あなたはあの單純化された人間にならうと思つてゐらつしやる方の一人なんです。この頃ちやさう云ふ方がなか／＼澤山ございすまね。」

「單純化された人間ですつて、ターチャナ、それはどう云ふ事なの？」

「え……それは今私共の間に流行つてゐる言葉なのでございますよ。自分等の人達と同じやうに

なることを、單純化つて云つてゐるのでございますよ、成る程、百姓達に善い分別を教へるのは——善い仕事でございますね。でもなか／＼難かしい仕事でございますよ、え、え、難かしいでございますとも！ まあどうぞ早くお初めなさいまし。」

「單純化！」とマリアンナは繰り返へした。

「あなた聞いて、アリオーシヤ。あなたと私はもう單純化された人間なのよ。」

ネヅダーノフは笑ひ出して、繰返へしさへした。

「單純化された人間！」

「そして此方様は——あなたの旦那さまか御兄弟でございますか？」とターチャナは大きな器用な手で注意深くコップを洗ひながら、ネヅダーノフからマリアンナへ優しい眼付を向けて訊いた。

「いゝえ。」とマリアンナは答へた。「私の夫でもなければ兄弟でもありませんのよ。」

ターチャナは頭を振り揚げた。

「ではあなたは自由な御寵愛で御暮らしになるおつりなんですな。此頃ではさう云ふ方も大分あるやうで御座いますよ、昔は非國教徒の中によくありました、けふ日ちや他の人達の中にもございませよ、人は神様の御恵みさへあれば、安穩に暮らせませすからな。そんな事に僧侶様の御用はございませ

んわね。この工場にもそんな風にして暮らしてゐるものが幾人かございますが、どれも悪い人間ぢやございませんよ。」

「何てあなたは面白い事を云ふ人でせう、ターチャナ……「自由を寵愛」だつて……私はそれが大好きなの。さう／＼私あなたに訊きたいことがあるのよ、ターチャナ。私はね、お前さんのやうな、で無ければもつと極く並の服を自分で拵へるか買ふかしたいの。それから靴や頭巾や靴下もお前さんのやうなのが欲しいのよ。そんな物を買ふだけのお金は充分に持つてるのですけれど如何したらいいでせう？」

「宜しうございますよ、お嬢さま、私共がすっかり御世話いたしましたせう……おや、お氣を悪くなさらないで下さいまし。もうお嬢さまと申し上げませんから。でも何てお呼びすれば宜しうございませう？」

「マリアンナつて云つて頂戴。」

「それでお父様からの御名前は？」

「何故父稱が入るんですの？ たゞマリアンナつて呼べば宜いのよ。私があなただをターチャナつて呼ぶのと同じことすわ。」

「同じことですけれど、同じぢやございませんよ。仰しやつて下さる方が宜うございます。」

「さう、ではね、お父さんの名前はウィッケントよ。そしてあなたの御父さんの名は？」

「私の父はオシツプ。」

「では私あなたをターチャナ・オシツボウナと呼びますわ。」

「私はあなた様をマリアンナ・ウィッケンツエウと、お呼び申しませう、それなら宜うございますね！」

「お前さん私達と一緒にお茶を一ぱい上らない、ターチャナ・オシツボウナ。」

「では初めてのお知己に頂きますよ、マリアンナ・ウィッケンツエウナ。イエゴリツチに叱られるかも知れませんが、私は小さいコップで一杯頂かして下さいまし。」

「イエゴリツチつて誰れ？」

「私の夫のバーウエルのことでございます。」

「お掛けなさいな、ターチャナ・オシツボウナ。」

「どうも有難う存じます、掛けさして頂きますよ、マリアンナ・ウィッケンツエウナ。」

ターチャナは椅子に腰を下して、砂糖の片をかちりながらお茶を呑みはじめた。彼女は自分のしや

べつてゐる點から目を離さずに、絶えず指の中で砂糖の塊をくるく／＼廻はしてゐた。マリアンナは彼女と話をしはじめた。ターチャナは少しもお追従を云はずに返事をした、そして自分の方から問ひをかけた。自分の色々な意見を嚙舌つたりした。彼女はソローミンを殆んど崇拜してゐた。が、夫に對してはワシリイ・フョードチツチの直ぐ次に置いてゐた。それに拘らず彼女は工場の生活を厭はしく思つてゐるのであつた。

「こゝは町でもなければ田舎でもありませんからね……若しワシリイ・フョードチツチがゐなかつたら、一時間も斯様なところに居たくありませんわ。」

マリアンナは彼女の話に熱心に聴き入つてゐた。ネツダーノフは少し側の力に坐つて、この異性の友達をぢつと見詰めてゐたが、彼女の強い興味を別に怪しみもしなかつた。マリアンナにとつては凡ての事が珍らしかつたのである。が、彼にとつてはターチャナと同じやうな女はもう百人も見つたことがあり、斯う云ふ女と百遍も話をしたことがあるやうな氣がした。

「ねえ、ターチャナ・オシツボウナ。」とマリアンナは到頭云つた。「あなたは私達が百姓を教へるつもりでゐると思ふの？ いゝえ、私達は百姓達の手助けをするつもりなのよ。」

「如何して手助けをなさるんです。百姓達をお教へなさいましよ、それがあの人には一番善い助け

でございます。まあ私の事をお聞きなさいませよ。私がイエゴリツチと夫婦になりました時には、私は讀むことも書くことも出来なかつたのでございますよ。けれど今ちやワシリイ・フォードチツチのお蔭で覺えました。あの方は御自分で教へて下さりはしませんでしたけど、一人年寄りを雇つて教へて下さつたんです。ですからね、私はまだ若いんでございますよ、やつと一人前になつたばかりですもの。」

マリアンナは少しの閑黙り込んでゐた。

「私はね、何か商買を覺えたいと思つてゐるのよ。」と彼女は再びはじめた。「それに就いて相談があるんですよ。私は縫物が下手だから、若し料理を拵へることを知つたら、料理番になるつもりよ。」

「何故料理番なんぞに？ 料理番はお金持ちの家か商人の家にしか入りませんですよ。貧乏人は自分で料理を拵へますからね。組合だの職人達のための料理番になるのは、まあ本統に一ばん惨めな商買でございますよ！」

「でも私はお金持ちの家に住んだつて貧乏な人達とお友達になれますわ。若しそれが可ければどうすればあの人達と知合ひになれるでせう？ 私にはあんなのやうに何時も都合のいい事はありま

せんもの。」

ターチャナは空になつたコップを臺皿の上に伏せた。

「そりや難かしい仕事でございます。」と彼女は到頭溜息をついて云つた。「なか／＼手帳にはまゐりませんですよ。私は大して上手ではございませんけど、私の知つて居りますだけではすつかり教へてさし上げませうよ！ イエゴリツチと相談いたしましたね。さう云ふ相談ならあの方は持つてこいでございますから！ あの方は色々な本を讀んで、如何な事でも目叩きする間にうまく考へて呉れます。」云ひながら彼女は巻煙草をまいてゐるマリアンナをちらりと見た……

「それから未だ外に申し上げたいことがございますよ、マリアンナ。ウイッケンツエウナ、失禮でございますがね、あなたが心から平民のやうになる心算でいらつしやいますなら、それをお止めにならなければなりませんよ。」と彼女は巻煙草を指した。「例へて申しますと料理番のやうな、商買をしてゐるものはそんな事は決して致しませんよ、あなたが貴婦人だと云ふことが皆にすぐ知れてしまひますよ。」

マリアンナは窓の外へ巻煙草を投げ棄てた。

「私はもう煙草は吸ひません……こんな習慣をやめるのは造作ないことですわ。平民の女が巻煙草

を吸はないのなら、は煙草を吸つてはいけませんわね。」

「それはあなたの仰しやる通りでございます、マリアンナ・ウイッケンツエウナ。男は私共の仲間でも煙草を吸ひますけれど、女は少しも……あゝ、ワシリイ・フョードチッチがいらした。あの足音がさうでございます。あの方にお訊きになつて御覽なさいまし。どうすれば一ばん宜いかと云ふ事をあなたにお云ひになるでせう！」

彼女、云つたことは間違ひなかつた。ソローミンの聲が扉口に聞えた。

「入つても宜いですか。」

「どうぞお入りになつて。」とマリアンナは云つた。

「これは僕の英吉利風の習慣なのです。」とソローミンは入つて來ながら云つた。「どうです、まだ御退屈ぢやありませんか？ ターチヤナとお茶をあがつておらしたのですね。これの云ふ事をお聞きになつたでせう、なか／＼分別のある女ですよ……所で今日は主人が僕に會ひに工場へやつて來るさうです……何にも用がある譯ぢやありませんがね！ 晚餐まではゐるでせう。助からない譯だが、主人の事だから仕方がありません。」

どう云ふ人物です？ とネツダーノフは片隅から出て來ながら訊いた。

「あゝ普通の人間とちつとも變らない人物ですよ……子供のやうに無邪氣なね。愛想がよくつて、服にカフスをつけてゐるが、何でもかでも根掘り葉掘り鑿穿したがるところは老人の通りです。あの男は自分の手でもつて火打石を摺つて『どうだ、一寸こゝを見てくれ、まだ火の出るところがあるかな……一つ摺つて見やう！』とこんな風ですよ。だが、僕に對しては絹のやうに柔らかです。僕がゐなければ困るからです！ たゞ今日はもう多分お目にかゝりに來れまいと思ふので、それをお知らせに來たのです。あなた方の食事は此處へ運ばせませう。そしてあなた方は庭へ姿を出さないやうになさい。あなたは如何思ひます、マリアンナ——シプヤーギンはあなたを探すでせうか、あなたの居所を鑿穿するでせうか？」

「探さないだらうと思ひますわ。」とマリアンナは答へた。

「いや候はきつと探すだらうと思ひます。」とネツダーノフは云つた。

「だが兎に角。」とソローミンは續けた。「最初の問は要心しなければいけません。暫くたてば何でも思ふ通りな行動が出來ますよ。」

「さうです、たゞ一寸問題なのは、」とネツダーノフは云つた。「マルケーロフに僕の居所を知らせなければならぬ事です。あの男に知らせない譯には行きませんからね。」

「何故です」

「黨の仕事のために止むを得ません。始終僕の居所が分つてゐなければならぬんです。さう云ふ約束になつてゐるんです。けれ共彼の男は人に饒舌りはしないでせう」

「宜しい。ではパーウエルを使ひにやりませう。」

「それから僕のために服を買つて来て貰ひたいんですが。」とネツダーノフは訊いた。

「君の假装のことですかね、宜しい……承知しました。まるで假面劇ですな。だが費用の掛らない芝居で仕合せですね。ちや左様なら、ゆつくり休み給へ。ターチャナ行かう。」

マリアンナとネツダーノフとは再び二人つきりになつた。

二十八

先づ二人は再び手を握り合せた。やがてマリアンナは叫んだ。「さあ、部屋を片づけて上げませう。」そしてトランクや雜囊から彼の物を取り出し始めた。ネツダーノフは手傳はうとしたが、彼女は自分一人でするからと云ひ張つた。

「私はかう云ふ仕事の役に立つやうに馴れとかなければならないから。」云ひながら實際彼女は卓の

抽出から釘を見つけ出して、鐵槌の代りに刷毛の背中ですそれを壁に打ちつけ、そこへ彼の外套を懸けた。リンネルの下衣類は窓と窓との間立つてゐた小さい古い箆筒の上に入れた。

「これは何？」と彼女は不意に訊いた。拳銃？ 彈丸が入つてゐて？ これは何になさるんです？」

「彈丸を込めてはありません……でも此方へよこして下さい、何にするつて、我々のやうな仕事をもつた者は拳銃を持たずには暮らしてゐられませんよ。」

彼女は笑つて、その仕事を続けながら衣服を一つ一つ離して振るつたり手で叩いたりしてゐた。彼女は長椅子の下へ長靴を二足入れさへした。それから幾冊かの本や新聞の束や詩の書いてある小さい手帳やを三脚のついた三角卓に喜ばしさうに置き並べて、この三角卓は物を書いたり讀んだりする仕事机で、もう一つの丸卓は食事やお茶の卓だと云つた。繼つて彼女は兩手でその詩の手帳を取り上げて、顔のところまで其れを揚げて、その端からネツダーノフを眺めながら微笑みを浮べて云つた。「ねえ何時か忙しくない時に一緒にこれを読みませうね、好いでせう……ねえ？」

「その手帳をこつちへ下さい！ こんな物は火にくべて了ひます！」とネツダーノフは叫んだ。「燒いて了ふより仕方がない！」

「それなら何故持つていらしたの？ いゝえ、いゝえ、お燒きになるんなら渡しませんわ。作家

つてもものはいつでもそんな風に云ふものですけど、自分の書いたものを焼くやうな事はしませんわ。でも兎に角、あつちへ持つてた方が宜いわ！」

ネヅダーノフはさうはさせまいとした、が、マリアンナは草稿の手帳をもつて隣室へ歸り込んでしまつた。そして其れを置いて戻つて來た。

彼女はネヅダーノフに寄添つて坐つた、が、直ぐに又起ち上つた。「あなたはまだ……私の部屋へいらつしやらないのね……行つて見て頂戴。此處と同じやうに奇麗ですわ。さあ、來て見て頂戴。」

ネヅダーノフも起ち上つて、マリアンナに隨いて行つた。彼女が「私の」と呼んだその部屋は、彼の部屋より少し小さかつた。が、その家具は幾らか新らしく、奇麗であるやうに思はれた。窓のところに硝子の花瓶が置かれてあり、隅の處には鐵の小さい寢臺が据えてあつた。

「御覽なさい、ソローミンは何て好い人でせう」とマリアンナは叫んだ。「けれど餘り身勝手に甘へちやいけませんわね。こんな好い處にはさう度々入れるものぢやありませんから。そして私は二人が何處へ行かうとも、別れるやうな事にならずに一緒に行けるやうな計劃を立て、行かれれば好いと思つてゐますわ。なか／＼六か敷いでせうね。」と彼女は一寸言葉を途切らしてからつけ加した。「でも、それは今によく考へませう。兎に角あなたはもうペテルブルグへは歸らないでせう？」

「ペテルブルグなんぞへ歸つて何をするんです？ 大學へ行つたり出教授をしたり、もつそんな事をする必要はありません。」

「ソローミンはどう云ふ意見をもつてるか訊いて見ませう。」とマリアンナは云つた。「何をどうすれば好いか一ばん善い方法を定めて呉れるでせう。」

二人は元の部屋へ歸つて、再び寄り添つて坐つた。二人はソローミンやチャーヤナやパーウエルを稱めて話した。そして自分達の以前の生活は不意に遠く離れて、もう雲の彼方に消え去つて了つたやうな氣がすると云つた。やがて又二人は手を堅く握り合はせて、喜ばしい視線を取り交はした。そして如何云ふ種類の人々の間に喧傳の仕事をしたらば好いか、嫌疑を受けないやうにするには如何云ふ行動をとつたらば好いかと相談し合つた。

そんな事は餘り考慮しない方が好い、極く單純に行動する方が好いとネヅダーノフは主張した。

「勿論ですわ」とマリアンナは叫んだ「チャーヤナが云つたやうに、私達は單純化された人間にならなければなりませんわ。」

「僕はさう云ふ意味で云つたんぢやありませんよ。」とネヅダーノフは始めた。「僕の云ふのは無理な行動をしてはならないと云ふ事です——」

マリアンナは突然笑ひ出した。

「私は自分達のことを「單純化された人間」なんて云つたのを思ひ出したのよ、アリオシーヤ」
 ネツダーノフも笑つて「單純化された人間」と繰返した、そして聽てちつと考へに沈んだ。
 マリアンナもちつと思ひに沈んだ。

「アリオシーヤ」と彼女は云つた。

「何です？」

「私達は何だか少し耻かしいやうな気がしますわね。若いは。」と彼女は説明した。「蜜月の二ば
 ん最初の日きつとこんな風に耻かしいやうな思ひをするんでせうね。そんな人達は幸福ですわ……非
 常に満足して、少し耻かしいやうな気がするんでせうね。」

ネツダーノフは微笑んだ——無理に笑ひを浮べたのであつた。

「マリアンナ、僕等はさう云ふ意味の若い二人でないことがあなたにはよく分つてゐるでせう。」
 マリアンナは立ち上つて、ネツダーノフと差し向ひに立つた。

「それはあなた次第ですわ。」

「どうして？」

「だつてアリオシーヤ、あなたはあの時誠實な男として——さうですわ、あなたが本統に誠實な人
 だから私あなたを信じてゐるんです——或る一人が他の人に或る權利を與へて了ふやうな愛——さう
 云ふ愛で私を愛すると仰しやつたんですもの、私はあなたのものですわ。」

ネツダーノフは赧くなつて少し顔をそむけた。

「僕があなたに其れを云つた時には……」

「え、其れだから——でも今あなたは其れを仰しやらないわね……お、左様ですわ、アリオ
 シヤ、あなたは本統に誠實な人ですわ。ちや私達はもつと大切な事を話させようよ。」

「だが、僕はあなたを愛してゐるんです、マリアンナ！」

「私はそれを疑やしませんわ……そして私待つてますわ。あら私はまだあなたの書物卓をすつかり
 掃除して了はなかつたのね。此處に何だかまだ包んだ物があるわ、何だか堅い物が。」

ネツダーノフは自分の席から跳び立つた。

「その儘にしといて下さい、マリアンナ……何卒……僕に關はしないで下さい。」

マリアンナは振り向いて肩越しに彼を見詰めた。そして吃驚して彼女の眉毛を揚げた。

「秘密のものなの？ 秘密の？ あなたには秘密があるんですの？」

「え……さう。」とネツダーノフは云つた、そしてこの上もなく狼狽しながら云ひ譯のやうにつけ加へた。「それは……肖像なんです。」

この言葉は思はず知らず彼の唇から出た。マリアンナが手にしたその紙包の中には、事實ネツダーノフがマルケローフから贈られた彼女の肖像が入つてゐるのであつた。

「肖像？」とマリアンナは一つ一つ發音を引伸ばしたやうにはつきりと云つた。「……誰れか女の？」彼女はその小さい包を彼に渡した。が彼はおづ／＼其れを受け取つたので、包が彼の手を滑り落ちて、包紙が開いた。

「あら、私の……肖像だわ！」とマリアンナは口早に叫んだ。「ぢや、自分の肖像なら私が貰ふ権利がありますわ。」と彼女はネツダーノフから其れを取り上げた。

「これはあなたが書いたの？」

「いや……僕ぢやない。」

「ぢや誰れ、マルケローフ？」

「あなたの想像通り……あの男ですよ。」

「それを如何してあなたが持つてゐらつしやるの？」

「あの男が僕に呉れたんです。」

「何時？」

ネツダーノフは何時どうして自分が貰つたかを彼女に話した。彼が話してゐる間マリアンナは彼をちら／＼見たり肘像を眺めてゐたりした……二人の頭には同じやうな考へが閃めいた。「あの男が今此部屋にゐたら、それを取つて行つて了ふかも知れない……」と云ふ考へが。とは云へマリアンナもネツダーノフも口に出しては何とも云はなかつた……お互に心の中を知つてゐたのであらう。

マリアンナは再び包紙の中へ肖像をそつと包んで、卓の上に置いた。

「あの人は何て善い人でせう！」と彼女は呟いた。「あの人は今何處にゐるでせう？」

「何處につて……家にゐますよ。僕は明日か明後日本と小冊子を取りにあの男を訪ねるつもりです。僕にそれを借して呉れる約束だつたんです。でも僕が別れる時あの男はそれを忘れてゐたんでせう。」

「そしてね、アリョーシヤ、あの人がこの肖像をあなたに贈つたのは、あの人が何もかも斷念したからだとあなたは思つて？……」

「僕はさうだと思ひました。」

「それだのにあなたはあのを訪ねたいと思ひになるの？」

「えゝ勿論。」

「あゝ」とマリアンナは目を伏せて、手をだらりと垂れた。「おやターチャナが私達の食事を運んで来ましたわ。」と彼女は不意に叫んだ。「何て親切な人でせう！」

ターチャナはナイフやフォークや卓掛けや皿や料理やを運んで来た。それを食卓に並べながら、彼女は工場の出来事を彼等に話し聞かせた。

「主人はモスクワから汽車で来たんでございますよ、そしてまるで何か憑物した人のやうにあちこちへ駆け廻つてみましたよ。何がどうなつてるのかちつとも分らないんでせうけど、たゞ體面があるものですから見得でそんな事をしてるんでせうよ。けれどワシリイ・フォードチッチは赤ん坊を抱いて、どもやるやうにあの人をあしらつてゐらつしやいます。主人が何か馬鹿くしい事を云はうとすると、ワシリイ・フォードチッチは直ぐそれを押へつけて了ふのでございます。「私は今直ぐすつかり止めて了ひます。」とあの人が云ふので、主人は直ぐと調子を變へるんですよ。今一緒に食事をあがつてるんです……主人は誰れかお客様を連れていらつしやいましたが……そのお客様は何んでもかでも稱めるばかりで外には何とも仰しやらない方です。黙り込んで、頭を振つてゐる容子から考へると、あのお客様と云ふのはきつとお金持ちの人なんです。それに其の肥つた身體付と云つたら、全くのモスクワの金囊ですよ。」露西亞の何處から行つてもモスクワへは下り坂、何もかもみんなモスクワへ轉げ込む」つて諺はほんとうですわね。」

「まあ、あなたは何もかもよく氣がつくのね！」とマリアンナは叫んだ。

「えゝ、私はなか／＼目利きですからね。」とターチャナは答へた。「さあお食事が並びました。召し上つて下さいまし。私は少しの間此處で番をして居りますから。」

マリアンナとネツダーノフとは食事についた。ターチャナは窓框のところへ寄り掛つて、手に頭をもたせかけた。

「番をしてお上げいたしますよ。」と彼女は繰返へした。でも、あなた方お二人は何てお可哀相な優しい若い方なんでせう……あなた方を見ると胸が一ぱいになる程おいとしくなりますよ！ まあ、あなた方はお力に餘るほどの重荷を背負つてゐらつしやるんですものね！ あなた方のやうな方をツア一の警官は始終牢屋へ入れやうとして骨折つてゐるのでございますね！」

「そんな馬鹿な事云つて僕等を驚かさないで下さい。」とネツダーノフは云つた。單にならうと思つたら、他の同じ仲間にならなけりやならないつて諺を知つて居るでせう。」

「知つて居りますよ、知つて居りますよ。けれど此頃ぢやその籠がせまくつて、脱け出すのがなか

「大變でございますねー」

「あんたは子供があつて？」とマリアンナは話題を變へるために訊いた。

「え、息子が一人でございます。もう學校へ通ふやうになりました。娘も一人ございましたのですが、可哀相に！ 逝くなつてしまいました。飛んでもない災難で、馬車に曳かれたのでございます。それも直ぐに死んだのでございませぬ、長い間苦しませてね。それからつても私はすっかり氣が優しくなりましたんですよ、前には樹のやうに荒々しかつたんでございますけどー」

「ぢやあんたは其れまで夫のパーウエル・イエゴリツチを愛していらつしやらなかつたの？」

「まあ！それは又別の事でございますよ、娘を思ふ情愛と申しますものはねえ。そしてあなたは如何でございますか——あなたはお連れ合ひを愛していらつしやいますか？」

「え。」

「大へんに？」

「え。」

「さうでいらつしやいますか？」ターチャナはネツダーノフとマリアンナとを交るくぢろく眺め。そしてもう何とも云はなかつた。

マリアンナは再び話題を變へなければならなかつた。彼女は自分がもうすっかり喫煙を斷つたことをターチャナに話した。後者はその決心を稱めた。それからマリアンナは再び服の事を彼女に頼んだ。そして料理の仕方を教へて呉れると云つたことを彼女に思ひ出さした……

「お、それからもう一つお頼みがあるの、丈夫な粗末な毛糸を少し買つて来て下さいな。私自分で靴下を編みたいんですから……質素なのを。」

ターチャナは何もかも今に調べて上げますからと答へた。食卓を奇麗に片づけると、彼女は落ち着いた、しつかりした足取りで部屋を出て行つた。

「さあ、これから何をしませう？」とマリアンナはネツダーノフに向つて云つた。そして答へを待たずに續けた。「私達の本統の仕事は明日からでなければ始まらないんですから、今夜は文學に時間を捧げませうよ。あなたの詩を読みませう！ 私嚴格な批評家になりますわ。」

暫くの間ネツダーノフは承知しなかつた……とは云へ、到頭降参して、草稿の手帳を読みはじめた。マリアンナは彼に寄り添つて、彼の顔を見守りながら聞いてゐた。彼女はさう云つたやうに實際嚴格な批評をした。彼女を喜ばした詩は二つか三つしかなかつた。彼女の氣に入つたのは、彼女が云つたやうに、教訓的でない、純粹に抒情的な短い詩であつた。ネツダーノフの読み方は巧みでなかつた。

彼は朗讀的にやつて見る勇氣がなかつた。同時に一本調子でやつて退けることも好かなかつたので、結局どつちとも附かない讀み方になつて了つた。マリアンナは不意に彼を遮つて、「いざ死なん——それは悲しむに足らず」と云ふ句で始まつてゐるドロリーボフの素晴らしい詩を知つてゐるか」と彼に訊ねた。そして囁いて——やつぱり餘り上手でなく——幼稚な讀み方でその詩を彼に讀み聞かせた。

その詩はこの上もなく傷ましく悲しいとネヅダーノフは云つた。そして自分には墓の上に涙を注がれる氣遣ひはないから……誰れもそんな人はないから、そんな風な詩は書くことがないといつけ加へた。

「でも私があるより生き伸びてゐたら、さうなりますわ。」とマリアンナは靜かに一字一字はつきり發音した。そして天井を見上げながら、少しの間黙り込んだ後で、獨り言でも云ふやうに訝つた。「どうしてあの人の私の肖像が描けたんだらう。記憶でか知ら？」

ネヅダーノフは急に彼女の方へ振り向いた……。

「さう、記憶からです。」

この返事にマリアンナは吃驚した。彼女はたゞ獨り心中に訝つてゐたつもりであつた。

「偉いことね」と。彼女はやつぱり壓しつけたやうな聲でつづけた。「だつてあの人には繪を描く才なんぞないんです。まあ私は何を云ふつもりだつたのか知ら？」と彼女ははつきりした聲に返つた。「さ

う、さうドロリーボフの詩の事でしたわね。詩を書くならプーシキンかドロリーボフのやうなのを作らなければ駄目ですわ。これは詩ではありませんわ……そりや善いところはありますけど。」

「ちや僕の書くやうな詩は。」とネヅダーノフは云つた。「書いても全然駄目なんですわ。えゝ？」

—あなたの詩は非常に立派ではないけれど、あなたと云ふ人が立派で、皆があなたを好いてゐるか友達の氣に入りますわ。」

ネヅダーノフは微笑んだ。

「あなたは僕の詩を葬つて了ひましたね、それと一緒に僕をも！」

マリアンナは彼の手を軽くびしやりと叩いて、そんな事を云ふのは餘りひどいと云つた……間もなく彼女は疲れたからもう寢に行くと言つた。

「それから序でに。」と彼女は短い、房々とした縮れ髪を顔はせながらつけ加へた。

「私は百三十七留持つてますのよ、あなたは？」

「九十八留。」

「まあ！でも私達は單純化された人間としては……お金持ちね。ちや左様なら、明日まで！」

彼女は向うへ行つた。が、一二分すると彼女の部屋の扉がそつと開いて、狭い隙間から最初に「お

休みなさい。」と云ふ聲が聞え、やがて又もつと靜かに「お休みなさい。」と云ふのが聞えた。そして錠を廻す鍵の音がした。

ネヅダノフは長椅子に沈み込んで、手で兩方の目を掩ふてゐた……が、やがて急に立ち上つて、扉のところへ行つて、こつ／＼叩いた。

「何ですの？」の中で聲がした。

「明日まで……なくね……だが、明日！」

「明日。」とやさしい聲が答へた。

二十九

翌日朝早くネヅダノフは再びマリヤンナの部屋の扉を叩いた。

「誰れ。」と云つた彼女の聲に答へて「僕です。」と彼は云つた。「此處へ出て来ませんか？」

「ちよつと待つて……直ぐ。」

彼女は出て来ると、驚いて叫び聲を揚げた。最初彼女は彼をネヅダノフだとは思はなかつた。彼女は小さい釦のついた、胸の短い、長い裾のついた、黄色つばい南京木綿の摺り切れたやうな上衣を着

てゐた。頭髮は露西亞風に真中から分けてかき上げ、手には先の崩れた帽子を持ち、足には犢皮の磨きのかけてない長靴を穿いてゐた。

「まあ！」とマリヤンナは叫んだ。「何て……恐ろしい形好でせう！」と云ひながら彼女は素早く彼に抱きついて、一層素早く彼を接吻した。「でも何故そんな風な服装をなさるの？　まるで小商人か……行商か……家を追ひ出された家僕みたいですね。何故そんな裾のついた上衣を着るんですの、何故たゞの百姓の襦衣にしないんですの？」

「全くさうですね。」とネヅダノフは始めた。實際彼の服装は全然行商人そつくりであつた。自分でもそれを知つてゐたので、彼は心中に困惑して氣耻かしく思つてゐた。彼は兩手の指を擴げて、まるで身體をこすりでもするやうに、胸のところを撫でまはしてゐた程極り悪がつてゐた。

「襦衣だと直ぐ知れて了ふとパーウエルが云ふんです。彼が云ふには……この上衣なら、生れてから他の服を着たことの人間に見える程僕に似合ふと云ふんです！　僕は露骨に云ふと、僕の自尊心にはあまり満足でないんです。」

「あなたは本統にもう直ぐ出掛けて……始めるつもりですか？」とマリヤンナは強い興味をもつて訊いた。

「え、やつて見るつもりです。實際は……併し……」

「嬉しい方ね」とマリアンナは遮った。

「あのパーウエルは全く驚くべき男ですよ。」とネツダーノフは続けた。「あの女は一目見ただけで、もう何もかもすっかり知つてゐます。それでゐながら、まるで何の交渉もない人間のやうに不意に——何にも干渉することはないさ——と云つたやうな顔付をするんです。自分から我々の主義のために盡してゐながら、一方で全然それを馬鹿にしてゐるのです。あの男はマルケーロフの處から小冊子を僕に持つて来て呉れました。あの男はマルケーロフを知つてゐて、セルゲイ・ミハロヰキツチと彼を呼んでゐます。併しソロミンのためには水火の中へでも行きますよ。」

「そしてターチャナもさうですわね。」とマリアンナは云つた。「何故あんなにあの人達はソロミンを崇拜してゐるんでせう？」

ネツダーノフは答へなかつた。

「パーウエルが持つて来たのはどんな小冊子ですか？」とマリアンナは訊いた。

「まあ、極く普通のもんです。『四人の兄弟の話』と云ふんです……外のもやつぱり誰れでも知つてゐるやうな有りふれたものですが、一ばん善いものです。」

マリアンナは氣遣はしげにあたりを見廻はした。

「ターチャナはどうしたんでせう？ 早く来て呉れる約束ですのに。」

「参りましたよ。」とターチャナは手に小さな包みをもつて部屋へ入つて来ながら云つた。彼女は扉口に立つてゐて、マリアンナの言葉を聞いたのであつた。

「お急ぎになることはございませんよ。何も面倒な仕事ではございませんから。」

マリアンナは飛んで行つて彼女は迎へた。

「あんなに頼んだものを持つて来て呉れて？」

ターチャナは包みを叩いて見せた。

「すつかり入つて居ります……何もかも出来上つて……唯お召しになつて、皆があなたに感心するやうな晴衣で直ぐお出掛けになれるやうになつて居りますよ。」

「あ、こつちへ来て頂戴、こつちへ、ターチャナ・オシツボウナ……」

マリアンナは自分の部屋へ彼女を連れて行つた。

一人になるとネツダーノフはわざと忍び足で二三度部屋の中を往つたり来たりした……（彼は何故ともなく、かう云ふのが小商人の歩き付だらうと思つた。）彼は服の袖や帽子の裏を用心深く匂ひを嗅

いで——顔をしかめた。窓側の壁に懸つてゐる小さい鏡に自分の姿を映して見て、頭を振つた。まさしく非常に見すばらしい姿であつた。「だが、この方が好いんだ。」と彼は思つた。騙て彼は幾冊かの小冊子を取つて裾の衣兜へ突込んで、小商人の口調で二言三言獨りで物を云つて見た。「きつとこんな調子だらう。」と再び彼は考へた。「だが、わざ／＼そんな所作をする必要はない、この服装がうまくやつて呉れるだらう。」かう思ひながらネヅダーノフは或る獨逸人の囚徒がうまく露西亞から逃げ出した話を思ひ出した。その囚徒は露西亞語がうまく話せなかつたのであるが、彼が何處か田舎の町で買つた猫の皮の縁をつけた商人帽を被つてゐたお蔭で、うまく國境を抜け出ることが出来たのであつた。その瞬間ソローミンが入つて來た。

「あゝ、兄弟アレキセイ。」と彼は叫んだ。「君の持ち役の研究中だね！ 失禮だがね、兄弟、その扮装だと君を尊稱で呼ぶわけにはいけないね。」

「おゝ、尊稱でなく呼んで下さい……アレキセイと呼び捨てに。」

「だが、まだ大いに早過ぎますよ、だが、だん／＼馴れるでせう。馴れてからさう呼ばいよんです。だが、君はもう少し待つて呉れないと可けませんよ。主人がまだ歸らずにゐるんです。寢てゐるんです。」

「もつと後で出掛けることにしませう。」とネヅダーノフは答へた。「僕は或る命令を受けるまでは近くを歩き廻るつもりです。」

「それは結構です。たゞ僕は云つとかなければならないがね、兄弟アレキセイ……ちやアレキセイと呼んでも好いんですね？」

「えゝ、アレキセイとでも何とでも。」とネヅダーノフは微笑みながら云つた。

「いや、餘りわざとらしくしちや可けない。所でね！ 善い相談は金よりも大事だと云ふ諺のやうに相談しときたい事があるんです。君はそこに小冊子を持つてゐますね。そいつを誰れにやつても宜いが——この工場の者に配つてくれては可けませんよ。」

「何故いけないんです。」

「何故つて、第一に君にとつて危険だからです、第二に僕はさう云ふ事は決してしないと云ふ誓約がしてあるからです——詰り工場はあの主人のものですからね。それから第三に、僕等は既に——學校やその他の——計劃を立てゝゐる……それを君が破壊してしまふことになるからです。君はどんなにも欲する通りに行動したまへ。併し僕の職工には觸れないで呉れ給へ。」

「ふむ……要心するより善いことはないつて奴ですか？」とネヅダーノフは半ば底意地悪い微笑みを浮べながら云つた。